
返信

八町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

返信

【Nコード】

N6229M

【作者名】

八町

【あらすじ】

勇樹と正人、さゆりの三人はバンドを組んでいた。そして、さゆりの友達、奈々枝と文江はいつも練習とライブに顔を出していた。勇樹はいつしか奈々枝に恋心を抱くようになる。そんな淡い青春時代を思い出した、一人の男のお話です。

春の埃っぽい空気の中、勇樹は、校庭の端っこで地面に座りながら、近くにあった小石を一人で投げていた。石を投げたその先では陸上部の部員がダッシュを繰り返して、さらにその先ではサッカー部がセットプレイングの練習を繰り返している。

時折、野球部のボールが勇樹の脇を通り過ぎ、壁に鈍い音をたててぶつかっていた。そのたった一つのボールを争うように、何人もの新入生が駆け足でやってきては、ボールを取ると上級生のもとへ返した。

勇樹は、そのうち小石を投げることをやめ、黙って野球部の練習を見ていた。監督がノックをし、選手がそれに飛びつく。取れなければ監督に叱られ、周りの連中が掛け声を掛ける。バッティング練習では、金属音とともに鋭い打球が飛ぶ、かと思うが、弱小高校ではそんな当たりはそうは見られない。

脇のピッチング練習を見ると、エースと思われる生徒が力一杯ボールをキャッチャーに向かって投げている。しかし、山なりのボールが、さびしい音を立ててキャッチャーミットに収まる。

勇樹は、それを脇目に見ながら立ち上がると、服についた土を振り払おうともせず、ゆっくりと中庭の方へ歩き出した。

「勇樹、ここにいたのか。探したよ」

それは山田正人の声だった。正人は、中学時代に勇樹とバッテリーを組んでいた同級生だ。勇樹はピッチャー、正人はキャッチャーだった。

「どうしたんだ」

気だるそうに勇樹は、正人の方を見た。

「勇樹、お前、もう野球やらないんだろっ」

その理由はお前が一番よく知っているんじゃないか。勇樹はそう思いながらも、正人の方に歩いて行った。

「どうだ、俺と音楽やらないか」唐突に正人が勇樹に言った。

音楽？確かに正人は、野球というよりそっちの方に興味があつたのは知っている。いつだったか、試合中に「おい、勇樹、ここはエイトビートで三振にとろうぜ」と訳の分からないことを言っていたのも覚えている。

「音楽ねえ。まあ、どうせ、俺にはもうなにも残っちゃいないんだから、お前が言うのなら、付き合っつてやってもいいよ」深く考えることもなく、勇樹は返事をした。

「そうか、そいつはいい。お前ギターは弾けるよな。それに歌も上手いしさ。一緒にやろうぜ」

正人は、キラキラと目を輝かせた。正人とは、中学三年間同じクラスだったし、一緒にギターを弾いたり歌も歌った記憶もある。確かに、勇樹は正人より歌が上手いのは間違いない。と言うより正人は歌はからきしダメだ。

「ああ、いいよ」

勇樹はポケットに手を突っ込んだまま答えた。

「それじゃ、水曜日の四時に俺んちに来いよ」

正人は、手にメモのようなものを持っていった。

「おい正人、それなんだよ」勇樹はそのメモを覗き込んだ。

「これが、これはメンバーのリストさ。俺だろう、そしてお前、後はいない」

そのメモには、俺・ギター、勇樹・ボーカル・ギターと、書いてあつた。

「おい、二人だけかよ」

「すぐメンバーが見つかる訳はないだろう。まだ時間はあるんだ。ゆっくり探すさ」

勇樹は、別に音楽をやりたいなんて思っていなかったが、せつかく高校に入つて、なにもやらずに三年間過ごす気もなかったので、まあ、いいさ、いろんなことにチャレンジしてみるのも悪くない。そんな気持ちで正人の顔を見ていた。

約束した水曜日に、勇樹は自転車に乗り正人の家に向かった。正人は家の前に出て勇樹を待っていた。

「随分早いな、気合十分だな」正人が勇樹を見ると言った。

「お前こそ、野球部の練習の時は、いつまでも出てこなかったくせに、人のことは言えないさ」

「さあ、行こう」

正人は自転車にまたがり、道路に飛び出すと勇樹を手招きした。

「おい、どこに行くんだよ」

勇樹も正人の後を追っかけた。

「ボイスって言う喫茶店さ」

「喫茶店？なんで喫茶店に行くんだ」

正人に追いついて勇樹は聞いた。

「その喫茶店で、月一回ライブをやってるんだ。喫茶店だから、ドラムとかは置けないみたいだけど、今の俺たちにはピッタリじゃないか。そこで修行しようと思ってさ」

正人が言うには、ボイスでは社会人が作っている音楽村というサークルが毎月一回ライブをしているらしい。そして今日はそこに、音楽村のリーダーが来るとのことだった。

「なんでお前がそんな人と知り合いなんだ」

「俺、高校に入ったら絶対音楽やる！って決めてたんだ。だから、いろんなところに声掛けたのさ。そしたら、ボイスの店長が、話をつけてくれたんだ。ボイスの店長は、俺の一番上の兄貴と高校で同級生だったんで、うまく話がまとまったよ」

たいしたもんだこいつは。キャッチャーをしているときは、しゃがむのも面倒くさいといった感じで、サインは直球三球、次はカーブが一球とお決まりのリードしかなかったのに。このくらい真面目にやってくれば、全国大会にだって行けたかも知れないじゃないか。勇樹は苦笑いをした。

勇樹は、「いいよ」とは言ったものの、こんなに本格的に音楽を

やりたいと思つた訳ではなかった。しかし、自転車で並んで走っている正人の顔を見てみると、とても、そんなことを言える雰囲気ではなかった。

その喫茶店は繁華街の裏、映画館に面した通りの二階にあつた。

繁華街といつても、人口十万人程度の田舎町じゃ、自転車で走れば五分もあれば一周してしまうくらいなのだが、勇樹はこんなところにはめつたに来なかつたし、来るとしても家族と一緒にだったので、なんとなく、おどおどしながら自転車を道路脇に止めた。

しかも、勇樹は喫茶店なんて言う大人の入る場所に、初めて行くこともあつて、緊張で手が震えてきた。しかし、それを見られて正人にバカにされなくなかつたので、そんなことを悟られないよう、「さあ行こう」と元気良く言った。もつとも、最初に正人に行かせ、勇樹は後をついて行つたのだが。

木製の茶色いドアを開けると、中からぷーんとコーヒーの匂いが漂つてきた。その匂いを嗅いでいるうち、勇気は緊張が解けてきた。そんなに広くはない店の中は、ダークブラウンで統一されていた。ライブと言つても、ギョウギョウ詰めで四十人も座ればいい方だろう。

店の片隅にいたサングラスを掛けた男性が、正人を見つけると手を上げた。

「おー正人。こつちだこつち。そこに座れ」

「失礼します！」野球部上がりの二人は、大きな声で椅子に座つた。男性は、そんな勇樹と正人がおかしかつたのか、タバコの煙を吐き出すとき、鼻から吹き出して笑つた。子供扱いされているみたいで、勇樹はまた緊張してきた。

正人が右ひじで勇樹の腕を突つついた。正人を見ると、目は勇樹を見たまま、あごで男性の方を指した。

ああなるほど、あいさつしろつてことか。勇樹は目で分かつたと

頷くと、立ち上がった。

「向井勇樹です！」ペコリと頭を下げ、また椅子に座った。

男性は、下を向いて笑いかみ殺していた。やばい、完璧にバカにされている。勇樹はさらに緊張してしまった。

「俺は、天田って言うんだ。この店の店長で、正人の兄貴と同級生さ。しっかし二人とも元気はいいな。まあ、若いうちは元気がないりゃなにも出来ないけどな。何かをやらなきゃ、人間成長しないものさ。若いとき閉じこもってばかりじゃ、ろくな大人になる訳がない。たまにやけどしたっていいじゃないか、やけどしなきゃ、熱い、痛い分らないものさ」

天田は正人と年の離れた兄貴の同級生で、父親はこの町でレストランや飲み屋を経営していた。そして、この店は天田が任されていたのだ。

鼻をフンフン鳴らしながら天田が語っていると、「お前は、昔からやけどばっかりしてるけど、熱い、痛いが分かっているとは思えないな」髪をビートルズカットにして、ジーンズにTシャツを着た、三十才位の普通のおじさんが、勇樹と正人の前に座った。だが正直、ビートルズカットが似合っているとは、お世辞にも言えない顔立ちだと勇樹は思った。

「大森さん、来てたんですか、言ってくればいいのに」

「客が来たら気づくのが普通だろう」

大森は、勇樹と正人の方を見て、「お前たちコーヒーでいいか」と聞いてきた。二人はこくつと頷いた。勇樹が隣を見ると正人も緊張しているように見えた。

「じゃあコーヒー三つ」大森が天田に注文した。そして、緊張する二人を向いて言った「俺は音楽村の大森って言うんだ。一応リーダーと言う事になっているけど、みんな村長って呼んでいる・・・あれ受けなかつたか」

勇樹と正人が緊張していなくても受ける話ではないが、緊張をほぐしてやるうという気持ちは二人に伝わった。

「君達、ここでライブをやってみたいのかい」

くちやくちやになったタバコを、ズボンのポケットから取り出しながら大森が二人に聞いてきた。

「はい」正人が緊張しながら答えた。

「いいだろう。君たちの入村を認める」

「えっ、本当ですか」正人が身を乗り出した。

「本当だ。ただし、三ヶ月間はここでみんなのライブを見て、その後で君たちのテープ審査を行って、ライブに出すかどうか決めるから。それでいいか？」

「はい！」正人は嬉しそうに返事をした。

「だけど、見ての通りここは狭いので、演奏できるのは三人が限度だ、だから、本格的にバンドをやりたいなら、別なところを紹介してやるが、俺のところでもいいのか」

「はい、とりあえずお願いします」正人は正直に返事をした。

「とりあえずな・・・ははは、正直でよろしい。まあ、今はコンピユターもあるから、結構厚めのサウンドをやってる人間もいるし、ここで修行するのも悪くないさ」

「あの、音楽村って、どんな人達がいるのですか」正人が聞いた。

「全員社会人さ。高校生は君たちが初めてだ。市役所の職員もいれば、農協職員もいる。ちなみに俺は自営業だ。今、活動しているのは五組。ただ、仕事やらなにやらで、ライブは三組も出ればいい方なんだ。だから君達にも十分チャンスはある、頑張れよ」

「はい」正人の勢いに押されて「はい」と勇樹も返事をした。

「じゃあ、来週の水曜日、七時からライブやるんで、見に来てくれ」
コーヒーが運ばれてきた。大森はブラックでコーヒーを飲んだ。
隣を見ると正人もブラックでコーヒーを飲んでる。

よし、俺もブラックでコーヒーを飲むぞ。勇樹はコーヒーを口に含んだ・・・うげっ、にがっ！しかし、そんなことは顔に出さず、舌が麻痺している間にコーヒーを飲み干し、後は水を飲んで大森の話聞いていた。

「しかし、君達の頃は何にでも興味があるだろうな。まだ、タバコを吸ったり、酒を飲んだりはしないだろうけど、そのうち、悪さもしたくなると思うよ」

「大森さん、何の話をしているんですか」脇から天田が口をはさんだ。

「俺は、こういう若者が好きなんだ。だから、ちよつとっておきたいのさ。君達、大人ぶりたい気持ちは分かる。だがな、タバコを吸っても、酒を飲んでも大人になる訳じゃない。どんなに大人のように見せても、見る人が見ればメツキは、はがれるもんだ。君達の頃は、分からないものは分からない、出来ないものは出来ない、好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、ブラックコーヒーは苦くて飲めないって、はっきり言った方がいいぞ。メツキをしていない若者の方が、ずつと素敵だと俺は思ってるよ」

勇樹はドキツとした。この人、俺がブラックコーヒーが苦かったっていうのを当てたよ。こんな風貌だけど、本当は凄い人なのかも知れない。勇樹はおそろおそろ聞いてみた。

「あー、どうして僕が、ブラックコーヒー苦かったってというのが分かったんですか」

一瞬の間があつて、大森は大笑いした。

「ははは、そうか、苦かったか。いや、ものの例えで言ったただだよ。でも、そうか苦かったか」

横を見ると天田も笑っていた。

「そう言う風に物事に対して素直になれって、大森さんは言ってるのさ。そのうち、コーヒーの味も分かってくるよ」

勇樹が正人を見ると、正人も笑っているではないか。お前にだけは笑われなくなかった。

喫茶店を出て二人は自転車を押しながら歩いた。

「俺、がぜんやる気が出て来たもんね」正人の声はいつもより高く響いていた。

「そうだな、俺も頑張ってみるよ」

「頑張ってみるよ、じゃなくて、頑張るぞ、だろう」正人が勇樹に
噛み付いた。

「大丈夫だよ、やる気を見せた時の俺の根性は、お前も知っている
だろう」

「そうだな。それは俺が一番知ってるさ。ひょうひょうとしていな
がら、一番頑張っていたもんな」

「そうそう、人に努力の跡は見せないのが、俺のやり方なんだ」

「勇樹、お前、レフトの高木がエラーして県大会で負けたとき、ぐ
ちやくちやに泣いている高木に、気にするな！俺達みんな頑張った
じゃないか、って慰めていたけど・・・」

「ああ、あれは、高木のせいで負けた訳じゃない。どう見ても相手
の方が実力は上だった。あれで延長になっても勝てる相手じゃなか
った」

「お前、あの時、一番最後までグラウンドに残ってたよな」

「忘れちゃったよ」

「俺が便所から出てきたら、お前がグラウンドに一人でいたのを見
つけたんだ。お前あの時泣いてたっけ」

「なんだ、見てたのか」

「監督が、帰るぞ！って言って、何事もなかったようにみんなのと
ころに来てたけど、本当は、悔しかったんだらう？」

「いや、違う。もうこれで、みんなと同じチームで戦うのが出来な
いんだと思ったら、急に寂しくなってきた。つらい練習して、声掛け
合ってやってきた連中とさ・・・正人、急になんてそんなこと聞
くんだよ」

「なあ、勇樹、俺達、高校生活で悔いのないように、頑張ろうぜ」

正人は、そう言つと自転車に乗って帰って行った。勇樹は正人の
後ろ姿をしばらく見ていた。春の風は少しだけ寒さを残しながら、
勇樹の周りをぐるぐると回るように吹いていた。

二話

「おい、兄ちゃん達、ちよつと手伝ってくれないか」Ｔシャツに鉢巻姿、ヒゲを生やした顔がどことなく愛嬌のある、吉田と呼ばれていた男が勇樹と正人を呼んだ。この男は楽器店「音符」を営んでいる、ボイスで開催される音楽村のライブの度に、スピーカーやアンプを設置しにきているらしい。

言われるがままに、スピーカーを運び、線を繋ぎ、ようやく二人は解放された。

「はい、お疲れさん」天田がアイスコーヒを持ってやってきた。

「そこに、ミルクとシロップがあるから好きなだけ入れていいぞ」そう言つて、テーブルの上にアイスコーヒを置いた。

正人はケラケラ笑っていたが、アイスコーヒを一口飲んで「これはだめだ」と言う顔を見ると、ミルクとシロップをどっさり入れた。当然、勇樹もミルクとシロップをどっさり入れてアイスコーヒを飲んだ。

「おい、こつちも手伝ってくれ」大森が二人を呼んだ。大森は喫茶店のテーブルを片付けていた。テーブルを片付けて、椅子を並べるようだ。

徐々に狭い店内が、手作りのライブハウスに変身してくのを見て勇樹と正人は軽い興奮状態になって行った。

ライブ中二人は、後ろの方で立ちながら音楽村のライブを見ていた。今日は二組が演奏した。それぞれ四曲ずつ、時間にして一時間ほどだっただろうか、二人にすればあつと言う間に終わった感じだった。

正人はすっかり興奮していた。

「おい、俺達もあそこで演奏するんだぞ。わくわくしないか」

それを何回も勇樹に向かって言った。勇樹は、俺たちに来るだ

るうか、そういった不安の方が先に立ち、「まあな」とかしか言えなかった。

後片付けを手伝っていると急に女の人が正人に声を掛けた。

「正人じゃない!」

「あれー、さゆりさんじゃないですか。ライブ見に来てたんですか」
「そうよ。どうして正人が手伝っているの」

年の頃で言えば、そうだな、分からないが、多分俺達より年上だ。社会人かも知れないな。いずれにせよ、正人の恋人ではないようだ。勇樹はちよつと安心した。

「へへ、俺、音楽村に入ったんですよ」

正人は自慢げに話した。

「本当!じゃあ、今度ライブやるの?」

「まだ決まった訳じゃないんですけど、頑張りますよ」

「いいなあ、あたしも出たい」

「そうだ、さゆりさんキーボードやってましたよね。どうですか、俺達と一緒にやりませんか」

「えー、いいの?」

「さゆりさんなら全然OKですよ」

「実は、あたしもやってみたかったんだけど、全然メンバー見つからなかったんだ。ねえねえ、本当にいいの?」

「いいっすよ。大歓迎っす。おい勇樹、ちよつと来いよ」

勇樹が側に行くのと、さゆりが言った。

「あー、やつぱり勇樹じゃない。変わったねー」

勇樹はさゆりの顔を覗き込んだ。そして、ん、と首をかしげた。

「忘れちゃったのー、ほら、私テニス部だったから、いつもグラウンドの隣で練習してたじゃない」

「えーつと、二つ上でしたっけ?」

「違うわよ、あなたたちの一つ上よ」

勇樹は驚いた。とても一つ上には見えない。さっきは社会人かと思っただくらいなのに。高校生になると、一つ違うだけでこんなに大

人っぽくなるものなのか。

「ああー、思い出した。さゆりさんだ」

「そうそう、思い出してくれた、良かった・・・と言う事は、正人と勇樹で音楽村に入ったの？」

「そうです。俺と勇樹と、さゆりさん入れても三人なんです」

「いいじゃない。三人でも、とりあえず三人で頑張ろうよ」

さゆりも大分乗り気なのか、正人と二人であれこれ話していた。勇樹は黙ってそれを聞いていたが、これは、もう後には引けない。ここまで来たらやるしかない。と覚悟を決めた。

よく見るとさゆりの後ろには、二人女の子が並んで立っていた。一緒に来た友達だろうか。二人は二人でなにか楽しそうに話していた。そこへさゆりが割って入った。

「紹介するわ。彼女が坂井文江、こつちが内山奈々枝、高校の同級生なんだ」

「はじめまして、俺、正人っていいます。こつちは勇樹」正人があいさつした。

「あのね、この二人中学の後輩なんだけど、音楽村に入ったんだって。それで、私も一緒にやることにしたの」

「えー本当、すごいじゃないの」

文江は舌足らずな、ちよつと鼻にかかった声で言った。奈々枝は黙って笑っていた。

「じゃあ、正人、携帯の番号教えてよ」

「いいつすよ、はい」

「勇樹のも教えて、うん分かった。後で連絡頂戴。じゃねー」

三人が店を出て行くの待ってから、正人が勇樹に顔を近づけた。

「おい、俺達にも、運が向いてきたぞ。女までついて来るとはな。

しかも、奈々枝さん見たか、この辺じゃあんな可愛い子はいないぞ。これから先楽しみだぜ」

だめだ、完全にいかれてる。こういう時は正人には何を言っても無駄だ。勇樹は正人を放っておいて、さっさと後片付けを終わらせ

た。

最後に、大森、天田、吉田、そして今日演奏した人達に、挨拶をして二人は店を出た。

店を出ると正人は、早速さゆりに電話をした。

「今週の、土曜日どうですか。そうですか、じゃあ場所は、えっ、いいんですか。それは助かります。それから、さっきの二人にも声掛けて下さいよ。いえ別に、その、ギャラリーもいた方がいいかなと思つて、ええ、じゃあ土曜日三時から、楽しみにしてます」

正人は満面の笑みを浮かべて、勇樹の左肩をパシんと叩いた。

「奈々枝さんにも声掛けるってさ」

「お前さ、女が目当てなのか、音楽やりたいのか、どっちなんだ？」
勇樹は呆れて言った。

「女の子がいた方が、本気になれるってことさ。プロ野球の外人選手つて、奥さんが見に来ると、ホームラン打ったり、完封したりするだろう。それと同じ。俺も奈々枝さんが見ていたら、がぜん張り切っちゃうもんね」

「正人、冷静になれ。さっき、さゆりさん見て、すごい大人になったと思わなかったか？俺なんか社会人かと思つたもん。おそらく奈々枝さんもお前みたいなガキは相手にしないさ」

「何を言っているんだ。あそこは女子高なんだぜ、俺にも十分チャンスはあるさ」

「にやにやしながら正人は自転車に乗り、それじゃ、と言って颯爽にペダルを漕いで行ってしまった。

勇樹は自転車に乗りながら、自分の初恋の人を思い出していた。実は初恋の人には、中学二年生のとき告白されたことがあった。ラブレターを貰ったのだ。でも、その時はクラスも違つたし、話したこともなく、誰だっけ？と言うくらい、目立たない子だったので、他に好きな人がいることにして、その子をフツたことがあった。

中学三年のときにクラスが一緒になり、修学旅行の班も同じで、

席もよく隣になった。おとなしい子だったが、がんばり屋で、やさしくて、笑顔が可愛かった。そして、勇樹は徐々にその子にひかれていった。

まいったな、あの時フツてなければ、と思ったが、今さら好きだとも言えず、勇樹は精一杯、普通に接した。その子も、勇樹にフラれたことなんてなかったように、勇樹には普通に接していた。しかし、それが、勇樹にとっては、たまらなく、もやもやしたものを感じさせていた。

でもバレンタインの時、その子から勇樹はチョコレートを買った。それも二人しかいない教室で。その時勇樹は、今までのもやもやを振り払おうと「君が好きだ」と言おうとした。しかし、それを言う前に、「勇樹君にはお世話になったから」と言われたので、勇樹は「ありがとう」としか言わなかった。

卒業式の日、みんなで校門の前でうるうるとしていると、その子が勇樹の方に近づいてきて、「勇樹君、ありがとう。最後に握手して」と手を差し出した。勇樹は、「うん」と言うのと右手を差し出して手を握った。

勇樹はしばらく手を握っていた。その子もなにも言わずに勇樹の顔を見つめて手を握っていた。

周りから、ヒューヒューと声が上がったので、はっ、と気づいてそっと手を離れた。その子は、「さよなら」と笑顔で言うと、人垣の中に消えていった。それが勇樹が彼女を見た最後となった。彼女は、親の転勤の都合で学区外の高校を受験していたのだ。

それは、ついこないだの出来事だ。でも、その時と今では、ちょっと大人になった自分を勇樹は感じていた。過去はやり直せないが、あの時あすれば、こうすればと考えることはできる。そして、勇樹は、誰もいない教室で、好きだと言えばよかった、と思っただけ。きつと彼女も自分のことが好きだったはずだと。

過去を振り返らなければ経験は見えてこない。どんな貴重な経験をしても、それを生かさなければ進歩はない。

天田さんの言うとおり、いろんなことをするのも必要だろう。正人みたいに、あれもこれも手を出してみるのも必要なのかも知れない。それを生かすも殺すも、自分次第だ。

勇樹は力強くペダルを踏み、スピードを上げた。春の夜風はまだ冷たかったが、勇樹は、ペダルを踏む毎に暖かい風になってくるような感じがしていた。

三話

勇樹と正人は、さゆりの家の隣にある倉庫で、ギターのチューニングをしていた。そこへ、さゆりが入ってきた。

「本当にここ使っているの？」

正人はさゆりが入ってくるなり尋ねた。

「いいよ。お父さん新しい倉庫作ったから、好きに使っていいって言ってた」

さゆりの父は会社を経営していた。今まで、ここは会社の事務所兼倉庫として使っていたのだが、事務所も移し、その近くに大きな倉庫も建てたので、ここは不要になった。倉庫の中は自転車や、タイヤが置いてあり、今は家の物置として使っている。

勇樹と正人は置いてあったパイプ椅子に座り、さゆりは、昔使っていたという学習机にキーボードを置いた。

「よし、じゃあ最初はミスチルから行こうぜ、それともチャゲアスにしようか」

正人は持ってきた楽譜をペラペラとめくり始めた。

「じゃあ、ミスチルで行こう」

勇樹は自分の知っている歌をギターで弾いて歌ってみた。

「こりゃだめだ、サビの所は、全然声が出ないや」

「でも、勇樹、結構上手かったよ。もつと練習すれば、高い声も出るようになるんじゃない」

「正人、お前歌えるか」

「頼む、俺は歌はだめなんだ。知っての通り」

正人は、それだけは勘弁してくれと言った顔で、さゆりと勇樹を見た。「さゆりさんは？」勇樹が聞いた。

さゆりは右手の指をピンと伸ばして、顔の前に垂直に立てた。どうやらダメらしい。

「まいったな、今の俺じゃ無理だな」勇樹は頭をかいた。

「大丈夫、キーを下げればいいのよ」さゆりが言った。
「キー？」

「そう、勇樹が歌えるところまで、キーを下げればいいの。ちょっと待ってて」

さゆりは赤ペンを持ってきた。

「勇樹、一番高い声を出してみて」

勇樹は、言われたとおりに声を出した。

「この辺かな」さゆりはキーボードを叩いて音を出した。「じゃあ、もう一回」勇樹は声を出した。

「ちょっと借りるね」さゆりは楽譜を取ると、なにやら赤ペンで書き始めた。勇樹と正人はしばらく黙ってそれを見ていたが、正人が勇樹に小声で聞いてきた。

「勇樹、奈々枝さんは来ないのかな」

「今いないってことは、来ないんじゃないの」

「そうか、残念だな、ちくしょう」

正人はむちゃくちゃにギターを弾いた。

「ちょっと、うるさいよ」さゆりは楽譜から目を離さず冷たく言った。二人は舌を出して顔を見合わせた。

さゆりは、はっきりした話し方から、姉さんタイプの人間のような。髪も短くカットして、そのさっぱりとした性格にはよく似合っている。この人とならうまくやっていけそうだ。と勇樹は思った。

「出来た！これでいいと思うけど」さゆりが勇樹に楽譜を渡した。

そこには、赤ペンでコードが書いてあった。

「そのコードでギターを弾いて、それに合わせて歌えば、今の勇樹でも歌えるよ」

「本当ですか。でもこれ結構難しいコードですね」

「楽譜の一番最後にコード表が載ってるから、それで練習してみてくださいあ、あたしと正人はこっちで練習しよ」

勇樹は倉庫の片隅で一人コードを覚えながらギターを弾いていた。時折、正人の弾くギターの音とキーボードの音が耳に届いた。勇樹

はなにか新しい一步を踏み出したみたいで、指先が痛くなるのも忘れてギターに熱中していた。

この倉庫の中には、なにか新しい世界への鍵があるような、扉を開ければ、わくわくするような世界が広がっているような。俺、こんな気持ちになったの初めてだよ。勇樹は、一種身震いするような快感を感じていた。

午後三時から練習して、あつと言う間に二時間が立った。

「ねえ、今日はもう終わりにしない？」

さゆりが勇樹に声を掛けた。勇樹は、はっと気がついたように顔を上げた。

「勇樹さつきから聞いてたけど、かなり上達したよね」

「そう思います？」

「そう思う」

「俺も、そう思う」正人も頷いた。

「じゃあ、ジューズでも買ってきますか」勇樹が外に出ようとしたところで、さゆりが止めた。

「勇樹、間もなく友達がジューズ持つてくるから大丈夫だよ」

それを聞いて正人は目を輝かせた。

「友達つて、そうか、そうですよね」一人でうんうん言いながら正人の顔はにやけている。

「ゴメン、遅くなって」

奈々枝と文江が、手に袋を持って倉庫の中に入ってきた。勇樹は正人が奈々枝を見た時の反応が見たくて、正人を見た。

「だらしねえ。お前のその顔は俺が見た中で一番だらしねえ。急に椅子とテーブルなんか用意して、汚いハンカチ出して椅子を拭きやがって。」

でも、お前は憎めないな。そういう単純な所は嫌いじゃない。うらやましいくらいだ。それに、お前に誘われなければ、自分の未来の鍵も探せずじまいだったかも知れないし。

勇樹が、そんな正人を見ていると「さあ、皆さん座って下さい。何

飲みます？オレンジジュースですか。はいどうぞ。おい勇樹、なに笑ってるんだよ。お前も座れ。」と命令口調で言われた。

勇樹は、急に場を仕切りだした正人がおかしくて仕方なかった。

「勇樹、なに笑ってるの？」さゆりが聞いた。

「いえ、別に」勇樹はさゆりの脇に座った。「お前は何飲むんだ？」正人が勇樹に聞いた。

「俺、コーラがいいな」

「コーラ？坊やにはコーラはまだ早いんじゃないか」正人は紙コップにコーラを注ぎながら毒づいた。いつもなら、うるせい、とでも言う所だが、勇樹は、奈々枝が来て急に張り切りだした正人がおかしかったので、なにも言わずに紙コップを受け取った。

席は、勇樹の左隣にさゆり、向かい側に右から正人、奈々枝、文江となった。正人は、もうそこに座ると決めていたのだろう。

勇樹は、会話をする度に椅子をずらして奈々枝の方に近づいていく正人に気が付いていた。そんな正人を見ると、もう勇樹は笑いかみ殺すのは限界に近づいた。

「ねえ、勇樹君、さっきから何も話さないでニコニコしてるけど、なにか楽しいことでもあったの？」舌足らずな口調で文江が聞いた。文江は、髪を三つ編みにして、オレンジのメガネをかけ、アニメの声優のような声が特徴的だ。

「いえ、別に、なにもないですよ」

「分かった。音楽やってて、楽しくて楽しくてしょうがないんですよ」奈々枝が言った。奈々枝は髪が肩まで届くか届かないくらいで、顔に似合わずはつきりとした口調で話した。顔立ちは整っていて、確かに正人が一目ぼれするのも勇樹には理解できた。

「そうですね。いや、本当に楽しいですよ」

「いいなあ、なにかに打ち込めるって、うらやましいよね」奈々枝が言った。

勇樹がコーラを一口飲んだとき、ふと正人と目が合った。正人は勇樹を睨んでいた。勇樹の我慢の限界はそこで超えた。

「ぶーっ」と音を出して、床にコーラを吐き出してしまった。

「うわ、キツタネ！」正人が叫んだ。さゆりたちは笑っていた。勇樹はもう笑いをこらえられず、しばらく、下を向いて笑っていた。

「勇樹、お前、ちゃんと拭けよ」正人が言った。

「あたし、雑巾とつてくる」さゆりが雑巾を持ってきた。勇樹はそれを受け取ると床を拭いた。

「さゆりさん、水道はどこにあるんですか？」勇樹が聞いた。

「いいよ、そこにおいて」

「いいですよ、俺、絞ってきますから」

「じゃあ、ついてきて」

倉庫の裏手に水道はあった。勇樹が雑巾を絞っていると、「勇樹、なに笑ってたの？」と、さゆりが半分にやけながら勇樹に聞いた。

「いえ、別に」勇樹はとぼけた。

「正人のことでしょうか」

「知ってたんですか」

「あれだけ露骨にやれば分かるでしょう。もともと、あんた達の会話も聞こえてたから、そんなことだろうとは思ってたけど」

「あいつ、単純だから」

「でも、奈々枝はああ見えてガード固いからね。今まで結構いろんな男が言い寄ったみたいだけど、ことごとく玉砕してたよ。どうして、二、三回会っただけで、その人を好きになれるの？っていつも言ってた。まあ、女子高だから、そんなに会い合いは多くはないし、そんなことを言ったら、男なんて出来ないじゃん、てあたしは言ってるんだけどね」

勇樹は雑巾をぎゅっと絞った。「よし、この雑巾どこに置けばいいですか」

「その辺にかけてくれればいいよ。ねえ勇樹、戻ったら席替えたほうがいいよね」

「そうしましょう」勇樹はさゆりの提案に同意した。

「正人、あんたこっちに座って」楽しく奈々枝と話していた正人は、哀れにもさゆりに「あんた」呼ばわりされて、さゆりの座っていた場所に座らされた。そして、さゆりは文江と奈々枝の間に座った。

それからこの四角いテーブルは、ちょっとした変更はあったが、いつもこの順番で座ることになった。

四話

三人で練習を始めて、二ヶ月がたとうとしていた。毎週水曜日と土曜日には練習をした。

相変わらず、奈々枝と文江も顔を出していた。最初は練習が終わる頃来ていたのだが、いくらうちの娘がじゃじゃ馬とは言え、女一人と男二人ではいくらなんでも、とさゆりの母が言ったこともあり、今では、最初から顔を出すようになった。まあいわゆる番犬のようなものだ。

勇樹のギターも、歌も、最初の頃から比べれば格段に上達していた。他の二人も同じように、上達したのは言うまでもない。

音楽村のライブにも当然、顔を出していた。こないだ、そろそろ録音したやつ持って来いと、大森さんに言われたので、今日は二曲程録音することになっていた。

先週、演奏を録音したので、今日は勇樹が歌を入れて完成だ。録音はさゆりの家で使っているカラオケセットを使った。

「じゃあ、行くよ」さゆりが、スイッチを入れると、曲が流れてきた。勇樹はちよつと緊張しながらも、なんとか二曲歌いきった。それを何度か続けて、一番良かったものを選んでCDに落とした。気が付くと全身汗だらけになっていた。

「結構よかつたんじゃないか」正人は満足したようだ。

「後は、大森のおっさん次第だね」さゆりがカラオケセットのスイッチを押しながら言った。「ほら、ながすよ」

ミステルの曲がゆっくり流れてきた。本家本元になうわけはないが、勇樹も正人もさゆりも、初めて完成した曲に聴き入っていた。勇樹が正人を見ると涙を流さんばかりの顔で聴き入っている。奈々枝も文江も同じように静かに聴いていた。

「よし、じゃあ今度これを大森さんに聞いてもらおう。でも不安だな。奈々枝さんと文江さん、客観的に見て、どう思う？」勇樹が聞

いた。

「大丈夫だと思います」文江が拍手しながら言った。

「うん、私も大丈夫だと思う。他の人に負けてないと思うよ」奈々枝も拍手しながら言った。

「奈々枝さんが言うなら間違いないな」正人はぼそつと呟いた。

「よし、今日は乾杯しよう」さゆりが言った。

いつものようにテーブルと椅子を出して全員座った。この頃は、勇樹の左側に正人、勇樹の向かい側にさゆり、その向かって左側に文江、そして奈々枝は勇樹の右側の角に座るようになった。カタカナの二の字が、カタカナのコの字になったと言えばわかり易いだろ
うか。

奈々枝がジューズを注いで、文江はお菓子の袋を開けた。

「乾杯！」

大きな声で乾杯した。勇樹は汗をかいて、喉が渴いていたので一気にコーラを飲み干した。それを見ていた奈々枝が勇樹のコップにコーラを注いだ。勇樹はコップに左手を軽く添えた。

「勇樹君、その手どうしたの？」奈々枝が驚いて言った。

「ああこれ？これは左手で弦を押さえるから、この部分が固くなるんですよ」勇樹は左手を見せた。奈々枝は左手で勇樹の手をとり、右手の人差し指で勇樹の指先を触った。

「本当だ、凄い固い」

「私にも見せてー」同じように文江も勇樹の指を触った。

「痛くないの？」文江が聞いた。

「今は全然」

「俺の手も、ほらこんなになってるでしょ。なにも一生懸命やってるのは、勇樹だけじゃないですよ」正人が左手を前に出しながら、会話を割り込んだ。

「本当だね」奈々枝は手を見て言った。文江は目の前に差し出された指を手を取って、ちよんちよんと指で触り「本当ですね」と言った。

勇樹は奈々枝に手を触られて嬉しかった。実は、勇樹は最近になって、奈々枝のことが気になりだしたのだ。それは、好きという感情より、あこがれの存在としてだ、と勇樹は思っていた。頭の中で、奈々枝さんは高嶺の花だし、俺のことなんか気にする訳もないじゃないか。といった、ある意味逃げと言っか、もし奈々枝さんに彼氏が出来たら、と言った現実が目の前に立ち塞がった時のショックアプソーバーとして、そんな風に思うようになったのだ。

無理だ無理だと思えば思うほど、頭の中は逆回転を始め、どんどん感情が高ぶっていく。それを押さえつけるように、勇樹は音楽にのめり込んで行った結果、人前でだって平気で歌えるようになったし、難しいコードを押さえられるようになった。

だが、それは一時しのぎで、いつも、水曜日と土曜日の練習が終わった後は、せつない気持ちがかみ上げてくるのだった。

「そろそろ帰ろう」勇樹が立ち上がりながら言った。勇樹と正人が椅子やテーブルやカラオケセットを片付けていると、女二人のひそひそ話しが聞こえてきた。

「奈々枝、明日、例の件なんだけど、行くんでしよう？」とさゆりが奈々枝に聞いていた。

「うん、でも、どうしようかな」奈々枝はすまなそうにさゆりを見て言った。

「どうしようかな？だって奈々枝、前に・・・ちよつと正人、あんな何聞いてんのよ！」横では正人が聞き耳を立てていた。勇樹も聞き耳を立てていたが、正人みたいに、いかにも聞いています、と言うように二人を直視せず、カラオケセットのコードを抜きながら聞いていた。

そこへトイレに行っていた文江が戻ってくると、女三人で外へ出て行った。

「おい勇樹、一体なんの話をしてるんだと思う？」心配そうに正人

が聞いてきた。

「奈々枝さんは、明日、用事があるんだろう」「カラオケセットのコードをたたみながら答えた。

「用事って男かな」正人は勇樹に顔を近づけた。

「そんなに心配なら、直接、奈々枝さんに聞いてみたらいいんじゃないのか」

「そんなこと出来る訳ないだろう」落ち着かない様子で正人もコードをたたみ始めた。

「分かった、じゃあ、あたしから連絡してみるよ」ドアを開けて、さゆりが入ってきた。遅れて奈々枝と文江も入ってきた。

さゆりも文江もちよつと首をかしげていた。奈々枝は「ごめんね、さゆり」とすまなそうに何度も言っていた。

そこへ、正人の携帯がなった。

「はい、そうです。あつ大森さん。いえ、ええ、はい、出来ました。ええ。今出来たばかりです・・・そうですか、いや今から行きますよ。ええ、じゃあ、ボイスで、はい分かりました」

「おい、大森さんが、録音聞いてやるってさ。今からボイスに來いって」

「本当かよ。早速行こうぜ」勇樹は録音したCDを取り出すと、バッグに入れた。

「さゆりさん、行きますよ！」

「分かった、じゃあ、ちよつと待ってて、着替えてくるから」

さゆりは倉庫を飛び出した。

「着替える？何で着替えるんだろう」勇樹は、頭の上に？が並んだ。「勇樹君、女の子は出かける時はおしゃれするものなのよ」文江が、メツと子供をたしなめる母親のように勇樹に言った。

「さゆりさんが、おしゃれ？おしゃれするより、あの性格直した方がいいんじゃないか」正人はおかしそうに笑った。

「ちよつと正人君、それは言い過ぎよ」奈々枝が言った。

「いえ、その、ちよつとした冗談ですよ・・・」正人はしょぼんと

してしまった。

しばらくすると、いや、結構時間がたってからさゆりは現れた。初めてボイスであった時のような、大人びた服装をしていた。

「さあ、二人とも行くよ」格好は変わっても、あねさん性格はそのままだ、そのギャップに勇樹は笑いをこらえながら、奈々枝と文江に見送られてボイスを目指した。

大森はヘッドホンをつけ、目をつぶって聞いていた。時折、首がカクツカクツと前に倒れていた。この人本当に聞いているんだろうか。勇樹は心配になった。横で、正人とさゆりも心配そうにしている。

しかし、随分長いな、録音は十分もなかったと思うけど。勇樹が不思議に思っていると、つかつかと天田がやってきて、大森の左のヘッドホンを外し、「終わりましたよ」と耳の脇で声を出した。

「ああ、終わったの」

ああ、終わったの？もしかして、聞いていなかったんじゃないのか。勇樹と他の二人は顔を見合わせた。

「いいだろう、合格だ。八月のライブに出さしてやる。持ち時間は十分、順番は一番最初だ」そう言うで大森はトイレに行った。

勇樹たち三人はきよとした。

「なんだお前たち、嬉しくないのか？」

天田がテーブルの前の椅子に腰掛けて言った。

「いえ、嬉しいんですけど。大森さん本当に聞いてたかなって」不安そうに勇樹が言った。

「大森さんは、やる気のある人間にはどんどんチャンスを与えているのさ。そうは言っても、あまりひどいのは出せないからな。最初の歌い出しで、ああ、これは大丈夫と思っただろう」

「よし、これはスタートで、これからが本番だぞ」正人が自分に気合を入れた。

「いや、お前らは、ようやく競技場の観客席に座れたレベルだ。ま

だ、トラックで走るなんて、十年早いつてもんだ。しかし、さゆりちゃん、キーボードやるなんて知らなかったな」

天田がさゆりに言った。

「中学の時から始めてたんです。でも、メンバーが見つからなくていつもより一オクターブ高い声でさゆりが答えた。

「あれ、天田さん、さゆりさんと知り合いなんですか？」正人は、さゆりと天田を交互に見た。

「ああ、いつも店に来てくれてるし、ライブも毎回来てるからな」ところで、君達明日はなにか予定でもあるのかい」トイレから帰ってきた大森が椅子に座りながら言った。

「いえ、俺は、別に、予定はないですけど」勇樹は答えた。正人も頷いた。さゆりは、きよるきよると勇樹と正人の顔を見て言った。

「何かあるんですか？」

「ああ、明日、音楽村のメンバーでドライブすることになってるんだ。ここに十時に集合なんだけど、君達もよければと思ってな。天田、お前も大丈夫なんだろう」

「俺は大丈夫ですよ。店の人繰りはつけておきましたから」

「私も大丈夫です」さゆりが大声を出した。「そうかい、じゃあ、いつも来る二人も誘ってみたら」天田がさゆりに言った。

「じゃあ、私、ちょっと電話します」さゆりは脇を向いてこそこそと携帯をかけた。

「ごめんね。だから、そういう訳じゃなくて、分かったから、また、話してみるからさ・・・もう、あんたも男なんだから、うじうじしないの！」

あまりの大声に四人は驚いてさゆりを見た。さゆりは「まったく！」と言って、携帯を切った。そして、はっとして顔を上げた。

「いやだ、私ったら・・・」ペロツと舌を出して、また、脇を向いて携帯で話し始めた。

「おい、お前ら、こんなじゃじゃ馬と一緒にやってるのか」大森が正人に聞いた。

「今じゃすつかり、慣れましたけどね」正人は言った。

出されたコーヒーを飲んでいると、「二人とも大丈夫だって」「さゆりがこちらを向きながら言った。

「そうかい、そいつは良かった。しかし、さゆりちゃん、強いなー驚いちゃったよ」天田はさゆりを見ながらタバコに火をつけた。

「そんなことないんですけど、ちよつと、頭にきちちゃって」「さゆりは下を向いてぼそぼそと話した。

「いや、俺は強い女の方が好きだよ。自分の意見や思っていることを、はつきり言う女の方が俺は好きだな」天田が言った。

「そうなんですか」さゆりは、ますます下を向いた。

「でもさゆりさんは、ただ強いだけです・・・いでっ！」

勇樹が正人を見ると、さゆりが右手で正人のももを思いつ切りつねっていた。

さゆりと別れて、勇樹と正人は一緒に自転車を押しながら帰った。

「勇樹、奈々枝さんが明日来るっていうことは、明日の用事は大したことじゃないってことじゃないか」正人は嬉しそうだ。

「そう言うことだな」

「やっぱり、俺にも可能性は残っているってことだ」

「それはどうか」

「ところで、勇樹、お前も奈々枝さんに気があるだろう」正人は横目で勇樹を見た。

勇樹はドキツとして正人を見た。こいつ、なんで俺の気持ち分かるんだ。そんな素振りは一切見せていないと思ったのに。

「そりゃ、奈々枝さんはいいと思うよ。でも、どっちかと言うとあこがれかな」

「やっぱりお前、俺の奈々枝さんを狙ってたな。最近、仲良く話していると思ってたら、そういうことか」

俺のというのは、正人、大きな勘違いだぞ。奈々枝さんは誰のものでもないんだから。と勇樹は思った。

「まあいいさ。ライバルが多い方が戦いがあるってもんだ。勇樹、男らしく勝負しようぜ」

「あのな、正人。前にも言ったけど、奈々枝さんが俺達を相手にすると思うか。俺達は、奈々枝さんから見たら悪がきにしか見えていないさ。さっきのさゆりさんだって、あれはどう見ても天田さんに惚れているとしか思えなかっただろう。それも十も年上の男にだ。女は大人の男に憧れるんだと思うぜ。俺とお前が勝負するのは、奈々枝さんにとっては場外乱闘ってことだよ」

「お前の話は、なにを言っているのか、よく分からないが、じゃあ、お前は奈々枝さんを見ているだけでいいのかよ」

「ああ、そうだ」

「ああそうだ？俺はお前のことがよく分からないな。まあいい、俺は俺のやり方で行くから」そう言うと正人は自転車に乗って行ってしまった。

勇樹は、嘘をついた。見ているだけでいいわけではないじゃないか。でもな・・・勇樹も自転車にまたがり、梅雨の季節の生温かい風を受けながら家に帰った。

五話

まあ、なんだかんだ言っても、勇樹の隣には正人がいた。ワンボツクスカーの最後尾に押し込まれて、二人は恋人のようにくっついていて。その前列には文江、奈々枝、さゆりのお姉さまトリオ、そして、運転席には大森、助手席には天田が座っていた。

七月の太陽は、梅雨の合間を縫ってキラキラとした光を、地上に降り注いでいる。そんな気候もあってか車の中は若い女の子の声やら、大森のおやじギャグやら、勇樹と正人の叫び声やらが交錯していた。

「正人、お前くっつきすぎだ。もっと離れるよ」勇樹は車の中で身をよじっていた。

「そんなこといっても仕方ないだろう」

山岳スカイラインのくねくね道では、勇樹と正人は遠心力に逆らえず、ぴったりと寄り添って、右へ左へ鎖で繋がれているように動いた。

「お前ら、本当に恋人みたいだな」天田が、勇樹に声を掛けた。

「ウーイ」と勇樹は余裕のあるところを最初は見せていたが、しまいには、車酔いで話すことも出来なくなつた。正人は車には強いよつで、そんな正人を勝ち誇つた目で見ていた。

おい正人、お前、なんでそんな目で俺を見ているんだよ。うー気持ちワル。分かった、俺はお前になわなないよ、だから、助けてくれ！勇樹は、こみあげるものをこらえながら、右へ左へ体を傾けた。「よし、ここで休憩」大森が言った。そこは、スカイラインの中腹にある、見晴らしの良い休憩所で、お土産やジュースも売っている所だ。勇樹を除いた全員は元気良く車を降りて行った。

ダメだ、動きたくないけどトイレにも行きたい。勇樹はそのそと車を降りて、トイレに向かった。トイレは比較的、空いていたものの、掃除が行き届いておらず、汚く、そして悪臭が漂っていた。

勇樹は、そのトイレに入った瞬間、もう我慢出来なくなった。正人が用を足している脇を、口を押さえながら走りぬけ、一番奥に駆け込むと、こらえていたものを吐き出した。

「うっ、うー、はあはあ」

ちきしょう、なんで俺だけこんな目に遭うんだよ。みんな楽しそうにしているのにさ。やばい、また、こみ上げてきた。勇樹がウンウンうなっていると、正人が声を掛けた。

「おい、勇樹、大丈夫か」

「ダメ、全然ダメ」

「しばらく、そこでおとなしくしてる。じゃあ、俺はお姉さま方と楽しくしてくるからな」

正人は楽しそうな足音を響かせながら遠ざかって行った。はあはあ、正人の野郎、自分だけいい思いしやがって。よし、俺もこんなところにもいしょうがない、みんなの所に行くぞ。

勇樹は、フラフラとトイレを出て辺りを見回した。見ると、音楽村のみんなで、仲良くソフトクリームを食べているではないか。今日は全員で二十人くらいのメンバーが集まっていたが、みんな一団となって、楽しそうにしていた。勇樹は精一杯の作り笑顔でみんなに近づいて行った。

だが、その作り笑顔は誰にも気付かれることのないまま、勇樹は、みんなが集まっている手前の木陰で力尽き、そこへ座った。

「えーっと、勇樹君だったかな」

それは弘道と呼ばれていた人で、市役所に勤めている人だ。音楽村の中で歌が一番上手いし、やさしい性格で、なんと言っても二枚目だ。音楽村のスターと言っていい存在の人だと、勇樹は思っている。

「はい、勇樹です」

「車に酔ったのかい？」

「ええ」

「それじゃ、ソフトクリームは食べれないな。ジュースでも買って

きてやるうか？」

「いえ、今は何もいりません。ここでこうしているのが一番の幸せです」

「そうか、それじゃガムを買ってきてやるよ。車酔いにはガムがいらいしいから」

弘道はガムを買いに店に入って行った。なんていい人なんだろう。正人とは大違いだ。勇樹は弘道が店に入るのをじっと見ていた。すると、後ろから声が聞こえた。

「勇樹君大丈夫？」

それは、文江と奈々枝だった。勇樹は力のない顔で二人を見た。そして、黙って首を振った。せつかく奈々枝さんが来てくれたっていうのに、俺のばかやろう！と勇樹の頭は叫んだ。だが、体はちっとも反応せず、もはや作り笑顔さえ出来なくなっていた。

「勇樹君、これ飲んで」

奈々枝がスポーツドリンクを勇樹に渡した。

「えっ、あっ、ありがとう」

勇樹は、スポーツドリンクを座ったまま奈々枝から受け取ると、

「じゃあ、遠慮なく」と言ってくごくぐくと飲んだ。

「ああー生き返るようだ」

「良かった。たぶん勇樹君疲れてるんだよ。昨日、あんなに一生懸命歌ったし」奈々枝にそう言われて、勇樹は、ますます元気が沸いてきた。

「そうだね。勇樹君すごい汗かいてたもんね。でも、とつてもカッコ良かったよ」文江も頷いていた。

生き返ったのは、スポーツドリンクを飲んだからじゃないさ。奈々枝さんが来てくれたからなんだ。徐々に体に力がみなぎってくるのを勇樹は感じながら、そう思った。

「はい、勇樹君ガム。あれ、ジュース飲んだの？」

正道さんが勇樹の持っているペットボトルを見て言った。

「ええ、あのー、はい、すみません」

「そうかい。じゃあこれ車の中で噛んでいきなよ」

正道は勇樹にミント味のガムを渡した。「ありがとうございます」
勇樹はそれをポケットにしまった。

よし、これで生き返ったぞ、と勇樹が立ち上がった。あれ、やばい。腹が満たされたせいかな、また、すっぱいものがこみ上げてきた。勇樹がんばれ、ここで、トイレに入ったら、奈々枝さんと話ができないじゃないか。勇樹がんばれ！勇樹は自分を励ました。しかし、勇樹の顔はみるみる青ざめていった。

「ちよつと失礼します」

勇樹は、また、トイレに駆け込んだ。しかし、勇樹は我慢した。せつかく奈々枝が買ってくれたジュースを、こんな汚いトイレに吐き出すなんて出来ない。頭を振り、目に涙を溜めて勇樹はこらえにこらえた。

しばらくして落ち着いた勇樹は、フラフラとトイレを出た。もうみんなは車に乗り込み、勇樹が来るのを待っているようだ。

「勇樹、お前、助手席に乗れ、俺と正人が後ろに乗るから」

天田が窓から顔を出して言った。言われるままに、助手席に乗ると、大森がビニール袋を勇樹に渡した。

「吐くときはこれに吐け。この車はまだローンが残っているから、汚すなよ」

「分かりました」勇樹は元氣なく答えた。

後ろでは、天田を中心に会話が盛り上がっていた。みんな、楽しそうに音楽のことや、恋愛のこと、テレビの話題を話している。勇樹は弘道に買って貰ったガムを噛みながら、ただそれを聞いていた。急に大森が勇樹に話しかけた。

「ところで、どうして音楽やるうと思ったんだ」

「高校に入って、何もやらないのもどうかと思ったからです」

「なにかスポーツはやっていなかったのかい」

「野球をやっていました。正人とはバッテリーを組んでたんです」

「ああ、それでお前ら息ぴったりなんだな」大森はにやにやしなから言った。

「高校で野球をやる気はなかったの？」

「ええ……」と勇樹が言ったとき、後ろの方から正人の声が聞こえた。

「勇樹、お前、夏休みバイトしないか？」

「バイト？おい、俺らの学校バイト禁止だろう」

「じゃあ、お手伝いってのはどうだ」天田の声だ。

「お手伝いですか」勇樹は前を見ながら言った。

「そうさ、お手伝いさ。俺の親父はレストランと飲食店やってるんだけど、俺のボイスも含めて、毎日おしほりやらなにやらで洗濯が大変だし、店の掃除だってやらなくちゃいけない。夏休みの間だけ週三日でもいいから、手伝ってくれると助かるんだがな」

「はあ、考えておきます」勇樹は元気なく答えた。

「つれない返事だな。じゃあ勇樹は無理か。じゃあ、みんなよろしく頼む」

みんな？「ちょっと待って下さい。みんなやるんですか」

「そうさ、ここみんなはやるって言ってるぞ」

「やります。俺も手伝います」

「おい勇樹、無理しないでいいぞ」正人が言った。

バカ。お前だけいい顔させてたまるっかってんだ。

「じゃあ、よろしく頼む。バイト代は出せないけど、お駄賃は出してやるから。さゆりちゃん達の学校もバイト禁止だろう？だから、お駄賃って言うことでいいかな？」

「はい」文江が手を上げて答えた。さゆりも奈々枝も同じように手を上げて答えた。

しばらく走ると、勇樹はトイレに行きたくなってきた。さっきの休憩で済ませばよかったのに、吐いたり、吐くのを我慢したりで、トイレに行くのを忘れていた。しかし、ここで車を止めさしたら力ツコ悪いと思い、もじもじしながら、勇樹は我慢した。

相変わらず、後ろは盛り上がっていた。しかし、そんなことより今は切羽詰った問題がある。勇樹は、体中から汗が噴出すような感じがしてきた。もうだめだ、「大森さん、車を止めてもらえませんか」勇樹は我慢できずに、しかし、つぶやくように言った。

「どうしたの？」心配そうに大森がこちらを見た。

「ト、トイレに行きたいんです、その辺で済ませますから」また、勇樹はつぶやくように言った。

「トイレに行きたいのか？ここは国立公園内だから、その辺で済ます訳にはいかないだろう」

声がかい！もつと静かに言ってくれ。と思いながらも勇樹は、懇願する目で大森の顔を見た。

「そのカーブを曲がればスカイラインの頂上だ。そこで昼食の予定だから、我慢しろ」

「！」なんてことだ。あと少しだったのか。勇樹は、正人の勝ち誇った視線を後ろからギンギンに感じながら首を垂れた。

車が止まると、勇樹はトイレまでダッシュした。頭を垂れて何度もため息をしながら、勇樹は言葉に出来ない敗北感を感じていた。

その反対に体は言葉に出来ない開放感を感じていたのも事実だ。手を洗っていると、弘道がやってきた。

「勇樹君、顔色よくなっただんじやないか」

あれ本当だ。前ほど気持ち悪くない。

「少し良くなっただけです」

「そうか、良かったじゃないか。俺、ミントのガムは車酔いに効くって聞いた事があったからさ。どうやら本当だったんだな」

「ええ、ありがとうございます」

勇樹は曖昧な笑顔で答えた。いや、きつと、トイレを我慢してたので、そっちの方に神経がいつて、車酔いを忘れたのだろう。それはある意味良かったといえば、良かったのだが……。

みんなは、ドライブインでそばやうどん、ホットドッグを食べて

いたが、勇樹はまだ食欲がなかったし、人が多くて、むっとする空気が漂っていて、長居すると、また気分が悪くなりそうだったので、「ちょっと、外の空気を吸ってきます」と言っ、一人外で景色を眺めていた。

「おい勇樹、これ食べよ。お前、タイヤキ好きだろう」正人がタイヤキを持ってきた。

「サンキュー。でも後で食べるよ。今、食欲ないんだ。悪いな、せっかく買ってきてくれたのに」

「いいよ。なんかさ、お前が元気ないと、俺もつまらないだよ」

「うそ言え。大分盛り上がったじゃないか」

「そりゃ、そうさ。せっかく来たんだから。でもな、お前がいなければ、音楽村のこともあきらめていたかもしれないし、田舎の高校で音楽やるって言うても人なんか集まるわけないし、やっぱりお前に感謝してるんだ。お前は一番の友達さ。本当だぞ」

正人、お前本当はいい奴なんだな。勇樹はそう思った。

「じゃあ、また、盛り上げてくるからよ」

「俺の分も頼むぞ」

正人は後ろを向きながら、右手を上げ親指を立てて、みんなの所に戻った。ちよつとカツコ付けすぎだ。と思しながらも勇樹は嬉しかった。

勇樹は正人の買ってきてくれたタイヤキを食べていた。勇樹はタイヤキに目がなかったし、せっかく正人が買って来てくれたタイヤキを冷ましてしまうのは悪いと思、無理して食べていたのだ。

タイヤキを食べ終わり、体調が十分でないのか、やや胸焼けを感じた勇樹は黙って展望台の椅子に座って、遠くの景色を眺めていた。

「勇樹君、これ食べて」

この声は！勇樹は振り返った。そこにはタイヤキを持って立っている奈々枝の姿があった。

「さつき、正人君が、勇樹君はタイヤキに目がないって言ってたから、買ってきたんだ。あれ、大分、顔色良くなっただね」

「うん、だいぶ体調はよくなったみたいです。ありがとうございます」

勇樹は立ち上がると、奈々枝からタイヤキを受け取り、頭から食べた。

「勇樹君てさ、がんばり屋さんだよな」奈々枝は景色を見ながら言った。

「そんな風に見えます」勇樹は口をもぐもぐしていた。

「そう思う。だってさ、最初と比べたら、すごくギターも歌も上手になったし。昨日歌ってる時なんか、すごい一生懸命歌ってたし。私なんて、そんなに、一つのこと打ち込んだことなかったから、すごく羨ましくなっちゃった」

「これから、なにか、見つけたらいいじゃないですか。恋愛だっていいと思いますよ」

「恋愛ねえ。私さ、すぐ人を好きになるってできないんだ。友達で、何回か会って付き合い始める人もいるけど、私には無理。本当に好きにならないと付き合うなんてできない。だから、さゆりに、そんなことだからダメなのよって、いつも言われるんだけど。でも、女子高だから、そんな出会いってなかなかないでしょう。勇樹君は、どう思う」

「すみません。俺、彼女いないし、今まで付き合った人もいないんで、よく分かりませんが、たぶん、俺も奈々枝さんと同じだと思います」

「やっぱり、男の人もそう思う人いるよね。良かった、同じ考えの人がいて」

「俺、それが当たり前だと思ってましたけど」

「結構、硬派なんだね」

奈々枝が勇樹の顔を見た。勇樹はドキツとして、照れ隠しにタイヤキを全部口に入れた。

「奈々枝、ちょっと来てー」

さゆりが奈々枝を呼んだ。

「勇樹君も行くよ」奈々枝が言った。

「うん」勇樹は奈々枝について行った。

冷たい視線を感じ横を見ると、正人が勇樹を見ていた。俺が一番の友達なんだろう？ちよつと話しをしたくらいで、そんな目でみるなよ。勇樹はそう言いたかったが、実は、正人の買ってきてくれたタイヤキで胸焼けになったところへ、奈々枝の買ってきたタイヤキも無理して食べたので、勇樹はまた、気分が悪くなり、そんな元気はなくなっていた。しかも、最後の一口がなかなか飲み込めず、まだ、もぐもぐしていて、話すなんてとてもできる状態ではなかった。

帰りの車の中、勇樹は、また助手席で一人うなっていた。ひどい胸焼けだ。今度も吐き気がする。しかし、ウンウンうなりながらも、勇樹はビニール袋を手握り締め、吐くだけは我慢していた。

正人から貰ったタイヤキは吐いてもいい、でも、奈々枝さんから貰ったタイヤキは吐くわけにはいかない。頭を振りながら、遠くを見て、何度も何度も深い息をして我慢した。しかし、勇樹は、今日は来て良かった。本当に来てよかった。そう思っていた。

六話

さゆりたちは、ボイスのビルの三階にある事務所兼休憩室でおしぼりを巻いたり、洗濯をしたりしていた。勇樹と正人は、炎天下の下、看板や階段にある窓ガラス、二階の窓を拭かされて汗だくなっていた。

「勇樹、一休みしようぜ」

「ああ、もうくたくただ」

二人は、雑巾を放り投げボイスの椅子に腰掛けた。しかし、今日はボイスは定休日、エアコンも入っておらず、じっとしているだけで汗がしたたり落ちてきた。

「勇樹、ちよつと三階の涼しい所に行こう」

正人は耐え切れないと言った顔で勇樹を見た。二人は真つ赤な顔をして、よたよたと階段を上がった。

そして、二人は事務所のドアを開けると、どさつと大きな音を出して事務所の椅子に座った。その音に、さゆりたちは驚いてこつちを振り返った。

「ああ、ごめんごめん忘れてた。お前らもいたんだな」天田は立ち上がり、二人にアイスコーヒーを持ってきた。

二人は、そのブラックのアイスコーヒーを一気に飲み干した。

「ああ、生き返る。ってあれ？みんな休んでたんですか？」正人はグラスに残った氷を口に含みながら言った。

「こつちは、ほとんど終わりだよ」

「さゆりさん、なんで呼んでくれないんですか」正人は口の氷をボリボリと噛み砕いた。

「二人の邪魔しちゃ、悪いと思ってさ」

「ああ、そうですね。それはありがとうございます」正人は残っている氷を全部口の中に入れた。

「待ってる、いまサンドイッチ作ってやるから、材料は昨日の残り

物だけどな」天田が立ち上がった。

「あたしも手伝います」さゆりも立ち上がった。

「そうかい、じゃあ、文江ちゃんも奈々枝ちゃんも、悪いけど、おしぼりを全部巻いておいてくれないか」

「分かりました」

天田とさゆりはボイスに降りて行った。文江と奈々枝はクルクルとお絞りを巻き始めた。

「へえーおしぼりってそう言う風に巻くんだ。ちょっとやらしてよ」正人が二人の側に行った。

「全然だめだ。きれいに巻けないや」正人はおしぼりを巻くのを諦めて、テレビをつけた。

テレビでは、甲子園を目指して、県の強豪同士、光ヶ丘学園と大成高校が決勝戦で戦っていた。

「おい、勇樹、光ヶ丘学園が負けてるぞ。あれ？この大成高校のピッチャー、俺たちが県大会で負けた時のピッチャーじゃないか。なあ、そうたる勇樹、違うか。一年だったのにもうエースかよ、すごいな。おい、勇樹……」

「下に雑巾置きっぱなしだったから、取ってくる」

勇樹はボイスに戻って行った。厨房では、天田とさゆりがサンドイッチを作っているところだった。

「どうした、勇樹」天田が声を掛けた。

「雑巾を忘れたんで、取りに来たんです」

「そうか、すまないが。そのエアコンのスイッチ入れてくれないか。ここは熱くてたまらん」

勇樹は、スイッチを入れて、トイレの脇にある洗い場で雑巾を絞り、張つてあるロープに雑巾をぶら下げた。

そして手で水を汲んで、顔を洗った。トイレの手洗い場にあるペーパータオルを一枚とり、顔を拭くと、ペーパータオルをグチャグチャにしてゴミ箱に投げ入れた。

厨房に戻り、なにか手伝いますか、と言おうとしたが、さゆりの

邪魔をしちゃ悪いと思い、勇樹はなにも言わず三階に上がっていった。

テレビからは、お昼のバラエティーが流れていた。それを見ながら、正人が文江と奈々枝を相手に楽しそうに話していた。

しばらくして、サンドイッチが到着した。めいめいに飲み物を飲みながら、他愛もない話をしていた。

「そう言えば、八月のライブ、お前から出るんだろう。どうだ、ちゃんと練習してるか？」天田が突然ライブに話を向けた。

「練習はしてますけど、だんだん不安の方が大きくなっちゃって。どれだけ練習しても失敗しそうな気がしてくるんですよ」

「勇樹、お前、昔からそうだよな。心配症なんだよ。俺みたいにとっしり構えればいいのにさ。ねえ、さゆりさん、そう思うでしょう」

「それは、どうかな。だって勇樹は歌も歌わなくちゃいけないんだよ。あんたにそれが出来る？」

「歌はムリ。まあ、それを言われれば、俺は何も言えない」正人は首を振った。

「勇樹、お前の頃の失敗は勉強と言うんだ、気にするな。それにお前らの演奏が失敗しても誰も分からないさ。どうせ失敗だらけだろうからな」天田はケラケラと笑った後、急に真顔になった。

「でもな勇樹。俺は、一生懸命やって失敗したら何も言わない。ただし、適当にやって失敗したら怒るからな。若いうちに適当に流しているような奴は嫌いだ」

「ええ、がんばりますよ」

「勇樹君頑張つてね」奈々枝がそう言ってくれた。

「うん」勇樹は、サンドイッチを食べながら奈々枝の顔を見て頷いた。

ライブは土曜日の夕方だった。勇樹が緊張しているのは、ハタから見ても分かった。緊張をほぐしてやろうと、吉田が若い頃の失敗談を話して、落ち着かせようとしても、ただ、遠くを見てウンウン

と頷いているだけだった。

その間、さゆりと文江は譜面台をセットしたり、髪をセットしたりしていた。正人はチューニングをしたり、スピーカーに線を繋いだりしていた。でも、正人はそんな勇樹を見ても何も話しかけてこなかった。

「勇樹君、今日なにも食べていないでしょう。これ食べて」奈々枝がタイヤキとお茶を持ってきてくれた。勇樹は「ありがとう」と言っつて椅子に座り、タイヤキを半分だけ食べて、皿の上に置いた。

勇樹は手を伸ばしてお茶を取った。しかし、それは奈々枝が飲んでいた紅茶だった。勇樹は全く気づかず一口飲んだ。そんな勇樹を奈々枝は心配そうに見ていた。

文江がそれに気づいて、近づいてきて言った。「勇樹君。やるだけやったんだから、きつと大丈夫だよ。大丈夫、やれば出来る」

「ありがとう、奈々枝さん」勇樹は立ち上がったトイレに行った。その後姿を見て、奈々枝と文江は、心配そうに顔を会わせた。勇樹は緊張のあまり、奈々枝と文江の区別もつかなくなっていた。

奈々枝と文江は、正人の方へ行った。「ねえ、正人君。勇樹君、大分緊張しているみたいんだけど、大丈夫かな」奈々枝が正人に聞いた。

「ああ、大丈夫、大丈夫。あいつはいつも本番はあんなだから」正人の返事はそっけなかった。

「でも・・・」奈々枝が心配そうにトイレの方を見たとき、さらに青い顔をした勇樹が、こっちに向かって歩いてくるところだった。

よく見ると勇気のジャケットの襟がひっくり返っている。奈々枝がそれを直してやっても、勇樹はまったく気づくことはなかった。

勇樹はギターを肩から掛け、無表情のままそこに立った。そろそろ本番だ。

大森が、勇樹たちを紹介すると拍手が聞こえた。勇樹はゆっくりと頭を下げた。そして顔を上げた勇樹は、さっきと別人のように落

ち着いた顔になっていた。

十分間の演奏は、大きなミスもなく、どちらかと言うと練習よりも上手だった。演奏が終わって、三人が礼をすると、大きな拍手が起こった。

奈々枝も文江も、ほっとしたように大きな拍手をしていた。楽器と楽譜を片付け、三人がステージから降りてきた。

「みんな良かったよ。感動しちゃった」奈々枝が三人を称えた。「みんなすごいね。私もなんだか嬉しくなっちゃった」文江も一人一人ハイタッチで向かえた。

「な、だから言っただろう。勇樹は大丈夫だって」正人は出された水を美味しそうに飲んだ。勇樹も水を美味しそうに飲んだ。

「あれ。誰だ、タイヤキ半分残して、もったいないな」勇樹はタイヤキの載った皿を指差した。それを聞いて奈々枝は思いっきり笑った。「それ勇樹くんのだよ」。

「えっ、俺のなの？」

「何も食べてないから、心配になって買ってきたのに、半分しか食べなかったんだよ」

「そうかな。俺、落ち着いていたんだけど」

「勇樹は、いつもそうさ。野球の大会の時も、試合の前は、この試合は絶対負ける、勝てるわけがない、って言ってるくせに、試合が始まると急に落ち着くんだ。だから、俺は心配してなかった」正人が勇樹の肩を叩いた。

「それは違う。俺は、いつも落ち着いていた。今日だって、堂々としてたと思うんだけど」

「勇樹君、私の飲んでいた紅茶間違っただけで、私と文江を間違ってたし、とても堂々としていたとは思えないけど」奈々枝がにやけながら言った。

「お前、奈々枝さんの飲んでいた紅茶飲んだのか。それは許せないぞ」正人が勇樹の頭を叩いた。

「まあ、いいじゃないの。今日は二人とも良かったよ。私も最初は

ちょっと緊張してたけど。終わってみると、すごく気持ちいいし、もう、くせになりそう。また、がんばろうね」さゆりは普段より優しい声だ。

「おう！」勇樹と正人は声を上げた。

勇樹は残したタイヤキを食べながらライブを見ていた。勇樹の隣では奈々枝が、そして正人が、さゆりが、文江が、自分たちのライブの余韻を体の中に感じ、ふわふわとした満足感を漂わせながらライブを見ていた。

「乾杯！」大森が大きな声で叫んだ。

ライブが終わり、居酒屋で打ち上げを行った。もちろん勇樹たちは、ウーロン茶だ。

「正人、今日は良かったじゃないかー、俺なんかお前より緊張して見ていたんだぞ」大森は赤い顔をして正人の隣に来た。

「はい、大分自信がつかまりました」

「そうか、お前ら、まだまだ上達するはずだから、期待してるぞ」遠くでは弘道がファンと思われる女性数名と楽しそうにしている。

さゆりは、天田の隣で普段見せないやさしい顔で頷きながら話を聞いていた。勇樹の隣には吉田がでんと座った。ヒゲにビールの泡をつけ、つばを飛ばして、お前らの頃は、と一席ぶっていた。奈々枝と文江もその話を黙って聞いていた。

天田が吉田を呼んで、ようやく勇樹達は解放された。よく見ると、天田は、吉田と若い女性と話をしていた。その二人に天田の隣を奪われたさゆりは、むっとした顔でこっちにやってきた。そして、バツクの中から、タバコを取り出すと火をつけた。

「さゆりさん、タバコ吸うんですか」勇樹はちょっと驚いた。

「そうよ。何か？」さゆりは怖い顔で勇樹をにらんだ。

おおこわ！これ以上は何も言わないほうが身のためだ。勇樹は目をそらした。

「ねえ、今度の夏祭りみんなで出掛けない？」文江がみんなを誘っ

た。「いいよ。ねえ、勇樹君も行くでしょう？」奈々枝が勇樹を見た。

「誘われれば、当然行きますよ」

「あたしも行く」

「俺も行きまーず」正人が赤い顔をして会話に入ってきた。

「おい正人、顔が赤いぞ。お前、そのコップ、ビールじゃないのか！」勇樹は驚いて正人を見た。

「いいじゃないか、今日は、めでたい日なんだ。ビールを飲んで何が悪い！お前も飲め！」正人はコップを差し出した。

勇樹は、一瞬フラつとその大人の飲み物に興味を持ったが、「俺はいいよ」と言って自分のコップに入っているウーロン茶を飲んだ。「あたしも飲もう」さゆりは、ほとんどつぶれている、大森の近くにあったビール瓶を取るとコップに注いで、ぐいっと飲んだ。そして、また、ビールでコップを満たした。

「さゆり、あまり飲まないほうがいいんじゃないの？」奈々枝は心配そうに言った。

「いいの。今日はめでたい日だもんね。ほら、正人、乾杯！」

「乾杯！」

あーあ。さゆりさんも、正人も目がいつてる。そこへ、トイレに行っていた天田がやってきた。

「さゆりちゃん、あんまり飲むなよ。そうだ、今度の祭りの日、ボイスでイベントやるんだけど、さゆりちゃんも来るかい？」

「えっ、いいんですか」

「もちろんさ、みんなはどう？」

「すみません。みんなで、出かけるって話をしていたんです」文江が言った。

「そうか、じゃあ、時間があれば顔を出してくれ」天田はまた自分の席に座った。

「と言うわけで、ごめんね」さゆりが奈々枝に言った。

「いいよ、私達も時間があれば顔出すから」文江は横目でさゆりを

見た。さゆりも同じように文江を見た。奈々枝はそれを見て笑った。

次の日、さゆりと奈々枝、文江はボイスにいた。学校の登校日の帰りにボイスに寄ったのだ。

若い女の子の会話らしく、時にひそひそと、時に賑やかに、そして、時に大声で笑って話をしていると、文江が言った。

「私、気になってることがあるんだけど」

「なにになに？」さゆりと奈々枝が身を乗り出した。

「言っちゃって、いいかな」

「言っちゃいなよ」さゆりと奈々枝が催促した。

「でも、間違ってたらごめんね。最近、奈々枝さ、練習終わってから勇樹君の側にずっといるよね。昨日もそうだったし。私がぴんときたのは、ライブのとき襟を直してやったでしょう。あの時の心配そうな奈々枝の顔は、私見たことがない顔だったの。もしかして奈々枝、勇樹君が気になってるんじゃないかなーって思ったんだけど」

「奈々枝、実はあたしも最近そう思ってたんだ。この前、あたしの同級生を紹介するって言ったら、最初は乗り気だったのに、急に断ったしさ。文江の言うとおり、いつも勇樹の側にいるし。この際、はつきり言ったら」さゆりが奈々枝を横から見た。奈々枝は急に自分話題を振られて、どきまぎしていた。

「別に、そんな風に思っている訳じゃないけど・・・」

「ないけど、なに？」さゆりと文江は奈々枝に顔を近づけた。

「でも、私、年上だし。その、なんて言うか、勇樹君から見たらお姉さんに見られているって言うか、何て言うか・・・」

「奈々枝、はつきりしなよ。あたし達が聞きたいのは、奈々枝が勇樹をどう思っているかなんだよ。奈々枝がどう見られているかじゃなくてさ。好きになったんでしょう、勇樹のこと」「さゆりがテーブルの上に置いていた右手を、奈々枝の肩においた。

「うん、実は・・・」うつむいて、恥ずかしそうに組んだ両手の親指をクルクルまわして奈々枝が答えた。

「奈々枝、恥ずかしがることないよ。勇樹君と話している時、すごく楽しそうじゃない。私、そんな奈々枝初めて見たもの。私、そんな奈々枝見ててうらやましかったよ。さゆりもそうだけどね」

「あたしは、どう考えても片思いだけど、奈々枝はまだチャンスがあるよ。奈々枝も、もっと、勇樹君にアプローチしたら」

「でも、私、今のままで十分楽しいし。もし、嫌われちゃったら、みんなといれなくなるような気がして・・・」

「じゃあ、奈々枝は勇樹君を見ているだけでいいの？」

「って言うか、今のままでもいいかなー、と言うか・・・」

「奈々枝、じゃあ聞くけど、勇樹に彼女が出来ても、今と同じようにしてられる？そうなる前に白黒はつきりさせたほうがいいんじゃない？」

「それはそうだけど」奈々枝は、困った顔でさゆりと文江の顔を交互に見た。

「奈々枝、怖いよね。自分が勇樹君の恋愛対象になるかどうか。それを知るのが怖いんでしょう？」

「それもあるけど」

「それも、あるけど？ああ分かった。正人のことでしょう。あいつ、奈々枝のこと気に入ってるもんね。それで、もし、奈々枝が勇樹とうまくいったら、二人の関係が悪くなるって思ってるんだね。そうなりやライブだって出来なくなるんじゃないかって、勇樹の好きな音楽が出来なくなるんじゃないかって、そう思ってるんでしょ」奈々枝は黙って頷いた。

奈々枝がトイレに行った時、さゆりが文江に言った。

「しょうがない、あたし達が一肌脱いでやるしかないね。ちよっと探りを入れてやるか」さゆりはため息をついて文江を見た。文江はウンウンと首を縦に振った。そして、さゆりは携帯を手に取った。

「そうさ。あんた、あたしの誘いを断る訳じゃないでしょうね。そう、分かればいいの。じゃあ、明日ボイスでね」

「誰に電話してたの？」奈々枝がトイレから出てきてさゆりを見た。

「ああ、友達に電話してたんだ。ちょっと約束があつてね」さゆりは文江を見た。文江は下を向いてクスクスと笑った。奈々枝は首をかしげて二人を見ていた。

ボイスの一番すみのテーブルには、正人とさゆり、文江が座っていた。正人は、これから尋問を受ける被告みたいな顔で、さゆりと文江を見ていた。

「なにも、怖がることはないでしょう。今日は、あんたと親交を深めたいと思って誘ったんだからさ」さゆりはにこやかに言った。その笑顔が正人をさらに緊張させた。

「あのー、俺、いつも、さゆりさんのこと、ああだこうだと言ってますけど、本当は大好きなんですよ。だから、勘弁して下さいよ。こないだ、酒飲んでなに言ったか覚えてませんけど、なにかひどいことを言ったら謝りますよ」

「正人君、今日はさゆりの言うとおり、正人君とお話したいの、それだけのな」文江がにこっと笑った。

注文した飲み物がテーブルに運ばれた。正人はさゆりと文江をちらちらと見ながら、コーヒーを飲んだ。

「ねえ、正人、あんた好きな人いるの？」さゆりが聞いた。

「俺ですか、いますよそりゃ、お年頃ですから」

「奈々枝でしょ」さゆりは冷たく言った。

「どうしてそれが分かるんですか？」正人は驚いて、目を大きく見開いた。

「誰が見ても、そう見えるよ。だって正人君、いつも奈々枝さん、奈々枝さんって言っているじゃない」文江が、そんなこと知らないとも思っているの？と言う口調で言った。

「勇樹は誰がいるの？」

「あいつも、奈々枝さんがいって言った。でも、好きというより、あこがれだって、言ってたけど。あっ、これ、内緒にして下さいよ」

さゆりと文江が目を合わせて、お互いまゆを上下させた。

「大丈夫、誰にも言わないから。でも、好きというよりあこがれって、どういうことなのかな」文江が正人に聞いた。

「あいつ、奈々枝さんが俺達みたいなガキを相手にするわけではないって、いつも言ってるんだ。だから、あこがれだって」

「ふーん。恋愛に年の差なんてないのにね。ねえさゆり」文江は首をかしげてさゆりを見て、ストローでオレンジジュースを飲んだ。

「さゆりさん。天田さんのこと好きなんでしょう」正人が言った。

「ちよっと、正人、あんたなに言ってるの」

「俺だって、そのくらい分かりますよ」正人はにやにやしながらコーヒークップに口をつけた。

「まあ、あたしのことはどうでもいいけどさ。と言うことは、二人はある意味ライバルなんだね」

「まあ、そういうことです」

「じゃあ、どつちかが、奈々枝を射止めれば、ケンカしちゃうでしょう？」文江は正人の顔を覗き込んだ。

「ケンカ？俺だったら、そんなことはしませんよ」

「でも仲悪くなっちゃうんじゃない？」

「それも無い。俺はあいつを認めてるし、もし、奈々枝さんを勇樹がものにしても、あいつを嫌いになる理由にはならない。逆に俺が奈々枝さんをもものにしても、勇樹はやさしいから、それでどうこう言うことはないし、そんなことは思わないと思うな。まあ、こつちの方が確立は高いと思うけど」正人は自信ありげに笑った。さゆりと文江は、その、根拠のない自信に思わず顔を見合わせて苦笑した。

「男の子って、そういうものなの？」文江が聞いた。

「人によると思いますけど、俺と勇樹はそうだと思いますよ。で、今日は、そんなことを聞くために俺を呼んだんですか？」

「あんたに、女の子を紹介してやろうと思ったけど、奈々枝が好きなんじゃないかね。誰か違う男を紹介するよ」

「ちよっと、待って下さいよ。それならそうと早く言って下さいよ。」

その子、どんな子なんですか？」

「正人君、あなた節操がなさすぎない？そんなことじゃ奈々枝だけじゃなくて、他の女の子もゲットできないよ」文江は手でメガネを押さえて、珍しく怒った口調だった。

「いえ、出会いは多い方がいいと思ひまして」正人は首をすくめた。「ところで、正人。こないだ、ソフトボール部の後輩に聞いたんだけどさ、勇樹、光ヶ丘学園に入学する事になっていたって言うってたけど、どうして、行かなかったの？」

正人は右手をつえに、手のひらにあごを乗せると困った顔で脇を向いた。

「なにか、あつたの？」さゆりが再び聞いた。

「ここだけの話にして下さいよ」正人は二人を見た。

さゆりと文江は頷いた。

「確かに、あいつは光ヶ丘学園に行くことになってたんですよ。でも、あいつ、生まれつき、足のくるぶしの骨がくっついていない病気を持っていて、医者に、野球を取るか、将来、歩けなくなる方をとるかと言われて、それで野球を諦めたんですよ」

「そんなことがあつたんだ」さゆりはしんみりとした。

「すごくがっかりしてましたよ。入学が決まった時は、絶対甲子園に出てやるって喜んでましたからね。でも、それからは、なんにつけても、ああ、とか、まあな、しか言わなくなっちゃって」

「だから、こないだ、高校野球がテレビで流れたとき、勇樹君、見なかったのね。その時の勇樹君、なんかさびしそうだったもんね」文江が言った。

「俺も、もう勇樹の傷は癒えたと思って話しかけたら、あいつ、下に降りちゃいましたからね。でも、こないだの打ち上げの時、言っていましたよ。（正人、ありがとな）って。それは、また、新しく打ち込めるものを見つけたって意味だと俺は思ってたんですよ」

「そうかもね、きっとそうだよ。やっぱり正人君と勇樹君はいいコンビなんだよ」文江がにこっと笑った。

「正人、あんた以外にいい奴じゃないか。やっぱり女の子紹介してやろうかな」さゆりは正人に顔を近づけた。

「何言ってるんですか、俺は、奈々枝さん一筋で行きますから、結構です。そうでしょう、文江さん」

文江は、そんな正人を見てニコニコと笑っていた。さゆりは正人の片思いにちよつと心を痛めながらも、文江と同じように笑いながら正人を見ていた。

正人が帰った後で、さゆりが文江に言った。

「やっぱり、あの二人、似たもの同士だね」

「えっ、正人君と勇樹君のこと？」

「違う、違う。奈々枝と勇樹のこと。まったく、お互い好きなら、好きだつてはつきり言えればいいのに、お姉さんだか、あこがれだか何だか知らないけど、いらいらしちゃう」

勇樹は、昨日、正人が尋問を受けたボイスのテーブルと同じ場所に座り、必要以上に、にこやかなさゆりと文江の顔に、ちよつとした緊張感を抱きながら、二人の顔を交互に見ていた。

「もしかして」

話し始めたのは勇樹の方だった。

「もしかして、俺に女の子を紹介するつもりで、呼んだんですか？」

さゆりは、ちらつと文江を見た。あのおしゃべり正人のやつ、昨日のこと勇樹に話したね。文江もそう思ったのか、同じようにさゆりを見た。

「正人が、昨日、さゆりさんと文江さんから、女の子を紹介してやるって言われたけど、俺はきっぱり断ったって言ってた。勇樹の話しも出たから、お前もそのうち呼ばれるんじゃないかって言ってますから。そうなんですか？」

「そうよ。勇樹君に素敵な女の子を紹介してやろうと思うんだけど、文江はオレンジのメガネを右手で上下させた。

「でも、勇樹に付き合っている人がいるんなら、別にいいんだけど

ね」さゆりは腕組みをしていた。

「付き合っている人はいませんよ。二人ともそんなこと知ってるじゃないですか」

「そうねえ、じゃあ、女の子紹介して欲しい？」文江は組んだ両手より、顔を前に出して勇樹を覗きこんだ。

勇樹は少し体を後ろにそらした。この二人、なんで、俺に女の子を紹介するなんて言ってるんだろう。親切心からだろうか。いや、いつも、誰か紹介して下さいよ、と言っていけばそれも分かるが、そんなこと一言も言ったことはない。二人の真意をはかりかねて、勇樹は、さゆりと文江、そして窓の外を順番に見て、何も話さなかった。

「ねえ、勇樹君どうなの。もしかして、好きな人がいるの？」勇樹が何も話さないのを見て、文江が勇樹に聞いてきた。

「そうですね。いや、うーん、そうとも言えないような・・・」

さゆりが、フンと鼻を鳴らした。まったく世話のやける話しだね。さゆりは、ぐいっと勇樹に顔を近づけると言った。

「勇樹、奈々枝が好きなんですよ」

勇樹は、手に持った、コーヒーカップを口に付けたまま、いつもより二周りは大きくなった目でさゆりを見た。そして、しばらく勇樹は動けなかった。

「正人のやつが話したんですね」

勇樹の声は震えていた。それは正人への怒りではなく、純粹に自分の好きな人間を当てられたという、恥ずかしさからだった。

「いや、正人はなにもしゃべっちゃいないよ」

「えっ、じゃあ、どうして」コーヒーカップを置いて、勇樹もさゆりに顔を近づけた。

「勇樹を見てれば、そんなこと分かるでしょう」

さすが年上になると、見るだけで人の気持ち分かるようになるのか。と言うことは、俺の気持ちは奈々枝さんも分かっているってことじゃないか。正人みたいにストレートにアプローチをして

いた訳でもないのに。勇樹は顔が熱くなってきている自分を感じていた。

「勇樹君、顔、真っ赤だよ。やっぱり奈々枝が好きなんだね」文江がさらに勇樹に顔を近づけた。

「ええ、その、いや、でも何と言うか」勇樹は。もう二人と目を合わすことは出来なくなっていた。視線は湯気のようにコーヒーカーップの上をうろついていた。

さゆりは、さらに勇樹に顔を近づけた。「男ならばっきりしなさい。好きなの、どうなの」

「はい、好きです」勇樹の声は、ようやくさゆりに届くような声だった。

「分かった。じゃあ、今から奈々枝に電話して、好きだって言ってきた」さゆりは、椅子に深く座ると腕組みをした。

「そんな、急に言われても」勇樹は上目遣いでさゆりを見た。さゆりは、そんな勇樹をきっと睨んだ。勇樹は助けを求めるように文江を見た。

「じゃあ、勇樹君。とりあえず、なにか口実作って誘ってみたら。

そうねえ、なにか買い物に行くから、一緒に行きましょうとか。それなら、できるでしょう」

「それなら、なんとか、できるような・・・あのー、ところで、なんでそんなに俺のことかまうんですか」

「あんたたち見ると、こっちがいらいらするの。さっさと電話しなさい！」さゆりにびしつと言われて、勇樹は起立した。

「はい。いますぐ電話します」

勇樹は、ポケットから携帯を取り出した。そして、目をつぶり、ふーっと息をすると、さっきの小心者の勇樹の顔はそこにはなかった。

「じゃあ、外で電話をかけてきます」落ち着いた口調で話すと、勇樹は店の外に出て行った。

「まったく、本当に疲れちゃう」さゆりは腕を組んだまま、がくっ

と首を垂れた。横では文江が笑っていた。「どうして笑ってるの文江」さゆりが聞いた。

「だって、勇樹君で、後に引けなくなると、急にその気になるでしょう。こないだのライブもそうだったし。それに、さゆり、さっきあんたたち見ると、こっちがいらいらするって、言ってたけど、あんたたちちつて、勇樹君と奈々枝のことでしょう。それを聞いて、おかしくなっちゃった」

「あたし、そんなこと言った？」
「言ってたわよ」

ボタンと店のドアが開くとそこには勇樹が立っていた。そして、つかつかとさゆりと文江の前に立つと言った。

「奈々枝さんの、携帯の番号教えてください」

さゆりと文江は危うくコーヒートを噴出すところだった。番号を覚えてもらうと、勇樹はまた店の外に出て行ったが、その歩き方は、電池の切れたロボットのようだった。

「そうは言っても、勇樹君、やっぱり緊張しているみたいね」文江はクスクスと笑った。

「これで、愛のキューピット役はもうおしまい。もう、あたしはこんなことやらないからね」さゆりはそう言って、厨房にいる天田を見た。「もう、自分のことで精一杯なのに」

「あつ、奈々枝さんですか」

「勇樹君？どうしたの」

「あのー、明日、ちょっとピックを買いたいと思ってたんですけど。俺センス良くないから、それで、奈々枝さんに選んでもらえればなあって思いました。そのー・・・」

「いいよ。でも私でいいの？」

「はい、あの、奈々枝さんでいいですっていうか、奈々枝さんでないとダメだっていうか・・・」最後の方はもう勇樹自信の耳にも聞こえない位、小さい声だった。

「分かったわ。じゃあ。明日、二時に音符の前ね。うん、それじゃ」
勇樹は汗だらけの携帯をズボンで拭き、ポケットにしまつと、ボイスの階段を上がった。

一応、約束はとりつけたが、さゆりの言うように、いきなり「好きです」なんて言えるわけではない。嬉しさ半分、苦しさ半分で、どちらかと言えば、重い足どりだった。

「どうだったの？」勇樹が椅子に座るなり文江が聞いてきた。

「明日、一緒に買い物に付き合ってくれて」

「それで、好きだって言ったの？」さゆりが、さつきよりは優しい声で聞いた。

「それは、その、いや、明日言いますよ。絶対言います。俺も、こんなもやもやした気持ち嫌ですから。はっきり言って、ダメならダメで諦めます」

「ちゃんと、言いなさいよ」さゆりの目は血管が浮き出していた。

これは、明日「好きです」って言わないと、とんでもないことになるぞ。でもな、そんなこと俺に言えるだろうか。勇樹は想像しただけで手のひらに汗をかいていた。

帰り道、夏の夕暮れの、まだ蒸し暑い風にまわりつかれながら、勇樹は一人で自転車を押して、明日、なんて言おうか考えていた。

好きです。俺と付き合ってください。これが一番かな。いや、僕の方がいいかな。僕と付き合ってください。いや、お付き合いして下さいの方が丁寧だな。

それより、「ごめんなさい」って言われたらどうしよう。そうだよ、なんて話すかより、そっちの方が問題じゃないか。どう考えても、奈々枝さんが俺の方を向いてくれる気がしないし。

そうだ、さつき、「勇樹を見てれば、そんなこと分かるでしょう」ってさゆりさんが言ってたな。じゃあ、逆に奈々枝さんが俺に対してどう思っているか、考えてみるか。

えっと、まず、タイヤキ買ってくれたし、そうそう、ジュースも

買ってくれた。そういえば最近、俺の側に居るような気がする。もしかしてこれは！・・・でもな、奈々枝さん、誰にでもやさしいから、俺のこと、その他大勢のうちの一人位にしか見ていないんだろ。うなきつと。

でもちよつと待てよ、さゆりさんと文江さんがあれだけ後押しするってことは、実は奈々枝さん、俺に気があるのかも知れないぞ。前に、好きになるのは時間がかかるって言うってたしな。そう言うことだったのか。おいおい、勇樹、お前もすみに置けないな、って、それじゃ正人の思考回路と同じになっちゃうじゃないか。まあ、冷静に考えれば、奈々枝さんが俺に気がある訳がないし。

もし、明日「ごめんなさい」って言われたら、もう二度と練習やライブに来てくれないかも知れないし、そうだったら、奈々枝さんを一生見れなくなるじゃないか。やっぱり、好きです。付き合ってくださいなんていえない。

あーどうしよう。こんなもやもやしてるのも嫌だし。でも嫌われたら、もう会えなくなるような気がするし。当たって砕けると言うけど、当たって砕けるような気がするし。いや、でも・・・。

勇樹は、ご飯を食べているときも、お風呂に入っている時も、トイレに行っている時も、ずっと同じことを考えていた。そして、いつまでたっても結論は出なかった。もつとも、奈々枝の気持ちから分らないのに、結論が出る訳はなかった。ドラえもんがいて、相手の心の読める機械を出してくれたらな、と子供じみたことを勇樹は布団の中で一人考えていた。

七話

「ごめん、待たせちゃって」奈々枝が一時を十五分位回ったところで現れた。

それを見て勇樹はドキツとした。いつもより大人びた服装の奈々枝がそこにいたからだ。しかも、耳には小さいながらもイアリングをしているのではないか。勇樹は、自分の、ＴシャツにＧパンという格好と見比べて、あまりの落差に、最初からワンツーパーンチを食らったような気がしてしまった。

勇樹は、さつきまで真夏の太陽なんて感じないくらい緊張していたのが、急にじりじりとした不快なものになったような気がしていた。

「いえ、俺もさつき来たばかりですから」

初めてコンビニで客と接するアルバイト店員のような固い笑顔で勇樹は言った。

二人は音符に入っていた。吉田がいつもの格好で店の中を掃除していた。

「おう、どうした。ギターでも買いにきたのか」吉田は雑巾を絞り、立ち上がると二人の方へ向かって来た。

「いえ、そんなお金はありませんよ。今日はピックを買いにきたんです」

「おおそうか。じゃあ、そこにあるやつ、適当に見ていいぞ。あれ、奈々枝ちゃん今日はいつもよりきれいじゃないの」吉田はポンと奈々枝の肩を叩いた。

おい、その雑巾を絞った汚い手で触るな。勇樹は口を尖とがらせた。吉田はそんなことには気が付かず、また、ガラスケースを拭き始めた。

勇樹と奈々枝が二人でピックを見てみると、吉田が話しかけた。

「ところで、今日は二人だけなの？」

「ええ、今日は二人だけです」勇樹は答えた。

「怪しいなー、勇樹の顔を見れば見るほど怪しいなー」吉田はひげをなぞった。

「俺の顔に何かついてますか？」

「鼻の下が、いつもの二倍はあるぞ」

「鼻の下二倍あります」勇樹は奈々枝の方を見て、鼻を突き出すようにした。奈々枝は何も言わずに笑った。

「これがいいんじゃないかな」奈々枝が白いピックを手に取った。

それは、ごくごく普通のピックだった。でも、勇樹は奈々枝が選んだくれた、世界に一つだけだのピックを迷わずに買った。

「そうか、そうだったのか。お前ら、そういう仲だったのか」おつりを持って来た時、吉田が言った。

勇樹も奈々枝も何も言わずに、笑って音符を後にした。すぐ夏の太陽がじりじりと照りつけてきた。

「ねえ、勇樹君。私も付き合ってもらっていいかな。ちょっと文房具屋さんに行きたいの」

「もちろん、いいですよ」勇樹に断る理由のある訳がない。

二人は文房具を見て、レコードショップを見て、本屋にも寄つたので、喫茶店で話しをした。ボイスはさゆりや文江がいそうだったのもりでいた。しかし、周りの客の目が気になって、ありきたりの話でお茶を濁してしまった。

ああ、今日は告白できないかも知れないな。勇樹は帰り道奈々枝と歩きながら考えていた。喫茶店で言おうとしても、人が多かったような気がするし。それにこの道も人が多いし。いや、そんなに多くはないけど、多いような気がするし。そうだ、その先に公園がある。そこで、そんな雰囲気になれば言えるかも。

「あー、その公園歩きませんか」勇樹は誘ってみた。

「うん、いいよ」奈々枝は勇樹の後をついてきた。

公園では、小学生が五、六人遊んでいた。こいつら、俺の邪魔を

しやがって、と思いながらも、勇樹はなんとなくほっとしたのも嘘ではない。しかし、小学生は勇樹たちが公園に行くと、「じゃあな」と言ってみんな帰って行った。やばい、みんな帰っちゃったよ。勇樹は全身がしびれてくるのを感じた。

公園の池の周りを歩いていると、勇樹の緊張はピークに達した。昨日あれだけ準備したのに、なんて言っているのか分からなかったし、言葉が一つも出てこなかった。

「奈々枝さん、今日は、無理言っつけて付き合ってもらって、ありがとうございます。」

勇樹はありきたりのお礼を言った。

「うん、いいのよ。私こそごめんね。いろいろ付き合わせちゃって。」

「いえ、でも、とても楽しかったです。」

「本当？そう言ってもらえると、うれしいな。」

えっ、うれしい？その言葉に勇樹の胸は高ぶった。もしかして、これは、じゃあ、今こそ言っしかない。

「あのー、そのー、じゃあ、また、誘ってもいいですか？」

ダメだ言えない。

「うん、私でよければね。」

私でよければ！これは、本当にもしかするぞ。勇樹、いまこそ言っただ。勇樹は、自分を奮い立たせた。

「あのー、あのー、俺、そのー、奈々枝さんを・・・好きになってもいいですか。」

ダメだ勇樹、なんだその中途半端な言葉は。勇樹は自分で自分を叱咤し、そして頭の中は割れんばかりに脈打ってきた。

「うん」奈々枝が頷いた。

うんか、そうか、えっ、うん？勇樹は立ち止まって、勇気を出して奈々枝を見た。奈々枝も立ち止まって勇樹と目を合わせた。

「じゃあ、私も勇樹君のこと好きになってもいい？」奈々枝がちょっと緊張した顔で勇樹をみつめた。それを聞いて勇樹は言った。

時は一瞬もやもやは消えたが、また、すぐ、入道雲のように勇樹の心の中を荒らし回った。

次の日、勇樹は町でばったり弘道に会った。弘道は彼女を連れていた。

「勇樹君じゃないか。どうだ、ちよつとお茶でも飲むか」と誘われたので、勇樹は遠慮なくついていった。

「ああ、この子、こないだライブに出てた子じゃない」椅子に座ると弘道の彼女は言った。

「そうだよ」

「若いのに、あの度胸は大したもんだって、みんな言ってたわよ」

「でもな、こいつすごい緊張してたんだぜ。だけど良かったよ。俺も大丈夫かなって思ってたんだけどさ」

あれやこれやと話しをしていると、勇樹は思い立った。そうだ、弘道さんなら、このもやもやの正体を知っているかも知れない。そう思った勇樹は弘道に聞いてみた。

「勇樹君。それはな、人を好きになったからだよ。その人と一緒に居たい。話しがしていたいって思うだろ。でも、現実にはそうはいかない時のほうが多い。だからもやもやとしているんだと思うよ」
「その気持ち分かります。そうか、それが、このもやもやの正体だったんですね」勇樹は何度も頷いた。

「そうさ。そのうち、その彼女と何度も会っているうちに、手を繋ぎたい、キスがしたいって思うようになる。どんどん、そういう風に思ってくるのさ。だから、残念ながら、そのもやもやはしばらく消えないよ」

「そんなもんなんですかね」

「いいじゃないか。そんな気持ちになるってことは、恋してるってことさ。俺なんかうらやましいよ」

「あら、じゃあ、弘道は私といて、そんな気持ちにならないの？」
横に座った彼女が割って入った。

「バカ、俺は勇樹君より大人だから、その気持ちをコントロールできるだけで、勇樹君はまだ若いから、こうやって苦しんでいるのさ」「どうだか」彼女はチラツと横目で弘道を見た。

「弘道さんは、若い頃、同じ思いしました？」

「ああ、したよ。勇樹君とまったく同じだ」

「女の子もそれは同じ。私も、いつも一緒にいたくていたくてしょうがなかったもの。きっと君の彼女も今頃同じ思いをしてるはずよ」「そうですか。なんか、自分だけ、こんな思いしてるのかと思いましたが、みんなそう思ってるんですね」勇樹は弘道と話して、随分楽になった気がした。

「ところで、勇樹君の彼女、奈々枝ちゃんかい？」弘道が突然聞いた。

「何で、知ってるんですか」

「昨日、音符にいったら、吉田さんが、勇樹が鼻の下二倍に伸ばして奈々枝ちゃんと一緒に来た、って言うてたからさ。いいじゃないか、君達、お似合いのカップルだと思うよ」弘道はにこっと笑った。あのヒゲ親父。汚い手で奈々さんには触るは、俺の鼻の下が二倍になってるって言い触らすは、とんでもない親父だ。勇樹はそう思いながら鼻の下を触った。

「ああ、奈々枝ちゃんって、私の近所に住んでいた子ね。あの子、お父さんいないのよね」彼女が言った。

「えっ？」勇樹は驚いた。

「あら、ごめんなさい。知らなかったの？」彼女はちよつと困った顔をした。

「初めて聞きました」もちろん勇樹は、そのことは知らなかった。「どうして、お父さんがいないんですか」勇樹は聞いた。

「私から聞いたって言わないでね。お父さん、二年前に事故で死んじゃったの。その時は、まだ、奈々枝ちゃんが中学生だったから、卒業するまで待って、引越したのよ」

そういえば、昨日送っていった所は、勇樹の行っていた中学の学

区だった。でも、奈々さんを中学校で見たことが無かったと思っただら、そういうことだったのか。勇樹は奈々枝の暗い部分を知って、少ししんみりとした。

「勇樹君。君がそういうことを忘れさせてやるくらいに、支えてやればいいんだよ」弘道が勇樹の頭を撫でた。

「そうですね」勇樹は頷いた。

「あれ？勇樹君、そう言えば、奈々枝ちゃんは一つ年上じゃないか」弘道がタバコに火をつけながら言った。

「そうです。一つ年上です」

「そうか。じゃあ、俺とこいつの関係と同じだな」弘道は隣の彼女を見た。

「女は一つ年上に限るぞ。金のわらじを履いて探せって言うくらいだからな。俺なんか、こいつが最高の女だって思ってるもん」

「あら、ご馳走様」隣の彼女はニコっつと笑って弘道を見た。ご馳走様は、こつちのせりフですよ。勇樹もニコっつと笑った。

「おい勇樹、奈々枝さん達遅いなー」勇樹と正人は夏祭りに設置された休憩所のパイプ椅子に座ってキョロキョロしていた。

目の前を、ハッピー姿や、ウチワを持った人達がひっきりなしに行きかっていたが、奈々枝たちの姿は見えなかった。

「きつと、おめかしして来るんだぞ。もし奈々枝さんが、浴衣姿なんかで来たら、俺くらくらしちゃいそうだ」

正人、実は俺、奈々さんと付き合い始めたんだ。勇樹は正人にそのことは言っていなかった。

今日の練習は正人が一番遅れてきた。勇樹が倉庫に行くと、すでに、奈々枝達は三人揃っていた。

「王子様のご到着だね」さゆりは勇樹を見るなり言った。

「からかわないで下さいよ」勇樹は頭をかいた。どうやら、奈々さんとのことは、全員知っているらしい。まあ、この三人の間だったら知っていてもおかしくはない。

勇樹は奈々枝に会えることはうれしかったが、正人の顔を見るのはつらかった。俺と奈々さんのことは正人に言わなくちゃいけない。でも、どう言えばいいんだろう。勇樹は、練習中そのことばかり頭をよぎって、練習に身が入らなかった。

そんな勇樹を見て、練習が終わるとさゆりが勇樹を呼んだ。

「勇樹、正人に話したの？」とさゆりが勇樹に聞いてきた。勇樹は黙って首を振った。

「それは、あんたたちが解決する問題だからね。あたしはもう手助けしないよ」さゆりはそう言うに戻って行った。

「おい勇樹、なにしてんだよ。帰るぞ。今日、夏祭り行くんだろう」正人がギターを持ってやってきた。

「ああ」勇樹もギターを背負うと、自転車に乗って正人と並んで走った。その時、勇樹は奈々枝のことを正人に話そうと思ったが、とうとう言えなかった。そして、こうやって勇樹と正人は二人で並んで、奈々枝達が来るのを待っているのだ。

勇樹は、ちらっと正人を見た。さっきの練習の時といい、今といい、正人だけが真実を知らないんだ。それは逆に正人にとって、不幸なことじゃないのか。うんと一人で頷くと、勇樹は正人に話しかけた。

「正人、ちょっと聞いてくれ」勇樹は体を正人に向けた。

「なんだよ、真面目な顔して」正人は首だけ動かして勇樹を見た。

「実は、俺さ、奈々枝さんと付き合い始めたんだ」勇樹が言った。

「そんなこと知ってたよ」正人は前を向き、ウチワで自分の顔を仰いだ。

「おととい、お前と奈々枝さんが一緒に歩いているの見たよ。あれはどう見ても恋人同士の顔だった。いつお前が俺に報告するか待ってたんだ」

「知ってたのか」勇樹も前を向いて、ウチワで自分の顔を仰いだ。

「大丈夫、俺はそんなことで、お前をどうのこうの言ったりしないから。それに、昨日一日泣いてたから、もう、辛いのも流れてしま

ったよ。ただ、一発お前を殴ってやりたいとは思ってたけどな」

「正人、殴っていいぞ」

「いや、そんなことしないさ。俺が殴ったって何の意味もないだろう。それはただの暴力だ。でも、お前が奈々枝さんを泣かせたら、俺が殴ってやる。それまで、取っついてやるよ」

正人は相変わらず前を向いていた。

「正人」勇樹は黙って正人の横顔を見ていた。

「なんだよ、シンキくさい顔しやがって、俺はなんとも思っていないって・・・いや、嘘だ、すぐくシヨックだ。でも、それは、奈々枝さんを取られたことがシヨックなだけで、俺とお前の関係は今まで、これからも同じだ。気にするなよ」

正人は、また、前を向いてウチワで顔を仰いだ。しばらく勇樹と正人はそうやってただ前を向いてパイプ椅子に座っていた。

「ごめん。遅くなって」奈々枝と文江が三十分遅れで到着した。

「どうしたの二人とも黙っちゃって」文江がしゃがんで、勇樹と正人の顔を覗き込んだ。

「文江さん、どうしたのその浴衣！」正人は驚いた。勇樹も驚いた。文江はピンクに黄色にオレンジに、まるでアニメの世界から飛び出してきたような浴衣を着ていた。しかも、髪も黄色や赤が織り交ぜてあって、通り過ぎる人も文江を見て驚いていた。

「これ？これはねえ、私のお気に入りなの。どう？似合うでしょう？」文江は勇樹と正人の前でぐるりと回った。

「文江さん、よく似合ってますよ」正人が言った。

そう言えば正人もアニメは好きだ。こういう感性は好きな人間でないと分からないだろう。

「文江は去年もそれ着てたよね」横にいる奈々枝が言った。勇樹は立ち上がって、奈々枝を見た。奈々枝は紺を基調にして、花柄の模様がある浴衣を着ていた。

「奈々さんも、とっても似合ってますよ」

「ありがとう。でも、私のはちょっと地味だけだね」

「文江さんのが、目立つからそう思うんですよ」

突然、正人が勇樹の肩に手を当てて奈々枝に言った。

「奈々枝さんもとっても似合ってますよ。俺、くらくから来てますもん。それから、こいつのことよろしく頼みます。こいつ、悪い奴じやないのだけが取り得ですけど、俺にとつては大事な友達なんです。だから、面倒見てやって下さい。ほら、お前も頭下げろよ」正人は勇樹の頭を手で抑えた。奈々枝も文江も笑っていた。

四人で歩きながら山車を見ている頃には、日はすっかり落ちていた。しかし、人込みと、熱を持った地面からの放熱、そして、祭りの熱気が、むんむんと体に張り付いてきた。

勇樹は、露天の明かりや街灯に照らされる奈々枝を見ていた。髪を上げた奈々枝は、時折うなじが見えた。勇樹はそれを見てドキッとしたり、前を向き、またドキッとしたりは前を向きを繰り返した。

奈々さんきれいだなー。勇樹が奈々枝を見ると、奈々枝がその視線を感じたのか、くるっと勇樹の方を振り返った。

「勇樹、どうしたの？」

「いえ、その、奈々さんきれいだなーと思って」勇樹は照れ隠しに、一つせきをした。奈々枝も照れたようにニコッと笑うと、なにも言わずに前を向いた。

そうこうしているうちに、だいぶ混雑してきた。四人一列で歩いていたが、いつの間にか文江と正人がはぐれてしまった。勇樹は前を歩き、その後ろを奈々枝がついてきていた。

勇樹は後ろを振り返りながら歩いていたが、奈々枝が遅れそうになったので、右手を差し出した。奈々枝は右手で勇樹の手をぎゅっと握った。そのまま、しばらく歩くと、ようやく空いている場所に出た。

勇樹と奈々枝は、その場所で正人と文江を待つことにした。勇樹はウチワで体を仰いだ。奈々枝も顔をウチワで仰いでいた。

「勇樹の手、大きいね」奈々枝が言った。

「そうですね。いや、人と比べたことないから、分かりませんけど」
勇樹は右手を広げて奈々枝の顔の前に差し出した。

「ほら、やっぱり大きいよ」奈々枝は左手を勇樹の手と合わせた。

「俺、男ですから、奈々さんよりは大きいですよ」

「そうだよ。男の人の手は大きいよね」奈々枝の目が一瞬曇った。
勇樹は、静かに合わせていた手を下ろした。

「奈々枝、元気してたー」突然、女の子三人が奈々枝に声を掛けてきた。どうやら同級生らしい、勇樹は一步下がって、奈々枝と女の子が話しているのを脇で見ている。

しばらくすると、一人の女の子がちらちらと勇樹を見出した。そして、ひそひそと話しをすると、突然声が上がった。

「やだー、うそー、そうなのー」

自分のことを話されていると思った勇樹は、何となく気恥ずかしくなつて、さらに一步下がった。その時、勇樹は側溝に足が入り、転んでしまった。

「勇樹、大丈夫？」奈々枝が駆け寄った。

「大丈夫です」勇樹は、足に激痛が走ったが、奈々枝の友達にみつともない所を見られた恥ずかしさから、何事も無い様に立ち上がった。

「じゃあ、私たち、行くから、じゃねー」奈々枝の友達は、また、ぺちやくちゃ話しながら立ち去った。

勇樹は、「うっ」と言うとその場に座りこんだ。

「どうしたの勇樹？」奈々枝が心配そうにしゃがんで、勇樹の顔を見つめた。

「大丈夫、すぐ直りますから」勇樹は顔を歪めて、痛みを我慢した。どうやら転んだ拍子に、右足のくるぶしを痛打したようだ。

しかし、勇樹の足からはなかなか痛みが引かなかった。勇樹はしばらくその場につづくまっていた。そのうち、正人と文江もやってきた。

「勇樹君、大丈夫？」文江が声を掛けた。

「勇樹、お前くるぶしぶつけたのか？」正人はしゃがんで、正人が押さえている所を見た。勇樹は黙って頷いた。

十分もすると、徐々に勇樹の足からも痛みが引いていった。「もう、歩けるかも知れない」勇樹は立ち上がった。おそろおそろ右足を前に出した。歩けないことはないが、体重を掛けると痛みが走った。これは、みんなと一緒に歩くのは無理だな、と勇樹は思った。

「ごめん、俺、もう帰るから、みんなでお祭り見てっってくれよ」

勇樹は三人の顔を見回して言った。

「じゃあ、私、送ってく」奈々枝が勇樹の横に立った。

「え、でも」勇樹は奈々枝を見た。

「一人じゃ、心配だもん。私を送ってくから、二人はボイスのイベントにでも行っ来てたら」

「俺が、勇樹を送っていきますよ」そう言った正人を、文江が制した。

「いいから、正人君、ボイス行こ。じゃあ奈々枝、勇樹君のことよろしくね」手を振って正人と文江はボイスに向かった。後ろから見ると、文江が正人になにか言っているようだ。そして正人は頭をかいていた。

勇樹は、混雑している通りを、右足を引きずりながら歩いていた。

「奈々さん、ごめんね。せっかくの祭りだったのに」

「ううん、いいよ。でも驚いちゃった。勇樹が立てなかった時は、どうなるかって思ったけど」

「俺、くるぶしの骨くっついてないんですよ。だから、ここをぶつけると、物凄く痛いんです」

「直らないの」

「医者に、直らないって言われました」

しばらく歩くと、露天のタイヤキ屋があった。

「勇樹、タイヤキ食べるでしょう」

「食べる、食べる」

勇樹と奈々枝が、道路の端に腰掛けて、それぞれジュースを飲みながらタイヤキを食べていると、頭を坊主にした集団が目の前を通った。

「来年は、大成高校に勝って甲子園に行くぞ」一番前を歩いていた生徒が後ろを振り返って大声を上げた。「おおー」後ろの生徒もそれに合わせて大声を上げた。

「ねえ、勇樹。どうして高校で野球やらなかったの。もしかして、坊主になるのが嫌だったとか」奈々枝はその集団をずっと目で追っていた。

「足のせいですよ」勇樹はタイヤキを口にほおばりながら言った。

「足のせいって？」奈々枝が勇樹を覗きこんだ。

「実は、俺、県大会でのピッチングが認められて、光ヶ丘学園に入学することになっていたんです。でも事前の健康診断で、くるぶしの骨がくっついてないって言われて。普段は痛くないんですけど、練習すると、痛くてたまらなかったんです。そんなことは誰にも言いませんでしたけど。まあ、仕方ないですね」

「本当は、野球やりたかったの？」

「前までは、野球部の練習見てるだけで嫌でしたよ。悔しくて。でも、今はそんなことは思わないですけど。それに、野球やってたら、奈々さんに会えなかったでしょう」

「なかなか言うな、こいつー」奈々枝が右手の人差し指で勇樹の額を押した。

しばらく、二人は黙って山車が通り過ぎるのを見ていた。

「勇樹、私も、言っておきたいことがあるの」奈々枝が切り出した。

「私、お父さんいないんだ。事故で死んじゃったの」

「そうなんですか」勇樹は、知らなかったフリをした。

「だから、さつき勇樹に手をつないでもらった時、お父さんを思い出しちゃって・・・なんか、ごめんね」奈々枝の目にはつつすらと涙が浮かんだ。

「奈々さん。一緒に頑張りましょう。音楽も、恋愛も、もちろん勉

強も。二人で頑張りましょうよ」

「そうだね。ねえ、勇樹、もう一つタイヤキ食べない？」

「食べる、食べる」

勇樹は、奈々枝に家まで送って貰った。勇樹は角を曲がるまで奈々枝を見ていた。奈々枝は角を曲がる時、勇樹に手を振った。勇樹も手を振った。

ああー、この瞬間がたまらなくせつない。もっと一緒にいたかったのに。勇樹はそう思いながら、家に入った。

寝る前に、奈々枝から「一緒に、頑張りうね。おやすみ」とメールが来た。勇樹は「今日は、ありがとう。おやすみ」とメールを返した。

八話

勇樹は、勉強以外は充実した高校生活を送っていた。ライブも何回かこなし、奈々枝との関係も順調だった。たった一つ汚点があるとするれば、正人に二学期の中間試験で惜敗したことだろう。中学時代から、正人に遅れをとったことはなかったが、初めて、正人の軍門に下った勇樹は軽いショックを受けた。

「お前なあ、こんな低空飛行のところまで競いあつたつて、しょうがないだろう」正人はそんな風に言っていたが、その顔は言葉とは裏腹に勝利の喜びがにじみ出していた。

確かに、俺は勉強しなかったから、まあ、しょうがない。正人は案外コツコツやるタイプだし。でも、このままだと、逆転出来なくなるかも知れないぞ。勇樹はちょっと不安を覚えた。

正人は、相手が格下と見ると、情け容赦なく痛めつける習性がある。それだけは俺のプライドが許さない。でも、どうやって勉強すればいいんだろう。

勇樹は、これまで勉強をするという習慣がなかった。小学校の時は遊んでばかりいたし。中学の時は野球漬けだったし。まあ、それで、そこそこの学校に入ったのだから、才能はあるはずだ。それが唯一の勇樹のよりどころだった。

勇樹は、特に数学が苦手だった。あの、ルートだか、シグマだか分からないが、古代エジプトの象形文字のような記号を見るだけで古いコンピュータのように固まってしまふのだった。

勇樹は、問題集を解いていたが、いらいらして鉛筆をほうり投げた。やめた！なんで土曜日にこんなことをしなくちゃいけないんだ。

勇樹は、最初、ここからここまでは毎日やると計画を立てていた。

そして、今日は土曜日だったので、バンドの練習があることもあり、午前中に終わらせてしまおうと机に向かったのだ。

「はははは、お前は案外バカだな」正人にそう言われていることを想像した勇樹は、放り投げた鉛筆を探し出し、また、問題集とにらめっこした。

いくら、頭を抱えても、問題を逆さまに見ても解答が出るわけではない。これじゃ、明日まで立っても一ページも解けないじゃないか。明日は奈々さんと映画を見る約束してるのに。ん？奈々さんか。そうだ、奈々さんだ。

勇樹は携帯を取ると奈々枝にメールを入れた。

「数学の問題が全く分かりませーん。教えて下さーい」。すると、しばらくして、「いいよ。これから家に来ない？」と返事が来た。

家に来ない？いや行ってもいいけど、いや、是非、行きたいけど。勇樹は奈々枝に電話した。

「今、私も勉強してたところ。良かったら、一緒に勉強しようよ」

「いいの。家に行つて」

「うん、お母さんが、お昼ご飯、よかつたら一緒に食べようつて、言ってるし」

「あつ・・・うん、じゃあ、これから行きます」勇樹は母親と会うのは気が引けたが、勉強道具とギターを持って、奈々枝の家に向かった。

「勇樹君ね、どうぞ上がつて」奈々枝の母親が出てきて、勇樹を家に入れた。「ちょっと待っててね」母親は、そう言うのと二階に上がつて行つた。

しばらくして奈々枝が二階から降りてきた。「ごめんね待たせて。じゃあ上に行こ」勇樹は奈々枝の後をついていった。

奈々枝の部屋は、女の子の部屋の割には、ポスターや小物が少なく、シンプルな感じがした。しかし、その部屋は、奈々枝の香りがブーンとして、勇樹は何度でも深呼吸をしたい気分かられた。

小さい机を床に置いて、問題集を広げ、勇樹は奈々枝に数学の問題を教えてもらっていた。さすがに学年が上なだけあって、奈々枝はポイントを押さえて、勇樹に教えてくれた。

数学の、はげちゃびんより、よっぱど教えるのが上手だ。勇樹はそう思いながら、今度は一人で問題集を解き始めた。

おお、すらすら解けるじゃないか。勇樹は、今日の目標のところまでは全部終わった。奈々枝を見ると、奈々枝は物理のテキストを開いていた。勇樹は、それを見て、よし、明日の分も終わらせようと思い、また、問題集を開いた。

勇樹が明日の分を終わらせると、ちょうど、一階から声が聞こえた。「ご飯できたよー」

「どう、勇樹、終わった？」奈々枝が顔を上げた。

「うん、終わったよ」

「じゃあ、行こう」勇樹は奈々枝の後に、階段を下りていった。

居間では、母親が台拭でテーブルを拭いていた。

「そこに座って」奈々枝に椅子を出してもらい、勇樹はテーブルの前に座った。奈々枝は母親を手伝いに台所に向かった。勇樹が、ちよつと落ち着かない風で、あちこち部屋を眺めていると、スパゲッティを持って、奈々枝がやってきた。その後をサラダを持って母親が居間に入ってきた。

「さあ、どうぞ。おかわりもあるから遠慮しないでね」母親が勇樹を見て言った。

勇樹が緊張しながら食べていると、母親が話しかけた。

「勇樹君ありがとう。いつも、奈々枝がお世話になって」

「いえ、逆にこっちが面倒見てもらってるんですよ」

「でもね、本当に奈々枝は、あなたの話しをしている時は楽しそうにしてるのよ」

「ちよつと、お母さん、そんな話はいいでしょう」

「あら、いいじゃないの。お付き合いしてるんでしょう？だったら、楽しくって当たり前よねえ。最初は、好きな人が出来ただけで、いくらアプローチしても、全然気付いてくれないって言ったのにな」

「お母さん、もうその話はやめて頂戴」

「はいはい、でも、勇樹君はまだ若いから、周りくどいことされても、分らないわよね」

「もう」奈々枝はふくれ面をした。母親はぺロっと舌を出して勇樹を見た。

勇樹はそのやりとりが可笑しかくて、フォークを右手に持ちながら下を向いて笑った。

「実は、私、勇樹君のこと、見たことあるの」

「どこですか？」

「音楽村に吉村さんでいるでしょう。前に私と同じ課にいたことがあった人だけど、ライブの時に、勇樹君つてどの人つて、ちょっと見に行つたことがあつたの。その時に教えてもらったの」

「吉村さん？ああ弘道さんのことですね」勇樹は頷いた。

「勇樹君、終わった後、ちゃんとみんなに挨拶してたわよね。しっかりした子だなんて、その時思つたわ」

「いやーそれほどでもないですよ」勇樹は首を振った。

「実はね、うちの人も昔、同じようなことしてたのよ」

「えっ、お父さんが」奈々枝は初めて聞いたようだ。

「そうよ。もう、勇樹君は若い頃のお父さんそっくり、私が惚れちゃいそうだわ」

さすがに、奈々枝もそれを聞いて笑った。勇樹もスパゲッティを口から数本出したまま笑ってしまった。

昼食を終え、勇樹と奈々枝はまた部屋に戻った。勇樹がギターを出して弾いていると、母親がタイヤキとお茶を持ってきた。

「これ、食後のデザート、ここに置いておくから」そういつて、母親は部屋を出て行った。

「奈々さんのお母さんつて、面白い人ですよね」勇樹はタイヤキを食べながら言った。

「もう、余計なこと言うんだから。こつちがハラハラしちゃう」

「でも、俺、奈々さんがアプローチしてくれたの、全然気が付かなかったな」

「そうでしょう。こいつ鈍感なんじゃないかって思ったもん」奈々枝は口に手を当てて、フッフと笑った。

今日は音楽村のクリスマスライブに向けて、新しい曲を練習することになってた。しかし、曲は決まったが大きな問題があった。曲はチャゲアスのバラードに決まったのだが、チャゲアスは二人で歌っているし、歌うのが勇樹一人だけでは、なんとなくしまらないだろう、という意見がさゆりから出たのだ。そして、さゆりも正人も歌はダメだときている。それが、大きな問題だった。

「奈々枝さんか、文江さん、どっちか歌ってくればなんとかなるかも」正人が言った。しかし、二人とも大きく首を振った。

「そうだね、そういえば、奈々枝も文江も結構歌上手だったよね。よし、じゃあ、三人で歌うことにしよう」

さゆりの一言で決まった。勇樹と正人は楽譜を見ながらギターを練習した。奈々枝と文江は、さゆりのキーボードに合わせて、ハモリの練習をした。

時折聞こえる二人の歌声は、最初こそずれたりしていたが、最後にはぴったり息のあったハーモニーを奏でた。

「勇樹、お前が歌うより、さわやかでいいんじゃないか。俺は二人に一票入れるぞ」正人は右手の人差し指を一本立てて、勇樹の顔の前に差し出した。

「バカかお前は、冗談はやめろよ」勇樹は正人の手を払いのけた。

「お前に、バカ呼ばわりされる覚えはないなあ」正人は、上から視線で勇樹を見た。

始まったよ、こいつ。くそ、いくら自分のせいとはいえ、正人にこんな目で見られるのは、悔しくてたまらない。見てろよ、俺には奈々さんと言っ、強い見方があるんだ。学期末では見返してやるからな。勇樹は、知らん振りしてギターを弾き始めた。

「おや？中間で僕に負けたのが、随分悔しいようだね勇樹君。まあ、君もせいぜい頑張りたまえ」嫌味たっぷりの言い方だった。

絶対こいつには負けない。いや、負けられない。こうなったら、意地でも、この野郎をぎゃふんと言わしてやる。

「正人君。君は中間で勝ったくらいで、天狗になっっているんですか。小さい人間ですねえ」勇樹も嫌味たっぷりに言った。

「負け犬の遠吠え・・・か」小声で正人が言った。

当たりだ、正人。悔しいけど、それは大当たりだ。分かったよ、俺の負けだよ。でも、そんな言い方しなくてもいいだろう。勇樹は正人をにらんだ。正人も勇樹をにらみ返した。

「二人とも、なにやってんのよ」さゆりが声を掛けた。

「いえ、こいつ俺より中間試験の成績悪かったのに、俺のことバカって言うもんですから。ちょっと、人生の辛さを味合わせてやろうと思ひまして」

お前、そんなこと、ここで言うことないだろう。えっ、さゆりさん、なんで、そんな驚いた目で俺を見るんですか、それに、文江さんも。奈々さん！奈々さんまで、そんな目で・・・。勇樹は、がくつと首を垂れたまま、しばらく、立ち直ることが出来なかった。

勇樹と奈々枝は映画館を出て歩いていた。「面白かったね」奈々枝が言った。勇樹も頷いた。

空は透き通るように青く、雲はすじになって、高いところで悠悠としている。枯葉は、カサカサと乾いた音とともに、足元を舞っていた。手や顔に当たる空気に、冷たさを感じながら二人は歩いた。

ボイスの前を通ったとき、二階の窓からさゆりが顔を出して手を振った。「寄ってかない？」

ボイスのテーブルに座ると、さゆりが水を持ってやってきた。「ご注文は、なにになさいますか？」

「さゆりさん、何やってるんですか？」勇樹が聞いた。

「お手伝いよ、お手伝い。私、日曜日だけ、ここで、お手伝いすることになったの」さゆりは嬉しそうだ。

「お手伝いって、バイトでしょ」勇樹は横目でさゆりを見た。

「さゆり、その格好、とっても似合ってるよ」奈々枝はさゆりを見て言った。さゆりは、紺色のエプロンをしていた。

「そう？そう思う？」さゆりは楽しそうに首を左右に傾けた。

注文をとり終わると、さゆりは厨房へ向かった。

「さゆりさん。天田さんと一緒にいれるんで、嬉しそうですね」

「そうね。あの、パワーにはとてもかなわないって思う」

「でも、さゆりさん、天田さんの前では、すごくおしとやかに振舞ってますけど。無理して疲れないのかな」

「さゆりはねえ、本当はああいう子なの。無理してお酒飲んだり、タバコ吸ったりしてるけど、実際とは違うのよ。言葉遣いはちょっときついけどね」

「なんか、俺達と練習している時より、楽しそうに見える」勇樹はさゆりをじつと目で追っていた。

「でも、さゆりは、みんなで音楽やってるの、楽しいって言ったよ。でも、私がいっしょにしないでダメだって思ってるんだと思う」

「それは、俺と正人がだらしないからかな」勇樹は自分で自分の頭を叩いた。

「きつと、そうだと思う」奈々枝は笑った。

「はー、やっぱりそう思いますよね。分かるような気がします」勇樹はもう一度自分の頭を叩いて、さゆりを見た。厨房で生き生きとして働いている、いや、手伝っているさゆりを見て、やっぱり普通の女の子なんだなと勇樹は思った。

ドアが開いて、制服を着た女子高生の女の子が二人、店に入ってくると、奈々枝の後ろに座った。

「ねえ、勇樹、今度のライブ、私と文江が歌って、うまく行くかな」不安そうに奈々枝が聞いた。

「大丈夫ですよ。昨日だって、上手に出来たもん。それに、三人で歌えば、ちよつと失敗したって、誰も気付かないと思うし」

「そうだといけど」

突然、後ろの女子高生が振り向いた。

「奈々枝じゃない」

「あれ、裕子、来てたの」

「うん、今、来たところ」

勇樹は、頭だけ下げて挨拶した。その女子高生も軽く頭を下げた。
「奈々枝、ちょうど良かった。この前奈々枝に借りた本持ってるんだけど、今、返していい？」

「うん、もう読み終わったの？」

「面白くて、徹夜で読んじゃった。今日も部活の合間に読んでたんだ。じゃあこれ」その女子高生は袋に入った、結構重そうなブルーの袋を奈々枝に渡した。

「ごめんね、取り込み中に」女子高生はそう言つと向き直り、一緒に来た女の子と話しを始めた。

「それ、なんの本なんですか？」勇樹は本の中身が気になった。

「これはね」奈々枝は袋を開けた。

「シドニイ・シエルダン？聞いたことないなあ」袋の中には厚い本が三冊入っていた。本を手にとつてみたが勇樹には聞いたことのない作家だ。

「面白いんだよ、読んでみる？」

「今はいいや。それより、勉強しなくちゃ。今度は正人に負けられないから」勇樹は口を固く結び、こぶしを握つた。

「勇樹、また家へおいでよ。一緒に勉強しよ」

「行きますよ。奈々さん、教えるの上手だし。俺、昨日、ちょっと教えられただけで自信つきましたもん」

「うちのお母さんも、勇樹のこと気に入ってたよ。あの子はしっかりしてるって。また呼んだらって言った」

正人、見てろよ、俺が本気出したら、お前なんか目じゃないってことを証明してやるからな。勇樹は知らず知らずのうちにこぶしをぎゅっと握っていた。

「勇樹、どうしたの？そんなに力入れて」奈々枝が聞いてきた。

「男と男の勝負を思ってたんですよ。今度は絶対負けない。そう心

に決めたんです」

「正人君のことね。勇樹、正人君といると子供みたい。いつもは年下に見えないくらい大人っぽく見えるのにね」

「本当ですか」勇樹はちよつと自信を持った。

「本だよ。私だけじゃなくて、さゆりも文江も言ってるよ」

奈々さんの目はうそは言っていない。自信がついて力がみなぎるのを勇樹は感じていた。

晩秋の日暮れは早い。ボイスが出る頃には、辺りはもう暗くなっていた。むき出しの手の平は、冷たい空気に触れて、どんどん熱が奪われていった。勇樹はズボンのポケットに手を入れた。

しばらく歩いていけると、勇樹は奈々枝が重そうに袋を持っていることに気が付いた。そうだ、奈々さん、さっき友達から本を返してもらったんだ。

「持ちますよ」勇樹は手を差し出した。

「あつ、ありがとう」奈々枝は本を勇樹に渡した。その時、勇樹の手が奈々枝の手に触れた。

なんて、冷たい手なんだろう、と勇樹は思った。

「奈々さんの手、冷たいですね」

「今日寒いからね」奈々枝はそう言つと、両手を口の前に持つていき、息を吹きかけた。

俺が温めてやりたいよ。そうだ、手をつなげば温かくなるんじゃないか。でも、断られたらどうしよう。「勇樹、何考えてるの?」なんて言われるかも知れないし。でも、手をつなぐだけで、そんなことは言わないかな。あー、やっぱり手をつなぎたい。勇樹の頭はぐるぐると高速回転し始めた。そして、寒いにもかかわらず、緊張のため、勇樹の手は汗でびっしょりになっていた。

奈々枝は、勇樹が焦点の合わない目で自分を見ているので「勇樹、どうしたの?」と聞いてみた。

「いや、別に・・・その、奈々さん。手、温めてあげますよ」勇樹

は、奈々枝と向き合って、汗で湿った左手をズボンで拭くと奈々枝の左手を握った。

「痛い！」奈々枝が叫んだ。

「あっ、ごめんなさい」勇樹は手を離して謝った。緊張したせいか思い切り手を握ってしまったようだ。

「もう、勇樹、力入れすぎ。もっと、やさしく握って」奈々枝は左手を差し出した。

「このくらいですか？」

「うん、そのくらい」

「じゃあ、行きますか・・・あれ、これじゃ歩けないや」勇樹は体を横に向けたり、つないだ手を上に上げたりした。

「こうすれば、歩けるかな」奈々枝は、バックを左手に持ち直し、右手で勇樹の左手を握った。

「本当だ、これで大丈夫だ」勇樹は奈々枝の右側に立って歩き始めた。

「勇樹の手、あったかい」奈々枝が言った。

「大丈夫、奈々さんの手もすぐ温かくなりますよ」勇樹は、もう一度しっかりと、奈々枝の手を握り直した。

いつもの公園を抜けて、二人が分かれる交差点が見えると、勇樹はわざとゆっくり歩いた。奈々枝も、それに合わせて、ゆっくりと歩いた。

交差点についた時「じゃあ、ここで・・・」と、奈々枝が言ったのを聞いて、勇樹がさえぎった。

「今日は、送っていきます」

「寒いから、いいよ」

「手をつないでいたいですよ。それに、本を持っていたら、また、手が冷たくなるでしょう」

「ありがとう、勇樹」奈々枝は、そっと、しかし、勇樹にも伝わるように、握っている手に力を入れた。

「勇樹、そろそろ本番だよ」奈々枝が、いつものように緊張して、壊れたロボットのようになってる勇樹に声を掛けた。勇樹の頭には、誰が被せたか分からないが、サンタクロースの帽子が載っていた。しかし、勇樹はそれに気付かないでいた。

「大丈夫ですよ。俺は」勇樹は、隣に座っている吉田が飲んでいたジュースを一気に飲み干し、ステージに向かった。吉田は、またかよ、と言うような顔を見ると勇樹の頭からサンタクロースの帽子を取った。

一曲目を無難にこなすと、いよいよ、新曲の練習の成果を出すときが来た。勇樹は、さゆりの後ろでマイクを持ち、緊張している奈々枝と文江に向かって目で合図を送った。そして、曲が始まった。

「どんなものもが、君の未来に割り込んでも、かまわないさ。僕はずっと味方さ」

決まった！勇樹はそう思った。奈々枝と文江も満足した顔を見せている。正人とさゆりもにこっとして顔を何回も横に振っている。「すごい、気持ち良かった」文江は、オレンジのメガネが落ちそうな位に大声ではしゃいでいた。

「勇樹ずるーい、いつも、こんな気持ちのいいこと一人でしてたの？」奈々枝も興奮気味だ。

勇樹たち五人が一番後ろの席で騒いでいると、大森がやってきた。「勇樹一人より、三人で歌った方が、断然いいな。なんてったって花があるもんな」

「今度は、アカペラでもしますか」勇樹が言った。

「それは、ないんじゃないか。それじゃ俺とさゆりさんは出る幕がない」正人は不満そうだった。

「いいんじゃない、あたしと正人は後ろで踊ればいいんだよ」さゆりはケラケラと笑った。

「そうか、踊ればいいんだ。俺とさゆりさんは浴衣着て踊ろう、これは盛り上がるぞ」

ライブが終わり、後片付けをしていると、正人がつかつかと勇樹のところへやってきた。そして一枚の紙切れを差し出した。

「勇樹、これ解けるか」

「なんだ、これ？」勇樹は紙切れを受け取った。

「水が、五リットル入るバケツと、三リットル入るバケツがあります。これを使って、もう一つのバケツに四リットルの水を入れるとき、最低何回で入れられるでしょうか」その紙切れには書いてあった。

「こんなの、簡単じゃないか、いいか、まず・・・あれ・・・三リットルのバケツに、これじゃだめだ・・・」

「まあ、勇樹君のレベルじゃ、すぐには解けないでしょうから、月曜日までの宿題にしましょう。よく考えて下さい」

まあいい、来週の学期末が終われば、こんなことも言われなくなるさ。正人、悪いな、今度は俺の勝ちだ。お前は知らないだろうけど、いつも、土曜日の練習の前、奈々さんの家で勉強してたんだ。それに、今回は俺もコツコツと頑張ったからな。世話になった、奈々さんのためにも、お前に負ける訳にはいかないし、それに、今度は勝つ自信がある。勇樹は自信ありげに正人を見た。それを見て正人は、不思議な顔をしていた。

「おい、打ち上げ行くぞ」大森が二人に向かって叫んだ。勇樹はその紙切れをポケットにしまうと、ボイスを出た。

「ちょっと早いけど、メリークリスマス！」大森が叫んだ。

「メリークリスマス！」グラスの合わさる音が何回もした。そして、いつものように、宴会が始まった。

今日の席順はくじ引きだったこともあって、勇樹はそれ程親しくない音楽村のメンバーの隣にいた。

話もつきて、勇樹が辺りを見回すと、正人とさゆりがビールを片手に、漫才のような掛け合いをしていた。二人とも目が据わっている。さゆりは天田が来ていないこともあって、だいぶはじけてしまった

ようだ。脇では、文江がウンウンと頷いて、その話を聞いていた。「！」

文江さん、それはビールじゃないですか。勇樹は驚いた。あの文江がビールを飲んでいる。まさか奈々さんも、「！」奈々さんそれは奈々枝の座っている前にはビールの入っているグラスが置いてあった。脇では吉田がビールを持ち、ビールを飲めと催促している。見ると奈々枝は嫌がっているではないか。

勇樹は、吉田と奈々枝の間にどかっと座った。

「こら、おっさん。若い娘つかまえて、なにしてるんですか」

「おっ、来たな正義の味方。まあ、お前も飲め」吉田は、ビールを差し出した。

「俺は、いいですよ」勇樹は持っていたコップを引っ込めた。

「もう、吉田さんしつこいの。飲め飲めって。よくこんな苦いの飲めると思って」奈々枝は勇樹の後ろから、顔だけ出して吉田に言った。

「そうだそうだ、こんな苦いのを無理して飲ませるのは、えっ、苦い？ 苦いって、奈々さん飲んだの？」勇樹は後ろを振り返った。

「半分だけね」奈々枝は肩をすくめた。

「そうだぞ、奈々枝ちゃんも飲んだんだ。お前も飲め、ほら」吉田はビール瓶を差し出した。

奈々さんも飲んだのか。じゃあ、ちよつとだけならいいかな。勇樹は少しなら飲んでもいいかなと思っただけ。というより興味があった。「じゃあ、ちよつとだけ、ちよつと待って下さいよ。俺、奈々さんの飲み残り飲みますから」勇樹は奈々枝のグラスを手に取った。「よし」そう言うと、勇樹は一気にグラスを開けた。

「にが！」なんだこれは、よくこんなの飲めるな。勇樹は顔をしかめ、舌を出して、息を吐き出した。それを見ていた大森が勇樹に声を掛けた。

「勇樹、青春の苦さとは、また違った苦味だろ。それは大人の苦さ

って言う奴だ」大森は一人で言っつて、一人で受けていた。

「しかし、張り合いの無い奴だ。しかも、奈々枝ちゃんの飲み残し飲みやがって。そう言うのを間接キスつて言うんだぞ。そうか、お前それが目的だったんだな」吉田は勇樹を手招きした。勇樹が顔を近づけると、手を口に添えて勇樹に耳元でなにか言っつた。

「まだですよ」ボソツと勇樹が答えた。

「なんて言っつたの？」奈々枝が、また、勇樹の後ろから顔だけ出しつた。

「お前ら、ちゅーしたのかつて聞いたんだ。なんだ、まだだつたのか。勇樹、ほらビール飲んで度胸つつけて、奈々枝さんちゅーしましよつつて、言っつてみる」吉田が下品な笑い方をした。

「もう、吉田さんオヤジ丸出しじゃないですか。勇樹、あつち行こ」奈々枝と勇樹は、正人とさゆり、そして文江が騒いでいるところへ行つて座つた。

勇樹は、しばらく奈々枝の唇を見ていた。その日の奈々枝の唇は勇樹にとつて、とても魅力的に見えた。そして、さつき、吉田にキスのことを言われて、勇樹は、急にそのことが頭から離れなくなつた。

それは、俺だつて奈々さんとキスがしたいさ。でも、「勇樹、不潔！私は、そんな女じゃないの」なんて平手打ち食つたら、それこそ一巻の終わりだし。勇樹がじつと奈々枝のところを見ていると酔つた文江が絡んできた。

「勇樹君。いや、勇樹。あなたは幸せでいいわね」文江はいつもと違つ口調だ。

「はい、ありがとつございます」

「まつたく、自分だけ幸せになりやがつて。それに比べて私なんかうつうつ・・・」文江は泣き始めた。

「きつと文江さんも、そのうちいいことがありますよ」勇樹は文江を慰めた。

「そのうちじゃだめなの！私たちは、来年三年生なんだから。もう、

高校生活もあと一年しかないのよ。それなのに、なにもいいことがなかったら寂しいじゃない」

「文江、あんただけじゃないよ。あたしも同じさ」さゆりが文江の肩に手を置いた。正人は飲みすぎたのか、体をメトロノームのように動かして、目は魚屋に並ぶサンマのようだった。

「勇樹、ここもいずらいね」奈々枝が言ったので、部屋の片隅で二人で宴会模様を眺めた。

「そうか、奈々さん、もうすぐ三年生なんですね。進学希望なんですよ？」

「うん、一応ね」

「そうか、じゃあ、寂しくなっちゃうな」

「それは仕方のないことだけど。でも、あと一年あるでしょ。それまで一緒に勉強したり、映画見に行ったりも出来るし、いい思い出いっぱい作るよ」

「そうですね。ところで、さゆりさんも進学するのかな」

「たぶん、そうだと思う」

「じゃあ、受験勉強しなくちゃいけないだろうから、三人でライブできるのも、来年の夏くらいまでかな」

「さゆりは、やれるところまではやりたいって言ってたけど」

「そうか、じゃあその時まで、頑張るか。あつ、ちよっとトイレ行ってきます」勇樹は立ち上がり、トイレに向かった。

トイレには弘道がいた。勇樹は弘道の脇に立った。

「勇樹君。飲んでるのか？」

「ビールは苦くて飲めません」勇樹は前を向いたまま話した。

「ビールに限らず、酒はまだ早いだろうな。どうだい、奈々枝ちゃんとは上手くいってるみたいだけど、もやもやは直ったかい？」

「全然です。今日、吉田さんからキスしたか？って聞かれたんで、まだですって言ったんですけど、それから、急にそれが気になっちゃって、もやもやしてます」

「そうか、そうか。なーに、あせる必要はないさ。お互いの気持ち

が分かり合っているれば、そのうち、自然とそういう雰囲気になってくるものさ」

「そうですね」

「そうさ。頑張れよ」そう言うと、弘道はトイレを出て行った。

さゆりと正人と文江はタクシーに乗せられて、大森と一緒に家に帰った。さゆりと正人は、家でもたまたま飲んでいるらしく、特になにも言われなかったようだが、文江は、親にこっぴどく怒られたようだ。それから、文江は酒を飲まなくなった。まあ、あの酒癖の悪さを見なくて済むのは、勇樹としてはありがたいことだった。

勇樹と奈々枝は三人がタクシーで帰るのを見届けると、まだ時間も早かったので、二人で歩いて帰った。

二人は、今日のライブのことや学校のこと、そして来週の試験のことを話しながら歩いていた。公園の近くまで来たとき、奈々枝が勇樹に聞いた。

「ねえ、そういえば、ボイスで後片付けしてる時、正人君と手紙みたいなの見ながら話してたけど、何話してたの？」

「ああ、それは、これですよ」勇樹はポケットから紙切れを出した。「えーと、五リットル・・・暗くて見えないわ」奈々枝は立ち止まって、街灯の方に紙切れを向けた。勇樹も奈々枝に寄り添うように紙切れをのぞいた。

「これは、なにかの問題ね」奈々枝が勇樹の方を見て、また、紙切れに目を落とした。

勇樹も紙切れに顔を近づけて奈々枝と一緒に考えていた。ふと、奈々枝の髪の毛の香りがした。勇樹は紙切れから奈々枝の方へ視線を移した。そして、じつと考えている奈々枝を見ていた。奈々さんってきれいだな。勇樹は改めてそう思った。

「これ結構むずかしいね。勇樹は分かったの？」奈々枝が勇樹を見た。二人は目が合った。

「どうしたの？勇樹」

「奈々さん、きれいですね」勇樹は奈々枝の目を見つめて言った。
「ありがとう」奈々枝はちよつとだけ照れ笑いを浮かべた。

勇樹は奈々枝の右目と左目を交互に見つめた。「奈々さん。大好きです」。奈々枝も勇樹の瞳に心えるように、勇樹を見つめた「勇樹・
・・」

奈々枝の言葉を最後まで聞かないうちに、勇樹は、肩を抱き寄せ
て奈々枝にキスをした。勇樹は、それがどんな感じで、どんなに温
かいかも分からなかった。ただただ、奈々枝とキスをしていること、
奈々枝が自分と同じ思いであること、それだけを感じていた。

一台の車が通りかかったので、二人は唇を離し下を向いた。

「見られちゃったかな」

「別に見られても、悪いことしてる訳じゃないから、いいんじゃない
い」

「そうですね、ってそうですね。なんか恥ずかしかったけど」

「ねえ、勇樹、手つなごう」奈々枝は手を差し出した。二人は手をつ
ないで公園を歩いた。

「奈々さん、さっき、なんて言おうとしたんですか？」勇樹が聞いた。
た。

「秘密」奈々枝はいたずらっぽく笑った。「でも、言わなくても勇
樹には分かるでしょ」

「俺には、分かりませんよ」

「もう、鈍感なんだから。絶対教えて上げない！」奈々枝は嬉しそ
うに、つないだ手を前に大きく振り上げた。勇樹も「どうせ鈍感で
すよ。じゃ、これは宿題にしましょう。絶対当てる見せますよ」と
言いながら、その手をぎゅっと握り締めた。

「勇樹、この前の宿題分かったか」正人が昼休みに勇樹に聞いた。

「あつ、あれね、うん、分かったよ。私も大好き、それが答えさ」

「なんだそれ？」

「正人、お前は鈍感だな」勇樹は正人の肩をポンと叩いた。

九話

金曜日の夜、勇樹は会社の同期と二人で、夜の街に繰り出していた。

「がははは、勇樹お前、そんなんだから女の一人も、ものに出ないんだぞ。それに俺と同じでまだヒラだし」

同期の坂田が勇樹のカラオケを聞いて爆笑した。

「どれ、ちよつと貸してみろ」

マイクを取ると、坂田は隣にいた店のあやちゃんに曲をリモコンで入れてもらった。お前こそ、リモコンの操作もできないくせに、よく言うよ。と言おうとしたが、坂田はすくつと立ち上がって、もう歌う準備に入っていたので、勇樹は余計なことは言わなかった。

まあ、坂田は確かに歌は下手ではないし、気持ちが入っているような歌い方ではある。自慢するのも分かる気がする。しかし、同期はもう係長なのに、俺とこいつはまだヒラで、金曜日の度に騒ぐことしかやることもない。

「どうだ、これが歌つてもんだ。心を込めて歌えば、ちよつと音程が外れても、人の心に染み入るもんさ」

「ちよつと音程が外れるのはいいけどな、お前のは外れすぎだ。そんなんだから、お前も金曜日の夜に俺と騒ぐことしかできないんだ」

「まあ、お前の宴会芸のカラオケよりはましだと思うがね。しかしさ、俺は入社して、ずっと男ばかりの部署にいるから、全然いい思っていないんだよ。そうだ、勇樹、今度合コンしようぜ。お前、誰か連れて来いよ」

「連れて来るような女がいれば、連れて来てやるよ」

「随分冷めた返事だねえ。お前も俺と同じで女には縁がないようだな」

「まあな。大学は工学部だったし、女に縁がある訳がない」

「確かお前、高校、男子校じゃなかったか？」

「そうさ。そうだ男なら知り合いがたくさんいるぞ」

坂田はタバコの煙を吹き出して、がつくりと頭を下げた。

「なんて悲しい高校時代を過ごしてきたんだ。ということは、お前、高校時代は彼女いなかったのか」

その時、勇樹の携帯が三回鳴って止んだ。

「おい、勇樹、今のメールじゃないのか」

「ああ、メールだ」

「ああメールだ？お前見ないのかよ」坂田は怪訝な顔をした。

「俺の所にくるメールは、いたずらメールばかりさ」

勇樹は携帯を取り出して坂田に渡した。坂田はそれを手に取るとがちゃがちゃといじっていたが、メールを開くことは出来なかった。みかねたあやちゃんが「ちよつと坂田さん、メールの見方も分からないの？」と言って携帯を取り上げた。

「バカ言え。機種が違うから分からないだけだ」

まあ、こいつもメールなんてめつたに出来ないのだろう。機種が違ってても、多少知識があればメールくらい開けるはずだ。お前も俺も、結局、女には縁がないってことさ。勇樹がニヤニヤして坂田を見ると、坂田もその視線を感じたらしく、ニヤツと照れ笑いを浮かべた。

「勇樹さん、見ていい？」

あやちゃんが、坂田のグラスを拭きながら勇樹に聞いた。

「別にいいよ。でも、若い女性には刺激のかも知れないけど」

「大丈夫。私これでも知識だけは豊富だもーん」

あやちゃんは、携帯のボタンを慣れた手つきで押し始めた。

「ちよつと、勇樹さん。二ヶ月前のメールもあるわよ。本当に、全然見てないんじゃない」

坂田が、携帯を覗き込んだ。

「しかし、二ヶ月もメールを見てないのに、全部で七件つても寂しいな。なになに、秘密クラブの会員案内？がははは、これは典型的ないたずらメールだ」

「あなたとの出会いは？もう、こんなのはっかり。やだこれー、私
こんなの読めなーい」

さすがのあやちゃんも目をそらした。坂田は携帯を見て大笑いし
た。

「これは、あやちゃんは読めないだろう。なになに、人妻との出会
いを、つてのもあるな、これが今来たやつか、えーっと、幸恵ちゃ
んがあなたを待ってまーす。幸恵ちゃんか、そうか、勇樹、お前幸
恵ちゃんと付き合っていたのか。お前もすみに置けないな」

坂田は、ゲラゲラと笑いながら、勇樹に携帯を返した。

「この幸恵ちゃんて言う子でいいから、俺に愛を持ってきて欲しい
もんだ」

勇樹は携帯をポケットにしまい、グラスに残っていた水割りを飲
み干した。

「坂田、そろそろ帰ろう」

「もう、こんな時間か。じゃあ帰るか」

「また、来てねー」あやちゃんの愛想笑いに見送られて二人は店を
出た。

勇樹がアパートに着いたのは、午前一時を回ろうとしているところ
だった。何故か、勇樹はさつき坂田の言った「心を込めて歌えば、
ちよつと音程が外れても、人の心に染み入るもんさ」という言葉が
耳に残っていた。

あいつもたまにはいいことを言うよ。それは音楽だけに当てはま
るものではない。歌が気持ちを伝える手段であれば、当然、言葉や
表情や行動もその手段と成り得る。

勇樹は高校時代の自分を思い出した。あの頃、俺の気持ちは五十
%でなく100%伝わっていたのだろうか。あの頃は、言葉を選ぶにも
使える言葉は少なく、人の気持ちを察するにも、経験したことな
いことばかりで、今思えば、とんちんかなことを言っていたよう
な気がする。歌で言えば、音程が外れている状態だったろう。でも、

自分の気持ちを一生懸命伝えようとしていたのは間違いない。

それを未熟と言うのだろうか。確かに、人間的には未熟だったかも知れないが、あの時の方が純粹に人と接していた気がする。気持ちと気持ちをぶつけ合っていた気がする。

それに、それは決して恥ずかしいことではない。誰もが通る道であり、それによって人は成長していくのだから。勇樹は階段を上りながら一人でそんなことを考えていた。

高校時代を思い出した勇樹は、アパートの部屋に入ると、高校時代のアルバムをぺらぺらとめくった。そこには、バカな格好をした同級生や、ギターを持って歌っている自分の姿があった。

いまじゃ、考えられないことをしていたな。勇樹は懐かしい目で写真を見ていた。

こいつは、今、何してるんだろうな。そう言えば、こいつ坊さんになっただって聞いたけど、こいつの説教は聴きたくないな。ああ、大野は学校の先生してるんだっけ。

勇樹の手が止まった。そこには、湖を背に照れくさそうに並んで立っているカップルの写真があった。立っている二人の微妙な距離が、まだ若さを物語っているようで、勇樹は、何度見ても恥ずかしい気がしながらも、懐かしさを感じずにはいられなかった。

彼女は、頑張ってるって言うのに、まったく俺ときたら。勇樹は入社五年目の時に、大きなミスを起こし、責任を取らされて今の部署に配属になった。それまでは、周りも認める優秀な営業マンだったが、そのことがきっかけとなって、一気にやる気を失ってしまった。今では、坂田と二人で、同期の中で漫才コンビと言われていた。

もう一度その写真を眺めると、勇樹は、天井を向いて目を閉じ、「はあー」とため息をついた。

「どれ、今日のニュースでも見て寝るか」勇樹はネクタイを緩めネット上でニュースを見始めた。

今日も大したニュースはない。あれこれとマウスを動かし、エン

タメのページをクリックした。

「どうしんだんだ？また同じ病気になったのか？」勇樹はそのニュースを見て心配になった。そこには「女優、坂下京子が病気のためドラマ降板」と書いてあった。

坂下京子、本名、内山奈々枝。高校時代に勇樹が付き合っていた女性だ。

奈々さんは高校卒業後、東京の大学に行った。そこでスカウトされタレントになり、その後、女優をこころざした。最近は演技力にも磨きがかかり、主役まではいかないものの、重要な役所を任されるようになったと聞いている。

「聞いている」と言うのは、勇樹は、女優・坂下京子を見ることが出来なかったからだ。テレビに映るとチャンネルを変えていた。気恥ずかしいという気持ちと、なんだか心配で演技を見ていられないという気持ち、そして、今の自分と比べてしまい、自分のだらしなさに嫌気がさしてくるので、勇樹はテレビで坂下京子を見ることはなかった。

勇樹は、奈々枝が東京に行ってから、一度も会ったことがなかった。「私、女優を目指します」、「頑張れ、応援してます」そのメールが、奈々枝との最後のやりとりだった。

それから、もう十年以上の年月がたっている。当然、奈々さんは自分のことなんか忘れているだろうし、俺だって、こうやってたまにネットで坂下京子を見るくらいで、それは、高校時代の懐かしい思い出に変わっている。と勇樹は思っていたし、それは嘘ではなかった。

十話

桜が、一年に一度の花を咲かせ、勇樹は二年生に、奈々枝は三年生になっていった。

「勇樹君、ちよつと待つて」奈々枝の母親が病院のロービーで勇樹を呼び止めた。勇樹は振り向いた。

奈々枝は頭痛が止まらないと言って病院に行き、そのまま入院していたのだ。勇樹は、学校の帰りに奈々枝を見舞いに来て帰るところだった。

「勇樹君、また、奈々枝をお見舞いに来てね」

「ええ、もちろんですよ。でも、思ったより元気そう良かったです。いつ頃、退院できるんですか」

「そうねえ、それは、先生が決めることだから」母親は勇樹から顔をそらした。

いつも明るい母親がこんな表情をするなんて。本当は奈々さん重い病気じゃないんだろうか。自分を不安にさせないために、嘘を言っているんじゃないのか。勇樹は母親の表情が気になった。

「ところで、なんて言う、病気なんですか？」

「それは、まだ、検査中だから・・・」母親は口ごもった。

「分かりました。また、お見舞いに来ますよ」

「お願いね。良かったら、これ食べて」母親はタイヤキを勇樹に手渡した。

勇樹は病院を出て後ろを振り返った。母親が涙を流しながら病室に向かうところが見えた。おそらく、母親はなんの病気だか知っている。もしかして重い病気なのかも知れない。勇樹は言いようのない不安が襲ってくるのを感じた。

そんな不安を払拭するように、勇樹は、時間があれば奈々枝を見舞った。時には練習帰りに、正人とさゆり、文江も一緒に四人で見舞いに行った。ある時は、ライブで録音したCDを持って行ったこ

ともあった。奈々枝は喜んでヘッドホンでそれを聞いていた。

「私も早く退院して、ライブを見て見たいな。ねえ、勇樹、きつとまた行けるよね」

奈々枝はさすがのような目で勇樹を見つめた。勇樹はそんな奈々枝を見るのが辛かった。勇樹は奈々枝から、脳の腫瘍があるけど良性ですぐ直ると聞かされていたが、奈々枝も、もう二ヶ月も検査や何やらで入院していたので、心配だったのだろう。その奈々枝の気持ち痛みほど勇樹には伝わったし、ロビーで見送った時の母親の姿が頭から離れず、勇樹にも本当にすぐ直る病気なのか心配だった。

「もちろん。早く、上手くなった俺の歌を奈々さんに聞かせたいよ」
勇樹はそう言った。

勇樹は帰り道、ホームセンターに寄って木片を買って来た。そして、家に帰り、ゴソゴソと中学時代に使った彫刻刀を探した。彫刻刀を見つけ机に向かうと、鉛筆で下書きをし、木片を削り始めた。勇樹は奈々枝にオリジナルのお守りを作ろうと思ったのだ。

いつしか、机の上と机の周りは木屑で一杯になった。しかし、そんなことはおかまいなしに、勇樹は一心に木片を削った。「いてっ！」彫刻刀で手を傷つけても、カッターパンを張りひたすら彫刻等を握った。やすりで削り、サンドペーパーもかけた。

「出来た！」それは、もう夜も明けようかという時間だった。勇樹はそれを、勇樹大明神と名付けた。それは、勇樹がギターを持って歌っている姿をしている。という風に奈々さんが思ってくれたらいいかな。という形をしていた。

うーん。達成感はあるけど・・・まあいいや。俺の芸術的なセンスはこんなもんだろう。それより気持ちだ気持ち。勇樹はそれをバツクに入れると、そのまま机に座ったまま眠ってしまった。

次の日、勇樹が病室に行くと、奈々枝のクラスの友達を作った、立派な千羽鶴が飾られていた。

「さつき、持ってきてくれたんだ」奈々枝が千羽鶴を見て言った。

「あちゃー、この千羽鶴に比べたら、俺のは……。勇樹はソーッとバツクの中の勇樹大明神を見て、千羽鶴と比べた。これじゃ笑われるよな。いや、せつかく一生懸命作ったんだ。笑われてもいい、逆に笑って元気になって欲しい。」

「実は、俺もお守りを作ってきたんです。見て驚かないで下さいよ。せーの、じゃーん。名付けて、勇樹大明神」勇樹はバツクの中から勇樹大明神を取り出した。

奈々枝はそれを手に取り、逆さまにしたり、下と思われる部分を覗いたりした。勇樹は指で勇樹大明神をさして説明した。

「あー、この部分はですね、一応ギターのつもりです。それからこれは、足。そして、これは頭です。ここはかなり分かりづらいつと思いますか……」

「勇樹、その手どうしたの？」奈々枝は勇樹の左手の指全部に張つてあるカットバンを見て驚いた。

「これは、作ってる時、切っちゃったんですよ」勇樹は手を握ったり開いたりした。

「勇樹、ありがとう」奈々枝はやさしい微笑を口元に浮かべた。そして、勇樹大明神をじっと見つめた。

「もしかして、これ、勇樹が歌っているところなの？」勇樹は情けない顔で頷いた。

奈々枝は、両手を口に当てて笑った。勇樹は、奈々枝がこんなに笑ったのを見たのは、病院に入院して始めてだった。

ひとしきり笑うと、奈々枝は勇樹を見て言った。

「今度、手術することになったんだ」奈々枝は不安そうな目をしていた。

「奈々さん、不安ですか？」勇樹は聞いた。奈々枝は黙って頷いた。

「本当は、こんな時、勇気付けられればいいんですけど。正直言って俺も不安です。また、奈々さんと一緒にライブやりたいし、映画も見たい。いろいろ話してみたいし、手をつないで歩きたい。」

だから、奈々さんには病気に勝ってもらいたい。すみません、自分のことしか考えられなくて」

「勇樹、私、頑張るからね。また、勇樹と歩けるように頑張るから」
奈々枝は、勇樹大明神を握り締め、ぎゅっと口を結んだ。

手術前日、勇樹は、学校が終わると真っ直ぐ病院へ向かった。病室に入ろうとすると、奈々枝の母親が出て来た。そして、「勇樹君、ごめんね。もう少し後で来てもらえないかな」と申し訳なさそうな顔で言った

「何かあつたんですか」勇樹は心配になって聞いた。

「いえ、そういう訳じゃないんだけど」

「お母さん、いいの。入ってもらって」奥から奈々枝の声がした。

「本当に、いいの？」母親が聞いた。「うん、大丈夫だから」

母親は、勇樹を病室に入ると、エレベーターを降りて行った。

勇樹は、四人部屋の仕切りのカーテンを開けた。そこには、頭を坊主にされた奈々枝が座っていた。

「どうしたんですか？」勇樹は驚いた。

「頭の手術だから、髪の毛を短くしなくちゃいけないんだって」

「そうなんですか」勇樹は、奈々枝は本当は、自分にこの姿を見せたくはなかっただろうと思った。

「おかしいでしょ・・・でも、今日はどうしても勇樹の顔が見たかったんだ。だから」奈々枝は顔を隠して泣いた。

「奈々さん、俺、そんなことで、奈々さんをどうこう思いませんよ。病気はきつと治りますよ。俺、待ってますから。奈々さんが元気になるまで、ずっと待ってますから。だって俺、奈々さんのこと大好きだから」勇樹は奈々枝のベットに腰をかけて肩に手をかけた。奈々枝は「勇樹」と言って勇樹に抱きついてきた。勇樹は奈々枝の肩に手を回して奈々枝を抱きしめた。

しばらくすると、母親がグレーの帽子を持って来て奈々枝に被せた。

「奈々枝、大丈夫？」目を赤くした奈々枝を見て母親が声を掛けた。
「うん。大丈夫」奈々枝は首を縦に振った。母親はそれを見ると、
また病室を出て行った。

病院のロビーでは、奈々枝の母親が勇樹を待っていた。勇樹の姿
を見ると立ち上がった。

「勇樹君、話があるんだけど。ちよつといい？」

病院の談話室に行き、椅子に並んで座ると母親が話し始めた。

「あの子の病気は、脳腫瘍と言う病気よ。脳の中に腫瘍ができる病
気なの。明日の手術で、その腫瘍を取るようになってるの」

「でも、そんなに難しい手術じゃないんでしょう」

「でも、脳の手術だからね。先生にも、麻痺が残るかも知れないし、
歩けなくなることもあり得るって言われて」母親は、ハンカチで目
頭を抑えた。勇樹は黙ってそれを見ていた。

「私には、もう奈々枝しか家族がいないの。だから、とつても心配
で。ごめんね、勇樹君にこんなこと言つても仕方ないのにな」

「いいんですよ。僕も心配ですから」

「もし、奈々枝が歩けなくなつても、勇樹君たまに顔を出してね。」

奈々枝は勇樹君のことが、本当に好きみたいだから

「約束します」勇樹は言った。それから母親はずつと下を向いてハ
ンカチを顔に当てていた。

さゆりと文江は、水曜日の練習に行くために学校から真っ直ぐさ
ゆりの家に向かっていた。

「さゆり、ここの公園通つて行こうよ。近道だから」文江がさゆり
に言った。今日はホームルームが長引き、ちよとばかり遅くなつて
しまったので、二人は早足で歩いていた。

「勇樹と正人、もう、着いてるかもね」さゆりは赤信号を無視して、
交差点を渡った。文江もその後が続いた。

公園を歩いていると、一人の高校生がベンチに座って池を見てい
るのが目に入った。

「あれ？あれ勇樹じゃない」さゆりが指さした。
「勇樹君、練習行くよー」文江が大声で叫んだ。
「おかしいわね。あれは勇樹君だと思うんだけど」
「あれは、勇樹だよ。ほら、あのギターケース。勇樹のだもん。どうしたんだろう」さゆりと文江は顔を合わせると、勇樹の方へ向かった。

「勇樹、どうしたの」さゆりが後ろから声を掛けた。

「別に、なんでもありませんよ」

「なんでもないことないでしょう。ほら、勇樹君行こうよ」文江が勇樹の前に立って、勇樹の顔を覗き込んだ。「勇樹君・・・」文江は勇樹の顔を見て黙ってしまった。

さゆりも勇樹の前に立った。勇樹は下を向いて唇を噛み締めていた。その目からは涙があふれていた。

「今日、奈々枝、手術なんだって」さゆりが言った。勇樹は黙って頷いた。

「それで心配で泣いているのね」文江の言葉に勇樹は首を振った。

「勇樹らしくもない。そんなんじゃ奈々枝の病気も直らないよ」さゆりが勇樹の肩に手を掛けた。

「悔しいんですよ」勇樹は手で顔を覆った。そして、また吐き出すように言った。

「悔しいんですよ。奈々さん、今、一生懸命病気と闘ってるのに、俺、何も出来ないじゃないですか。いくら、好きでもどうにも出来ない。手も握れない。頑張れって言うことも出来ない。だから、とって悔しいんですよ」勇樹はこぶしを握り締め、下を向いて涙をこらえた。さゆりと文江も泣いていた。三人はしばらくそこで、なにも話さずにいた。

「プルルル、プルルル」さゆりの携帯が鳴った。

「あっ、正人、うん、ごめん。今日ちよっと、学校で遅くなっちゃって。今から行くから」

「勇樹もいないんですけど、何か連絡ありました？」

「えっ、勇樹？・・・勇樹はね、さっき、今日は来れないって連絡があったよ」

「やっぱり。あいつ学校で元気なかったから、風邪でも引いたのかな」

「たぶんそうだと思う。それじゃ、あと十分位で着くから、」さゆりは携帯を切った。

「勇樹、あたし達は行くからね」さゆりと文江は公園を出るまで何度も勇樹を振り返った。

勇樹が倉庫についたのは、もう練習が終わる頃だった。勇樹はギターを取り出すと一人で弾き始めた。正人とさゆり、文江はそんな勇樹を見ているだけだった。勇樹は初めて五人で演奏をした曲を歌っていた。

勇樹は布団に入りながら、奈々枝との楽しい時を思い出していた。手にはクリスマスに奈々枝から貰った写真立てを持っていた。その中には、去年の夏休みの終わりに、みんなで近くの湖に行った時に撮ってもらった、二人の写真が入っていた。

「奈々さん、早く会いたい」勇樹はその写真を見て何度も呟いた。そして勇樹はその日、眠れぬ夜を過ごした。

次の日の朝、勇樹の携帯が鳴った。その番号は勇樹には見覚えのない番号だった。

「勇樹君？」

「そうですね」疲れた声で勇樹が応えた。

「朝早くごめんね。それでね、奈々枝の手術成功したから」それは奈々枝の母親の声だった。

「本当ですか！良かった」

「今日、良かったら来て頂戴」

「えっ、でもしばらくは家族以外の人には面会できないって言われましてけど」

「いいの、勇樹君は。もし、なにか言われたら、弟とでも言ってお

いて、そうすれば入れるから。なんなら、婚約者でもいいわよ」奈々枝の母親はしばらくぶりに明るい声だった。

勇樹はガバツと布団から出ると、カーテンを開けた。おお、いい天気じゃないか。気持ちいいな！。よし、やるぞー。勇樹は声を出した。何をやるかは分からないが、勇樹は体に力がみなぎるのを感じた。

「おかわり」勇樹は茶碗を差し出した。

「どうしたの勇樹、今日は随分食欲があるじゃないの」勇樹の母親は茶碗にご飯をよそった。

「行ってきます」勇樹は元気よく家を飛び出した。学校の校門の前に来ると、正人の顔が見えた。

「ウィーッス！」勇樹は手を上げた。

「なんだ、随分元気じゃないか。もしかして、そうか奈々枝さんの手術成功したんだな。良かったじゃないか」正人は思いつきり勇樹の背中を叩いた。

「なんだ、手術の話聞いてたのか」

「昨日練習が終わった後、文江さんに聞いたんだ」

「そうだったのか。でも、本当に良かった。最近の俺、奈々さんの病気のことで頭が一杯でさ。なんか、久しぶりに正人の顔もちゃんと見れてる気がするよ」

「俺も、そう思う。最近のお前は、野球を諦めた時のような顔だったもんな」

教室に入ると、正人の携帯が鳴った。

「おっとメールだ」正人はにやけた顔をして携帯を見た。その携帯にはハデハデなストラップが、がちゃがちゃと付いていた。

「お前、その趣味の悪いストラップどうしたんだ」勇樹は呆れた顔をした。

「失礼な！これは文江さんに貰ったものなんだぞ」

「あっそう。そうだったのか。フーン、文江さんね」バックの中から弁当やら筆箱を机の上に出していた勇樹は、はっとして正人の

方を向いた。

「なんで、お前が文江さんからストラップをもらっただ」

「勇樹、お前は鈍感だな」正人はにやにやして言った。

静かに奈々枝が目を開けた。

「目を覚ましたんだね、良かった」勇樹が声を出した。

「全然良くないぞ、向井。お前はさつきからずっと寝ていたようだが、ちゃんと勉強する気があるのか」

数学のはげちゃびんが怒鳴った。勇樹は、よだれを数学の教科書に垂らして寝てしまい、病院で奈々枝が目を覚ました夢を見ていた。「はい、すみません」

「罰として、この問題を、今日の放課後までに解いて来い」はげちゃびんは勇樹にプリントを渡した。

「まったく、俺のこの気持ち分からないなんて、あのはげちゃびんめ。今日くらい、寝ててもいいじゃないかよ」勇樹は、昼休みに一人で数学の問題を解いていた。

「だめだ、こりゃ分からん。分からんというより読解不能だ。困った、今日は早く病院に行きたいのに。勇樹がプリントと格闘していると、正人がやってきた。

「おい、勇樹、だいぶ困ってるようだな」

「まずいよ。全然分からないよ」勇樹は口にくわえた鉛筆を上下させた。

「いい方法を教えてやるよ、これを使い」正人は勇樹の机の上にとさつと一冊の本を置いた。それは、Hな写真がたくさん載っている雑誌だった。

「こんなの見たら、余計、問題が解けなくなっちゃうだろう」勇樹は目を大きくして、その雑誌をペラペラとめくった。

「バカ、違うよ。あいつだよ、あいつ」正人はクラス一のがり勉、宮下を指さした。

「でも、あいつは、こういう時、自分でまいた種は自分で刈り取る

のが本来あるべき姿だと思えます。とか言って、絶対助けてくれな
いよ」

「だから、その本を使うのさ。あいつ、実はこういう本、大好きだ
から、その本と交換条件にすれば、きつと問題解いてくれるはずさ」
「そうか、その手があつたか・・・でも、もうちょっとこれ見てか
らでいいかな」勇樹はまたペラペラと雑誌をめくった。

「勇樹、今日、奈々枝さんに会いに行くんだろう。早くした方がい
いんじゃないのか」

「おお、そうだ。こんなことをしている場合じゃない」勇樹はプリ
ントと雑誌をつかむと、分厚い辞書を左手に持ちノートに小さい字
でびっしりと辞書の内容を写している、宮下の元へ向かった。

「宮下君。お願いがあるんだけど」勇樹は精一杯のやさしい声で言
った。

「僕は、今、忙しいんです。それに、向井君の言うことは大体分か
っています。そういうことは、自分で・・・」

「ひとつ、交換条件でどうでしょうか」勇樹はプリントの後ろから、
ちらちらと雑誌を出したり引っ込めたりした。宮下は右手で黒ぶち
メガネの真ん中を押さえ、顔を雑誌の方へ近づけた。

宮下はキョロキョロと辺りを見回すと、プリントと雑誌をさつと取
り、あざやかな手つきで雑誌だけバックに滑り込ませ、問題を解き
始めた。そして、あつという間に、全問解き終えた。

宮下はプリントを勇樹に渡し、「困ったら、また、言って下さい」
と言ってまた辞書を左手に持ち、ノートに小さい字で辞書を写し始
めた。

それを見ていた正人は、親指を立てた右手を勇樹へ向かって差し
出した。勇樹も同じように正人に返した。

「正人、ありがとう。助かったよ。でもあの本どこで手に入れたん
だ」

「三組の半田さ。あいつの家は本屋をやっていて、よく店の本を持
ってくるんだ。さっき聞いたら、新聞部の部室の天井裏にたくさん

あるから、持っていていいぞって言われたんで、一冊失敬して来たって訳さ」

「正人、お前は本当に頼りになる奴だ。ところで、ものはついでだが。半田君とは、是非、お友達になりたいと思うんだけど。紹介してくれないかな」

「お前、そんなの見て奈々枝さんに悪いと思わないのか」

「正人、どうしたんだ。お前がそんなことを言うなんて」

「実はな、俺、昨日文江さんとキスしたんだ。その時俺は思った。清廉潔白に生きよう」と

勇樹は正人の変わりように驚いて、思考を停止してしまった。こいつの口から清廉潔白なんて言葉が出るなんて。

放課後、勇樹は、宮下に解いてもらった問題を、自分の字で書き直すとはげちゃびんの所へ行った。

「やれば、出来るじゃないか。だいたい、お前は、いつも・・・」はげちゃびんは、くどくどと説教を垂れた。はやく説教終わらないかな。勇樹はいらいらしてそれを聞いていた。

「・・・まあ、そう言うことだ。分かったら帰ってよろしい」

「はい！」勇樹は、職員室を飛び出すと病院へ向かった。

梅雨がまもなく明ける頃の、ムシムシとした生温かい空気が勇樹に張り付き、勇樹の体からは汗が噴出した。病院に着いた頃は、勇樹の体は汗びっしょりになっていた。勇樹は受付で部屋を聞いた。

「今は、手中治療室にいますので、御家族以外の・・・」

「弟です！」勇樹は叫んだ。病室を聞くと勇樹は駆け足で、奈々枝の所を目指した。部屋の前に奈々枝の母親がいた。

「勇樹君、こっちよ」勇樹を見つけると母親が声を掛けた。

「ちよつと待っててね」母親は病室の中に入り、しばらくすると出てきた。「どうぞ、入って」勇樹はちよつと緊張しながら病室へ入った。

奈々枝は、集中治療室の中央に置かれたベットに横たわっていた。

口にはマスクがつけられ、点滴の管も見えた。頭にはタオルが掛けられてあった。そして、タオルの端から赤と黒の電線のようなものが見え隠れしていた。

奈々枝は、ゆっくりと目を開けた。一瞬勇樹と目が合った。しかし、その視線は勇樹の視線には気付かずに、ゆらゆらと宙を漂った。それを見て、勇樹は少しがっかりした。

「まだ、意識がはつきりと戻ってはいないの。でも、もう大丈夫だつて、そのうち意識もはつきりしてくるって、先生が言ってたわ」「きつと、そうですね」勇樹は奈々枝の顔を黙って見ていた。ふと勇樹は奈々枝が手になにか握っているのを見つけた。

「これ？これね、誰かお友達がくれたものなのかしら。手術室にも持って行ったのよ。ずっとそれを握ってたみたい。なんでもお守りだつて言ってたけど」

「そうですね」勇樹は奈々枝の手に握られている勇樹大明神を見た。「勇樹」小さな声が聞こえた。勇樹は声のする方に顔を向けた。奈々枝は口を動かして何か言っていた。「ありがとう」勇樹には、奈々枝がそう言っているように聞こえた。

良かった。本当に良かった。勇樹は涙をこらえることが出来なかった。奈々枝も小さいながらも何度も何度も首を立てに動かした。

十一話

奈々枝が病院を退院したのは夏休みも終わりに近づいた頃だった。それから、二週間程は自宅で療養して、奈々枝はまた、学校に行き始めた。二週間くらいは母親の車に乗せられていたが、それ以降は自分で歩いて学校まで行けるようになった。もっとも、音が大きいと、なんだか頭が痛くなるからと言って、練習とライブには顔は出さなかった。

秋の風が、さわやかに、そして、ゆつくりと遠くの空気を運んでくるのを感じながら、勇樹と奈々枝は公園の池のほとりを歩いていった。

奈々枝は頭に紺色の帽子を被って歩いていた。まだ、髪の毛は伸びておらず、スポーツ刈り位の長さだと勇樹は聞いていた。

二人は立ち止まると、池の方を向きながら町並みを眺めた。

「勇樹、話があるんだ」勇樹が奈々枝を見ると、奈々枝は遠くを見ていた。

「私ね、今年、卒業できないの」

「どうしてですか」

「ずっと入院してたでしょう。だから、出席日数が足りないの。でもさ、そっちの方がいいかなと思って。だって、一学期は全然勉強してないし。これから頑張っても、みんなに追いつけないと思う。」

「だったら、来年頑張って行きたい大学に入った方がいいと思うんだ」

「確かに、それは言えますね」

「それに、そうなれば来年も勇樹と一緒にいれるでしょう」奈々枝は勇樹を見て、うれしそうに笑った。しかし、勇樹は、それが本当の笑顔だとは思えなかった。

「奈々さん、学校で一人になってつらいと思うけど、奈々さんは病気に勝ったじゃないですか。きっと、乗り越えられますよ。来年、一緒に頑張りますよ。俺、奈々さんを守りますよ」来年になれ

ば奈々さんは俺しか頼りになる人間がいらない。そして、奈々さんを守ることが、俺の役目なんだ。勇樹は、そう思った。

奈々枝は、涙をこらえながら頷いた。「勇樹！」奈々枝は勇樹に抱きついた。勇樹も奈々枝をぎゅっと抱きしめた。奈々枝はしばらくそのまま泣いていた。

二人は、久しぶりに手をつないで帰った。いつもは勇樹が照れることもあって、暗くなってから手をつないでいたのだが、今日は、まだ明るいうちから手をつないだ。

「早く、髪伸びないかなー」奈々枝は帽子を触った。

「髪はいずれ伸びますよ」

「私は前みたいに肩くらいまで伸ばしたいな」

「短いのも似合うと思うけど」

「これは、短すぎ。もう少し伸びれば、帽子も被らなくていいのに」

「でも良かった。また、奈々さんとこうして一緒に歩いて。もう無理かと思いましたがもん。やっぱり勇樹大明神のおかげかな」

奈々枝はそれを聞いて笑った。

「言っておきますけど、あれは、奈々さんを笑わせようと作ったものですから、勘違いしないで下さいよ」勇樹は強がった。

もっとも奈々枝はそんな風に思っただけにはいなかった。笑わせようとしたのなら、あんなに傷だらけになって作るわけではない。「ありがとう、勇樹」奈々枝はそう呟いた。

学校帰りに、勇樹は一人で町を歩いていた。ギターの弦が一本切れたので、音符にそれを買いに来たのだ。今日は体育祭のバスケットボールの練習があつて、もう時間は五時を過ぎていた。歩いていると、前から来た女子高生に声を掛けられた。

「音楽村の向井さんですよ」

「そうだけど」この子、よくライブに来ている子じゃないか。でもその前にどこかで見たような……。

「あの一お願い事があるんですけど」女子高生はバツクからノート

を取り出した。

「ここに、サインをお願いします」

「サイン？俺の？」

「はい」女子高生は恥ずかしそうに言った。俺も捨てたもんじゃないな。勇樹はまゆを上下させると鼻を触った。

「いいけど、俺、サインなんて書いたこと無いから、上手に書けるかな」

「書いてもらえれば、それでいいです」

勇樹はペンを受け取ると、大きな字で向井勇樹と書いた。

「これでいいかな」

「ありがとうございます」女子高生はぺこりと頭を下げた。笑顔が素敵な女の子じゃないか。でもこの子……「あれ、もしかして。君は矢沢じゃないか」

「思い出してくれました。テニス部にいた矢沢です」女子高生はうれしそうな声を上げた。その女子高生は勇樹の一つ下だった。

しかし、俺はテニス部に縁があるな、勇樹はさゆりの顔が浮かんだ。「なんか文句ある？」浮かべた顔はそう言っているようだった。

「まだ、テニスやってるの」

「いえ、今は、してません」

「そうか、どうして辞めちゃったの」

「怪我しちゃいまして、それで、ラケットが思い通りに振れなくなっただけです。それで、辞めちゃいました。向井さんも高校で野球やらなかったんですね」

「俺も同じ理由さ。あれ、それは、そうか、どうやら弓道部に入っているみたいだね」

「そうです」

「そうか。なにかに一生懸命になれるっていうのはいい事だと思うよ。頑張れよ」

「はい」女子高生は元気よく返事をするとその場を立ち去った。

「俺だ」正人が携帯に出た。

「俺さ、今日、サイン書いたんだぜ」

「誰だ、その物好きな女は。あー分かった。矢沢だろう」

「何で知ってんの」

「その子、ライブに来てお前のことばかり見てたし。それに中学三年のとき、俺が、ほら、チヨコレートって言って渡したやつ、それは、お前に渡して欲しいって、矢沢に言われたものだし。それらを総合すれば、矢沢しかいないだろう」

「お前、最近頭冴えてるな」

「いや、俺も女心が分かってきたってことさ。ところで勇樹、明日の練習行けるのか」

「ああ、行くよ。体育祭の練習は明日はないって言ってたから」

土曜日の練習の前に、勇樹は前のように、ギターと練習道具を持って奈々枝の家に向かった。奈々枝は帽子を被って待っていた。ふと机を見ると見慣れない置物が置いてあった。

あれこれは？その置物は以前見たことのある形をしていた。これは、勇樹大明神じゃないか。それはきれいに色が塗られていた。

「それね、家で休んでいるとき色を塗ったの。どう、結構よくなっただでしょう？」

「全然違いますね」勇樹は手にとってそれを眺めた。本当に勇樹が歌っているように、上手に着色してあった。

「名前を付けたんだ。なんて言うと思う」

「そうですね。勇樹大明神様、違うか。えーと、勇樹スペシャル。これも違う。すみません分かりません」勇樹は諦めた。

「これはね、ユウキって名前にしたの、ほら、ここ見て」奈々枝は勇樹からユウキを取ると、後ろを見せた。そこにはカタカナでユウキと書いてあった。

「カタカナで勇樹か。どうしてカタカナでユウキなんですか？」

「それは、勇気っていう意味。名前は昨日付けたんだ」

「昨日？」

「そう昨日。私も一人で、困難なことに立ち向かえるユウキが出ますよ。だからユウキにしたの。じゃあ、座って。勉強しよ」
奈々枝はユウキをテーブルの上に置いた。

勇樹と奈々枝はテーブルに向かい合って座り、勉強を始めた。前は勇樹が奈々枝に教えられてばかりだったが、今日は、奈々枝も勇樹にいろいろ聞いてきた。

そうして、一時間ほど勉強したところで、母親がタイヤキとお茶を持ってやってきた。

「どう、頑張ってる？」母親はタイヤキとお茶をテーブルの上に置いた。そして母親は突然笑い出した。

「お母さん、どうしたの？」奈々枝は不思議そうな顔をした。

「だって、その人形、最初は恵比寿様だと思ったのよ。そしたら、それ勇樹君だって言うじゃないの。もう、おかしくて」

勇樹は恥ずかしくてタイヤキを口に入れたまま下を向いた。

「私、そのギターのところ、恵比寿様の持つてる魚だと思っちゃったの」母親は笑いが止まらなかった。勇樹は更に下を向きながらもごもごとタイヤキを食べた。

「ご馳走様でした」勇樹は奈々枝の家の玄関でくつ紐を結んでいた。
「奈々枝は行かないの？」母親が勇樹を見送りに来ていた奈々枝に尋ねた。

「うん、まだ、大きな音聞いたら、頭が痛くなりそう」奈々枝は母親の顔を見た。

「もう大丈夫じゃないの。それに、最近奈々枝、家にばかりいるじゃない。たまには、外に行った方が気分転換になると思うけど」

「そうかな、じゃあ行って来る。ちょっと待っててね」奈々枝は部屋に戻り、バックを持って来てやってきた。

「奈々枝さん、久し振りです」正人が奈々枝に近づいた。「どうし

たんですか、その帽子？」

「正人ちゃん。女の子の気持ちを分かってないようね」文江が正人をたしなめた。

正人ちゃんだって。最近正人は文江にそう呼ばれていた。それを聞いたたび勇樹はクスクス笑った。

「勇樹、なに笑ってんだよ。お前に半田を紹介して欲しいって言われたこと、ばらしてもいいんだぞ」

「えっ、半田って誰なの」奈々枝が勇樹を見た。

「いや、男ですよ、男。三組の男」勇樹は慌てた。

「結構、美少年なんだよねそいつ。勇樹、前から気になってたみたいなんだ」正人が面白おかしく言った。

「あんだ達、ばっかじゃないの。ほら、練習始めるよ。今度が三人でやる最後のライブなんだからね」

練習が終わって、久し振りに五人でジューズで乾杯をした。

「そうか、もう、最後なんだね」奈々枝が寂しそうに言った。

「でも、奈々枝は来年も勇樹君のライブ見れるじゃないの」文江が言った。

「なんでですか。」正人が体を乗り出して聞いた。

「正人君には言ってなかったわね。私、今年、出席日数が足りなくて、卒業できないのよ」

「ずるい、勇樹、それはずるいぞ。俺は文リンと来年で分かれるかも知れないのに、お前だけ奈々枝さんと一緒にいれるなんて、それはずるいぞ」

「やだー正人ちゃん、みんなの前で文リンなんて言ってる」文江は両手をほほにつけて恥ずかしそうに体を左右に振った。

勇樹は最初、言葉が出なかった。しかし徐々に笑いが込み上げてきた。でも必死で我慢した。人にはいろんな恋愛の形がある。それを笑っちゃいけない。そう思ったからだ。

でもな正人、いくらなんでも文リンはないだろう。勇樹が、奈々

枝とさゆりを見ると二人も必死で笑いをこらえていた。目が合うと三人は大声を出して笑った。正人は赤い顔をして顔を下に向け、文江は相変わらず体を左右に振っていた。

「ねえ、勇樹。半田って人、本当に男なの？」帰り道、奈々枝が勇樹に聞いた。

「男ですよ。正真正銘の男です。それに俺はそういう趣味はありません」

「なら、いいんだけど」それから、奈々枝は何も話さなくなった。勇樹が話しかけても「うん」と「そう」しか言わなくなった。

「奈々さん、どうしたんですか。もしかして俺を疑ってるんですか」勇樹は立ち止まって奈々枝と向き合った。

「ううん。でも、勇樹。他に好きな人がいたら、無理に私に付き合ってくれないんだよ」奈々枝は下を向いて勇樹と目を合わせなかった。

「俺は、奈々さんだけです。いつも言ってるじゃないですか。その言葉に嘘はありません」

「昨日、女の子と会ってたでしょう？あれは誰なの」

「えっ、ああ、あれは中学時代の後輩ですよ」

「楽しそうに話してたよね」

「それは、知り合いですから」

「ねえ、勇樹、本当は、私みたいな・・・病気持ちで、男みたいな髪の毛なんか相手にしたくないんでしょう！」奈々枝は、そう言うのと駆け足でその場を立ち去った。

勇樹は、奈々枝を追いかけられなかった。奈々枝に疑われていることと、急に変わった奈々枝の態度がショックでその場を動けなかった。

俺は、こんなに奈々さんを好きなのに。それは奈々さんも分かっていると思ってた。なんで、こんなことになるんだ。誰も悪い訳じゃないのに。なんで、こんな思いをしなくちゃいけないんだ。

勇樹は奈々枝の家の前まで来た。何度も携帯を鳴らしたが奈々枝は出なかった。メールで「今、外にいます。話しがしたい」そう送信しても返信はなかった。

勇樹は、その日、また眠れない夜を過ごした。誤解なんだ奈々さん。全部誤解なんだ。勇樹は自分の気持ち伝えられない悔しさとこのまま奈々枝との関係が終わってしまうかも知れないという不安から、夜通し机に座り頭を抱えていた。

次の日、勇樹は朝早くから奈々枝の家の前にいた。そして、ずっと奈々枝の部屋を見上げていた。電話もメールもしたが返事はなかった。

それは間もなくお昼になろうという時間だった。

「なんだ、勇樹君じゃないの」奈々枝の母親だった。

「さつき、近所の人から、怪しい人間が家の前にいるって電話が来たのよ」

「すみません、ちょっと、いろいろありまして」勇樹は頭を下げた。

「昨日の奈々枝の様子だと、おそらくケンカでもしたんだろうとは思ってたけど。どうぞ、入って」

勇樹は居間のソファーに座った。向い側には母親が座った。勇樹は訳を話した。

「ごめんね。先生にも言われたんだけど、しばらくは精神的に不安定になるって言ってたから、おそらく、それが原因だと思うんだけど」母親はちらつと勇樹の顔を見てお茶を飲んだ。

「ええ、実は、最近そうかなと思うときはあつたんです。でも、昨日の様子はちょっと変だったんで、とても心配で」

「ちょっと待って、様子を見てくるから」母親は立ち上がると二階へ上がった。

「奈々枝、勇樹君来てるよ。部屋に入れていい？」

「一人にさせて頂戴」奈々枝は布団にくるまっていた。

「良く話し合った方がいいんじゃないの」

「分かってる。でも、今は話したくないの」

母親が居間に戻ってきた。

「勇樹君、ごめんね。今は、一人でいたいそうなの」

「分かりました。じゃあ、帰ります。お邪魔しました」勇樹は奈々枝の家を後にした。勇樹は何度も何度も振り返って、奈々枝の部屋を見たが、奈々枝の姿を見ることは出来なかった。

勇樹は、それからしばらく、朝、昼、晩、寝る前に「話したい。返事待ってます」と奈々枝にメールを送った。勇樹は、メールを送るたび、今度は返事がくるだろうと思っていたが、奈々枝からの返信がくることはなかった。

次第に、勇樹はいらいらして、奈々枝に対して憎しみさえ覚えるようになってきていた。しかし、その度に、精神的に不安定になってるのかも知れないと思い、爆発したい気持ちを抑えていた。しかし、徐々にそれも限界に近づいてきた。

勇樹は、家で宿題をしている時、鉛筆をへし折った。なんで俺がこんな思いをしなくちゃいけないんだ。俺がなにをしたっていうんだ。勝手に人のこと疑って、俺はずっと奈々さんを思っていたのに。髪の毛がなくなたって、病気だって、俺はかまわない。これからも、奈々さんを守っていこうと思ってたのに。その怒りは奈々枝に向かった。

ばさつと教科書と筆箱を机の下に叩き付けると、勇樹はどさつと布団の上に倒れた。悔しかった。奈々枝が手術の時、自分がなにも出来なかった悔しさと同じものではない。まったく異質な悔しさだ。いいさ、そっちがその気なら、勝手にするがいい。勇樹はその日から奈々枝にメールをするのをやめた。しかし、もしかしてと思い、勇樹は寝る前には必ず携帯を確かめて、そして、ため息について布団に入るのだった。

「勇樹、ちょっと話があるんだけど」練習が終わってさゆりが勇

樹を呼んだ。「それじゃね」正人と文江は一緒に帰って行った。

「最近、奈々枝の様子が変なんだけど、なにかあったの。今日も来なかったしさ」

「さあ、俺には分かりませんよ」勇樹はさゆりの顔を見ずに、窓の外を見て突き放すように言った。

「そう言う言い方をするってことは、何かあったのね。何かあったのか話してよ」

「それはこつちが知りたいですよ。勝手に人を疑って。俺が浮気をしてると思ってるんです。病気持ちで、男みたいな髪の女より、そちの女の方がいいでしょって、きつとそう思ってるんだ。それならそれで、本当に浮気をしてやるうかと思えますよ」

「勇樹、あんた、本当にそんなこと思ってるの」

「思ってる訳ないでしょう！」勇樹は大声を上げた。

「そんなこと思ってる訳ないでしょう」勇樹は自分に言い聞かせるように、唇を震わせながら、もう一度静かに言った。

勇樹は窓の外を見た。そこには、正人と文江が仲良く手をつないで歩いている姿が勇樹には見えていた。勇樹は仲の良かった頃の自分を思い出して目が潤んできた。

「さゆりさん、俺、本当に奈々さんが好きなんですよ。これからは俺が奈々さんを守らなくちゃって思ってたんです。その気持ちは今も変わってはいません。でも、それを伝えられないんです。もう二度と伝えられないかも知れないんです。そのうち奈々さんを本当に憎みそうで、俺、怖いんです」

「奈々枝が誤解してるって勇樹は思ってるんだね」

「そうです。あの時俺は、中学時代の後輩の女の子にサインを頼まれました。ただ、それだけです。おそらく奈々さんは、お母さんの車に乗っているときにでも、それを見たんでしょう。でも、奈々さんは、それを信じてはいない。だから、俺はそれが悔しくて。こんなに奈々さんのことを思っているのに。奈々さんは俺を信じちゃくれないのかって」

「本当にそう思う？」

「それしか考えられません」

「あたしね、昨日、奈々枝が国語の時間に書いていたノート見たんだ。一ページ全部勇樹の事が書いてあったよ。なんて書いてあったと思う」

「勇樹のバカヤローですか」

「違うよ。勇樹ごめんね、だよ」

「えっ？」

奈々枝は母親の車で病院から帰ってくるころだった。今日は退院後の定期検査と、薬をもらいに病院に行ったのだ。

奈々枝が外をぼんやり見ていると、勇樹がとぼとぼと一人で歩いているのが見えた。奈々枝は通り過ぎるまで勇樹をじっと見ていた。母親はそれに気がついたが、何も言わなかった。

奈々枝は家に帰り、一人で布団に入った。最近なにもする気が起きないし、母親とも話したくなかった奈々枝は、家に帰ると横になっただけだった。

そんな奈々枝を母親は、黙って見ていた。言うことは「はい、これお薬ね。こっちは寝る前に飲むのよ」それだけだった。

学校でも奈々枝は、さゆりや文江と話すことも少なくなった。さゆりと文江も受験勉強で忙しく、奈々枝をかまっていられなかったが、合えば、やっぱり、卒業できないのショックなんだろうね、と言っただけだ。奈々枝を見ているだけだった。

さゆりは大粒の涙をこぼしてステージから降りてきた。みんなにもらった花束を大事に胸に抱いて、何度も何度も音楽村のメンバーに頭を下げていた。

「さゆりちゃんは、本当に成長したな。音楽だけでなく、人間的にも成長した。俺は、村長としてさゆりちゃんを誇りに思うぞ」大森はさゆりと握手をした。

「さゆりちゃんが来なくなるの寂しいな。でも、これからが大事なときだからな。勉強だけじゃなくて、一人の女としてもさ」天田が手を差し出した。

「何言ってるんですか。あたしはボイスにはまた来ますよ。だってここは故郷ですから」さゆりは天田の手をぎゅと握った。

勇樹は一人椅子に座り、黙ってそれを見ていた。ふと、前を見ると、このまえサインをお願いされた矢沢が勇樹を見ているのに気がついた。矢沢は勇樹と目が合うと、頭を下げ店を出て行った。

「勇樹、行くぞ」吉田が勇樹に声を掛けた。勇樹は思い腰を上げ吉田の後について行った。

「さゆりちゃん、今までありがとう。そして、さゆりちゃんの受験の成功を願って、乾杯！」大森の音頭で、いつもの宴会が始まった。正人と文江が仲良く話している脇を通り、勇樹は一番はしっこに座った。そして、コップにビールを注ぐと一人で飲み始めた。それはとても苦かった。

「どうした、勇樹君」一人ではぼつんと座っている勇樹が気になったのか、弘道が勇樹に話しかけた。

「いえ別に、俺もビール飲んで見ようかなって思いました」

「今日も、奈々枝ちゃん来なかったね。病気は治ったって聞いているけど、まだ本調子じゃないのかな」

「さあ、俺には、分かりません」

「随分、冷たい返事だな。もしかして分かれたのかい？」

「俺は、そうは思ってますけど、あつちはそう思ってるかも知れませんね」

「勇樹君」弘道は勇樹と向かい合うと、手を勇樹の肩に乗せた。

「勇樹君。まあ、そういうこともあるさ。でも、いい思い出いっぱい出来たんだろう。まあ、今は、つらい思い出になってるかも知れないけど。でも、いつか、それが、いい思い出になるときがくる。

例えばそれが、いつまでもつらい思い出だったとしても、その経験は勇樹君を成長させてくれるはずさ」

勇樹は黙って頷いた。

「俺、勇樹君を見て思ったんだけど、最初より随分歌が上手くなったと思うよ。技術的なことだけじゃなくて、気持ちが見えるようになってきたと思うんだ。特に今日の歌は今までの中で、一番だった」

「本当ですか」

「ああ、嘘じゃない。きつと、奈々枝ちゃんとの出会いが、勇樹君を一回り成長させてくれたんだ。今、勇樹君が奈々枝ちゃんをどう思っているか分からないけど。将来、出会ってよかったって、そう感謝する時が来るさ」

弘道は、勇樹の肩から手を外すと、勇樹が飲んでいたビールを一気に飲み干し、そこにウーロン茶を注いだ。

「それから、やけ酒はまだ早い。まだ若いんだから、前向きに考えるよ」弘道はピースサインを出して戻って行った。

音楽村のクリスマスライブのステージには、勇樹と正人は出なかった。さゆりが辞めて、曲を練り直したりしていたこともあり、とてもライブまでは間に合わなかったからだ。もつとも、練習はさゆりの家の倉庫を使わせてもらってたので、ちよくちよくさゆりは顔を出して、ああだこうだと口を挟んではいた。

二人は、他のメンバーのステージを見ていた。今日は、さゆりと文江も見に来ていた。しかし、勇樹が辺りを見回しても、奈々枝の姿はどこにも見えなかった。

ライブの後片付けが終わり、勇樹は、正人と文江と一緒に帰るのを見送った。そして、さゆりの姿を探した。さゆりも同じように勇樹を探していたようだ。目があうと、さゆりが勇樹の方へ向かってきた。

「勇樹。最近、奈々枝と話した？」

「いえ、全然」勇樹はため息をつくように言った。

「そう。奈々枝ね、最近様子がおかしいんだ。なんか元気がなくて

さ。やっぱり、みんなと一緒に卒業できないのと、勇樹とうまくいってないせいかなって、文江と話してたんだけど」

勇樹は、顔をさゆりに向けたまま、視線を宙に泳がせていた。そんな勇樹にさゆりも何も言わなかった。

勇樹もさゆりも、奈々枝が一体どうしてしまったのか、それが知りたかった。勇樹は、さゆりなら奈々枝のことが分かるかも知れないと思っていたのだが、どうやら、さゆりにも奈々枝が変わってしまった理由は分からないらしい。さゆりも同じように勇樹なら、その理由が分かると思っていたようだ。

しばらく二人は、友人の告別式で久しぶりに会った旧友のように、向かい合って黙って立っていた。

突然大声がした。

「おい、打ち上げに行くぞ」天田の声だった。

「今、行きます」さゆりが応えた。

「さゆりちゃん、受験勉強しなくていいの？文江ちゃんは帰ったけど」吉田が言った。

「たまには、ストレス発散してもいいでしょう。ねえ、勇樹も行くんでしょ？」

さゆりにそう誘われたが、なんとなく一人になりたかった勇樹は、首を横に振って店を出た。

「向井さん」不意に後ろから声がした。振り向くと矢沢が立っていた。

「どうしたの」勇樹は首だけ後ろに向けた。

「今日は演奏やらなかったんですね」

「ああ、メンバーが一人抜けてね。今いろいろ練っているところさ」「さゆりさんが抜けたんでしょう」

「そうか、矢沢、同じ部だったからさゆりさんの顔知ってるんだな。まあ、受験だから仕方ないよ。もともと、無理して、ついこないだまで付き合ってもらったからね。お礼を言いたいくらいさ」

矢沢は勇樹の前に立った。

「向井さん。これ読んで下さい」そう言って手紙を渡すと矢沢は駆け足で立ち去った。

勇樹は家に帰ってその手紙を読んだ。これはラブレターだ。丁寧な字で勇樹への想いが綴ってあった。

勇樹は、その手紙を複雑な思いで眺めた。俺に付き合っている人も好きな人もいなければ、矢沢と二人で会ってみてもいい。だけど今は、付き合っている人はいるような、いないような状態だ。おそらく、第三者からみれば、付き合っている人はいませんね、と言われるだろう。好きな人は？と聞かれれば、好きな人はいます。と答える。もつとも、これも第三者からみれば、振られたんでしょう、と言われるような状態だ。

勇樹は、腕組みをして椅子を前後に揺らしながら考えた。どうせ、奈々さんとは、もう修復不可能なんだから、いつそのこと矢沢と付き合っちゃおうかな。でもな、こんな中途半端な気持ちで付き合ったら矢沢に悪いし。

なんだよ、どうすればいいんだよ。こういう時はボン・ジョビでも聞こうと、勇樹はがちゃがちゃとCDを探し始めた。「あれ？こんな所にあつたのか」。勇樹はCDのスイッチを入れた。そこから、勇樹と正人とさゆりが、初めて録音をしたときの演奏が流れてきた。

ヘツタクソだな。あつ正人コード間違えてやがる。さゆりさんも全然合っていない。あーあ、俺も歌詞間違えてるし、音程も時折ずれている。今聴くと、最初の頃はこんなレベルだったんだな。弘道さんが上手くなったって言うのも分かる気がするよ。

それでも勇樹はそのCDを最後まで聴いた。そして、何度も何度も繰り返し聴いた。そして、勇樹はヘタクソでも一生懸命に演奏していた自分達を思い出していた。いつしか勇樹の目には涙が溜まっていた。

俺、逃げてるだけじゃないか。こんなヘタクソな演奏してても、

あの頃は逃げなかった。こんな録音を持って大森さんの所へ行つて、そしてライブまでやったじゃないか。それなのに、今はどうだ。奈々さんとの関係がおかしくなったのは、奈々さんが勘違いしているせいだと思つて、自分の気持ちをぶつけなかったじゃないか。

「勇樹ごめんね」そうノートに書いた奈々さんの気持ちは俺には分からない。でも、それを考えてもしようがない。俺は、奈々さんに自分の気持ちをぶつけるのが先だったんだ。

勇樹は、携帯を手にとると手紙に書いてあつた矢沢のメールアドレスに「手紙読みました。今、僕には、好きな人がいます。ごめんね。でも、また、ライブ見に来て下さいね」と送つた。

そして、「奈々さん。俺、今でも奈々さんが好きです。あれ以来ずっと、俺はこんなに好きなのに、奈々さんは俺を信じてくれないのかつて思つてました。正直、恨んだこともありました。でも、俺が奈々さんを好きな気持ちに変わりはありません。今でも、奈々さんを守れるのは俺しかないって思っています。でも、奈々さんの気持ち俺から離れたら、それは仕方のないことだと思います。ただ、こんな気持ちでさよならしたくはありません。嫌いになつたのなら、嫌いになつたと言つて欲しい。俺は、奈々さんの本当の気持ちが知りたいだけです」と奈々枝にメールをした。

勇樹が布団に入り、間もなく寝つこうかという時だった。勇樹の携帯がなつた。それは奈々枝からのメールだった。勇樹は携帯を取ると布団を飛び出した。そして、ドキドキしながら震える手でメールを見た。

「勇樹。私は今でもあなたが大好きです。私には勇樹しかいないのだから、勇樹お願い、ずっと待っていて欲しい。私をずっと待っていて」携帯の文字を通して奈々枝の気持ちが勇樹には伝わつた。

勇樹は奈々枝の気持ちが分かつてうれしかった。奈々さんは俺を必要としている。勇樹はまだ震えの止まらない手で「待っています。俺、奈々さんをずっと待っています」と返信した。

奈々枝は勇樹からの返信を見ると、携帯をぎゅっと胸に押し当て

た。そして、机の上にあるユウキを取ると、名前の部分を塗りつぶし、そこに「勇樹」と書いた。

十二話

二月の雪が道路を覆い、どんよりとした雲が、流れることもなく空に留まっているのを見ながら、勇樹と正人は倉庫を目指していた。今日は、正人がパソコンを駆使して作ったオリジナル曲の練習をすることになっていた。なんでも、ドラムやベースもパソコンで入れられるらしく、これなら二人でも大丈夫だと、正人は勇樹に自慢していた。

本当は別なメンバーを探すことにしていたのだが、もう、メンバーも固まっている連中が多く、それに、三年も間近になれば、新しく音楽をやるうなんて奴もいる訳がないので、こうなったら、お前と心中だと言って、二人だけでやることにしたのだ。

倉庫に着いて、石油ストーブをつけた。二人はしばらく石油ストーブの近くに座り、体を温めていた。

「なあ、勇樹、俺ずっと聞きたかったんだけどさ。お前、最近、奈々枝さんの話しないよな。分かれたのか？」正人が石油ストーブの炎を見ながら勇樹に聞いた。

「いや、分かれちゃいないよ。でも、最近全然会っていないのは確かだけど」勇樹は炎を黙って見ていた。

「何で会わないんだ。連絡はしてるのか」

「前は、メールも全然来なかったんだけど、最近はたまに、おやすみ、ってメールが来るよ」

「何だかわからないな、お前らの関係。でもさ、こないだ、文リンが言ってたんだけど、最近、奈々枝さん学校にも行ってないみたいなんだ」

「それは、知らなかったな」勇樹は正人の顔をちらつと見た。

「もつとも、今の時期は、みんな、受験、受験で学校に行っても、ほとんど、自習みただけだね」

「じゃあ、行っても仕方ないんじゃないのか」

「でも、それをお前が知らないのは、やっぱりおかしいよ。本当に分かれてないのか」正人が勇樹に顔を近づけた。

「分かれちゃいないさ。でも、俺は、奈々さんの気持ちが分かるし、奈々さんも俺の気持ちが分かってる。それでいいじゃないか」勇樹はにこっと笑った。

「まあ、お前のその顔は、分かれた顔じゃないことだけは確かだな。じゃあ、俺はもうお前のことを心配するのは辞めた」

正人は、また、石油ストーブの炎に目を落としたり。

「正人、文江さんが大学行ったら、お前も寂しくなるな」

「仕方ないさ。それは分かっていることだから」

「正人、練習しようぜ。俺達まで、なんか天気みたいに暗くなっちゃいそうだ」勇樹がギターをジャーンと鳴らした。

「そうだ、勇樹、俺、二人の名前を考えて来たんだ。正人&勇樹ってのはどうだ？」

「ダメだ、勇樹&正人だ」

「お前も、その辺は大人になっちゃいけないな」正人は大声で笑った。

二月の音楽村のライブが終わった後、勇樹と正人はいつものように、後片付けをしていた。

「正人ちゃん。終わったら一緒に帰ろうよ」文江が正人に話し掛けた。「もう少しだからね、文リン」正人はスピーカーを運びながらウイנקをした。文江は受験も終わり、後は結果を待つだけだったので、今日はライブを見に来ていたのだ。なんでも、滑り止めで受験した大学は合格したらしく、今日はいつもより上機嫌だった。

「おい、勇樹。あいつらなんとかしろ。見ているだけで鳥肌が立ちそうだ」吉田が渋い顔をした。

「まあまあ、あの二人、後一ヶ月もすれば離れ離れになるんですから、大目に見てやって下さいよ」勇樹は、はい、と言って吉田にアンプのコードを渡した。

「そうか、もう、そういう時期なのか。俺も、お前らの頃は熱い恋

愛をしてたもんだ・・・」

勇樹は昔話を始めた吉田を無視して、テーブルを運んだ。二つ目のテーブルを並べていた時、勇樹は、声を掛けられた。

「向井さん。終わったら、ちよつといいでしょうか」それは矢沢だった。

「ああ、いいけど」

「じゃあ、外で待ってます」

一体なんだろう。こないだ、メールを送ったはずなんだけど。届いていなかったのかな。勇樹は不思議に思った。

勇樹は、後片付けを終え、正人と文江を見送ると外へ出た。そこには、寒そうに立っている矢沢がいた。

「すみません。突然呼び出して」矢沢は頭を下げた。

「どうしたの？」

「あの、向井さんにどうしても話しておきたいことがあって」矢沢は、勇樹を見つめた。

「そう、じゃあ、ここじゃ寒いから、ボイスに戻ろうか」

「はい」

二人はボイスに戻った。店はすっかり片付き、店の奥では天田と弘道と大森が次のライブの打ち合わせをしていた。勇樹と矢沢が入ってくるのを見ると天田が「どうした勇樹、忘れ物か？」と聞いた。「いえ、そうじゃないんですけど、ちよつと、ここ借りていいですか」勇樹は店の端っこのテーブルを指差した。

天田は頷くと、これサービスだからと言ってココアを持ってきてくれた。

しばらく二人はココアを飲みながら黙っていた。話しかけたのは矢沢の方からだった。

「向井さん。この前は、すみませんでした。突然、手紙なんか渡して」矢沢は緊張しているのか肩が上がり、手をももに置いて顔は下を向いていた。

「いや、別に」勇樹はその後、なんて言っているのか分からなかつ

たので、ココアを一口飲んだ

「メールは読みました。でも、どうしても、これだけは言っておきたくて」

矢沢はココアを飲むとまた話し始めた。

「あの、私、中学時代から向井さんが好きでした。実は、私、中学一年のとき、テニス部の二年生にいじめられていたんです。でもテニスが好きだったから、ずっと我慢しました。でも、二年生に、ラケットを隠されて泣いていたとき、向井さん一緒になって探してくれましたよね。そして向井さん、その上級生のこと（お前にテニスをやる資格はない。今度こんなことしたら、女だからって容赦しないぞ）って言うてくれたのを覚えてますか」

「いや、覚えてないけど、たぶん、その上級生、浜田じゃないか」
「そうです、浜田さんです」

浜田は勇樹と同じクラスで、確かに人の悪口や陰口をよく言っていた。勇樹もあまりよくは思っではいなかった。さゆりさんがいた時は、首根っこを抑えられていたので、おとなしくしていたのだろうが、いなくなった途端に、下級生をいじめ始めたのだろう。

「向井さんが、そう言うてくれた後も、いじめはなくならなかったんですけど、ただ、私には味方がいるって思えたら、急に自分に力が湧いてきて、いじめも気にならなくなったんです。そのうち、いじめもなくなりました」

「そうか、そんなことがあったんだ」

「ええ、それで、その時から私、向井さんが好きになって・・・でもいいんです。私、向井さんに付き合っている人がいるの知ってましたし。ただ、自分の気持ちを伝えなかったただけなんです。それに、あのお礼も言うてなかったの、それも伝えなかったんです」

矢沢は立ち上がると「ありがとうございました」と言っただけでボイスを出て行った。

味方か。いつも側にいる訳じゃないのに、気持ちだけでもつながっていれば、それは、心強いものなのかも知れないな。奈々さんと

は、もう三カ月も会ってないし、メールも「おやすみ」って送るだけだけど、奈々さんにとっては、それが、心強い援軍なのかも知れない。何故、奈々さんが俺と会わないのかは分からない。でも、奈々さんは俺を必要としている。それは間違いない。そして、俺は奈々さんを待っている。いつまでも待つつもりだ。

勇樹が、残ったココアを飲み干すと天田と弘道がやってきた。

「勇樹、お前、なかなかやるな。奈々枝ちゃんと別れたと思ったら、もう別な子と出来たのか」天田はカップを下げた。

「えっ」勇樹は天田を見た。

「いや、さゆりちゃんを送別会の時、勇樹君、奈々枝ちゃんと別れてさみしそうだったから、女の子でも紹介してやるうかって話してたんだよ。でもそいつは、いらぬおせつかいだったな」弘道がタバコの煙を吐き出しながら言った。

「俺、別れたって言いましてっけ」

「別れてないの？だって、あれ以来、奈々枝ちゃん全然顔見せないし、勇樹君も奈々枝ちゃんのこと話さないからさ、俺、てっきり別れたと思ってたよ」弘道はきよとした顔をした。

「別れてないですよ。前より仲がいいと思ってるくらいなのに」

「弘道、お前の目も狂ってきたんじゃないのか」天田はカップを持って、厨房に向かった。

「そうか、でも、それは良かったな勇樹君。まあ、あの時の様子だとなにかあったんだろうけどさ。雨降って地固まったってやつか」

弘道は勇樹の前に座った。そこに大森がやってきた。

「勇樹、今度、いつライブに出れる？」

「四月にはなんとか間に合わせようと思います」

「そうか、四月か。ヨーシ分かった。新生・正人&勇樹を見せてくれよ」

「違いますよ。勇樹&正人ですよ」

十三話

さゆりと勇樹は駅の改札口で、文江を見送った。正人はプラットホームまで見送りに行った。

「行っちまったね」さゆりが寂しそうに言った。

「行ってしまいましたね」勇樹も頷いた。

「あたしも来週には、この町ともおさらばだよ」

「寂しくなりますよ」

「本当に、そう思ってるの？」さゆりは横目で勇樹を見た。

「本当ですよ。なんだかんだ言っても、俺、さゆりさんのこと頼りにしてましたもん」

「そうかい、じゃあ、あたしがいなくなったら、奈々枝のこと頼むよ」

「ええ、分かってますよ」勇樹は力強く頷いた。

「実はさ、昨日、奈々枝に会ったんだ」

「えっ」

「昨日、家に合格祝いだってプレゼントを持ってきたのさ」

「元気そうでしたか？」

「元気そうでしたかって、まるで、人ごとのようだね。まあ、いいけど。奈々枝ね、やっぱり精神的にまいってたみたいだったよ」

「やっぱりそうですか。奈々さんのお母さんも、しばらくは精神的に不安定になるって言ってましたから」

「聞いたら、けっこう大手術だったらしいね。そのストレスと、学校を卒業できないこと、それから、自分は勇樹に迷惑掛ければなしかったこと、まあ、他にもいろんなことが重なったみたいだね」

「俺は、迷惑掛けられたなんて思っていないですよ」

「勇樹が病院に見舞いに来る度、うれしい気持ちと、申し訳ない気持ち、両方あったって言うてたよ。その上、髪の毛を切られて外も歩きたくなくなっただって。勇樹が後輩と会っているのを見たとき、

それは仕方ない、こんな私と付き合ってる勇樹が可愛そうだって、自分は嫌われてもしょうがないって思ったらしいよ。それで・・・」

「さゆりはじつと勇樹をみつめた。勇樹もさゆりを見ていた。」「ちよつと、歩こうか」「さゆりはくるりと回ると駅の出口の方へ向かった。勇樹もその後を追いかけた。」

勇樹が追いつくと、さゆりは話し始めた。

「これは、勇樹には内緒にしてくれって言われたんだけど。勇樹なら話しても大丈夫だと思うから話すよ。奈々枝ね、うつ病になったんだ」

「うつ病？」

「そう、聞いたことあるでしょう。あたしもよくは知らないけど。なんでも、いつも落ち込んだような気分になる病気らしいよ。奈々枝は、医者に肉体疲労の精神版だって言われたみたいだけど。とにかく、何も考えたくなくなつて、やる気が起きなくなつたようだね。だから、勇樹が電話とかメールをよこしても、返事をする気も起きなかつたって言った」

「それで、何の連絡もよこさなかったのか」

「きつとそうだろうね。それから、どんどん悪いほうへ悪いほうへ考えてしまつても言った。きつと、勇樹が後輩と会つてたのを見て、勇樹が浮気してるとでも思っちゃつたんだろうね」

「うつ病ならうつ病と言ってくればいいのに」

「いや、それは違う。好きな相手に、私はうつ病ですなんて言える？ただでさえ、自分は勇樹に嫌われるかも知れないって思ってるのに」

「でも、連絡くらいはよこしてくれても・・・」

「それが出来なくなるのが、うつ病なんだろうね。でも、奈々枝言つてたよ、今思つと、勇樹が待つてくれるから、ここまで治つたつて」

「そうですか。じゃあもうすぐ会えますね」

「奈々枝次第だね。おそらく、奈々枝はちゃんと治つた自分を勇樹

に見て貰いたいんだろっね。まあ、女の気持ちからすれば、好きな男にはきれいな自分を見てもらいたいからね。確かに去年の暮れ頃は、表情がなくて、これじゃ男も逃げ出すだろうと思っちゃったもん。昨日は帽子も被ってなかったし、表情もだいたいぶ明るかった。まあ、これから二人で頑張るんだよ」

「さゆりさん、さゆりさんには本当にお世話になりました」勇樹は深々と頭を下げた。

「本当よ。だいたい、あんたたちは人の気持ちを気にしすぎなの。もっと自分の気持ちを伝えればいいのに。あたしみたいに、ばちつと行かなくちゃ。もう、最初は、あんたたちくつつけるのに、こっちはいらいらしてたんだから」

「は？」

「いや、なんでもない、独り言。おや、正人戻ってきたみたいだね。戻ろうか」勇樹とさゆりは、右腕のすそで涙を拭いている正人の所へ向かった。

「文リン行っちゃった」正人は人目もはばからず泣いた。勇樹とさゆりは、ずっと正人を慰めていた。

「さゆりさん。元気だね。俺達のこと忘れないでね」勇樹は改札口でさゆりに手を振った。正人も勇樹の脇で手を振っていた。

「あんたたちのことは忘れたくても忘れられないよ。あっちに行っても心配で眠れないかも知れないからさ」さゆりは大きなバックを持ち、いつもどおりの口調で言った。

「さゆりー、元気だねー」勇樹はその声を聞いてはつと振り向いた。そこにはさゆりに向かって手を振っている奈々枝がいた。

勇樹は手を振っている奈々枝を見つめた。髪をショートカットにして、少し痩せた感じはしたが、それは紛れも無く奈々枝だった。

「勇樹、奈々枝のこと頼んだよー」その声に、勇樹はもう一度さゆりを見た。さゆりは最後に大きく手を振ると電車に乗り込んだ。そして、電車はゆっくりと動き出した。

「あー良かった間に合って」電車を目で追い掛けながら奈々枝が言った。

「俺達さゆりさんに、なんだかんだ言われながらも面倒見てもらったよな」正人も電車を目で追っていた。

「ああ、そうだな」勇樹は、もう一度大きく手を振った。そうして、さゆりの乗った電車はどんどん小さくなって、やがて見えなくなっ

た。

「奈々枝さん、久しぶりです」正人が奈々枝に声を掛けた。

「本当、久しぶりだね。正人君も元気そうで良かった」

「そう見えます？でもこないだ文リンが行っちゃって、ちよつと寂しいんですけどね。でも、俺が大学合格して、東京で再会しようって言ったら、絶対だよ、約束だよって言ってくれたんです。俺それを信じて、今年はやりますよ」正人は力強く頷いた。

「大丈夫だよ。正人君ならきつと出来るよ」

「ええ、頑張りますよ。じゃあ、俺、ちよつと用事があるんで、これで帰ります」正人は、勇樹と奈々枝に気を使ってそう言うと、手を振って帰って行った。

勇樹は突然奈々枝に会って驚いたこともあり、奈々枝に何て言っているのか言葉が見つからなかった。奈々枝も同じように、何も言わなかった。

「じゃあ、あっちに行きますか」勇樹は、あっちとはどこか考えていなかったが、とりあえず歩き出した。奈々枝も勇樹の脇を一緒に歩いた。

あんなに会いたいと思っていたのに、いざ、会って見ると、なんだか気恥ずかしい気持ちを勇樹は感じた。それは奈々枝に告白したときのものとは違うものだ。

「奈々さん、久しぶりです。髪、だいぶ伸びましたね」勇樹は言葉が見つからなかったが、何か言わなくちゃと思い、さしさわりのないことを言った。

「うん、ようやくね」奈々枝は髪を右手で触った。

それから二人は、しばらく何も話さず駅から繁華街の方を目指して歩いた。

勇樹は何も話せなかった。奈々枝の病気のことを聞いていたので、変なことを言つて、また、関係がこじれるのを恐れていたのだ。

交差点で、勇樹はちよつとうつむき加減の奈々枝の顔をみつめた。奈々枝はすこし痩せて、確かにまだ昔の元気な顔ではない。良くみると、それを隠すように薄く化粧をしている。それを見て、勇樹には分かった。そして、奈々枝の右手を左手で握りしめて、「お帰り」と言った。

奈々枝はなにも言わずに、うん、と首を立てに振った。そして、奈々枝は勇樹とつないだ手をしっかりと握った。

それから、奈々枝は徐々に回復した。学校にもちゃんと行けるようになった。前のように奈々枝の家で勉強をしたり、映画を見たり、楽しく話しをしたり、ライブも見に来るようになった。

勇樹と正人はその年の十月まで音楽村のライブを行った。練習は、正人の家でした。最後のライブの時、音楽村で送別会をしてくれた。正人はいつものことだったが、勇樹まで酔いつぶれてしまい、気が付くと、奈々枝が隣で介抱してくれたこともあった。

そして、たくさんの思い出を詰めた高校時代は終わりを告げた。

奈々枝は東京の大学に行った。正人も東京の大学に行った。もつとも文江には別の彼氏が出来て、正人は振られてしまったので、東京で新しい彼女を見つけると言っていた。

勇樹は、東京には行かず地元の大学に行った。勇樹が一年生の時、「私、スカウトされた」と奈々枝がメールをよこした。それから、メールのやりとりもなく、スカウトされて一日程たった頃だろうか。「私、女優を目指します」、「頑張れ、応援してます」、それが最後のやりとりになった。

勇樹は大学でバイクにのめり込み、バイクのサークルで知り合っ

た別の彼女を見つけていた。そして、次第に奈々枝のことや、正人のこと、音楽村のことも、次から次へと重なる思い出に、いつしかそれは、色がぼんやりとしてくるのを勇樹は感じていた。

十四話

勇樹は、奈々枝の病気のことは、少しは気になってはいたが、奈々枝との関係はもうだいぶ昔のことだし、別に自分が騒いで見ても仕方ないことなので、たまに、ネットで確認するだけだった。確認すると言っても、退院したとか、復帰した時しかネットに出ることはない。いつしか、それも、忘れて、また普段通りの生活に戻っていた。

勇樹は、相変わらず金曜日は坂田と酒を飲み、土曜日は午前中は寝て、ボーっとして一日過ごし、日曜日は学生時代からの趣味であるバイクを走らせる、そんなことを繰り返していた。

そんな時、正人から久し振りに電話が来た。「この前、実家に帰ってボイスに行ったら、さゆりさんが、天田さんと結婚して驚いた」という内容だった。

へー、そいつはすごいな。さゆりさん、ようやく思いを遂げたんだなと、勇樹も驚いた。ただ、正人は「俺は、お前の結婚式にいつ呼ばれるんだ？このままだと、お前に貰ったご祝儀のお返し、棺おけに入れるようになっちゃうぞ」と嫌味を言うのも忘れなかった。

正人は、もう結婚して今は一児のパパだ。年賀状は子供の写真がプリントされており、その男の子の顔は正人そっくりで、見る度に笑ってしまう。

羨ましい気持ちがないと言えば嘘になる。俺だって幸せな家庭を持ちたいと言う希望はある。しかし、こればかりは自分一人で決める訳にはいかない。

日曜日、勇樹は自慢のバイクを駆って、一人で海を見に行った。今日はなんとなく、海を見たくなくなったからだ。別に理由は無い。それに、希望を聞く相手もないので、行きたくなくなった所に行くだけだ。

初秋の静かな砂浜で、一人、寝転んで海を見てみると、近くを歩いているカップルの話し声が聞こえた。

「そんなにシヨックなの？」女が男を見て言った。

「それはシヨックだよ。だって、俺、坂下京子のファンだったんだからさ」

「彼女、まだ三十二才だったんだって」それを聞いて、勇樹は立ち上がり、服に付いた砂も落とさずにカップルの方へ走った。

「今、聞こえたんだけど、坂下京子なにかあったの？」

突然勇樹に話しかけられてカップルは驚いた表情をした。

「あつ・・・ええ、さつきテレビで脳腫瘍で亡くなつたって言うてましたよ」男が答えた。

「死んだ。それ、本当なの？」勇樹は、ほとんど睨みつけるように男を見た。

「ええ、本当みたいです」

「あなたもファンだったんですか？」女が聞いた。

勇樹は「ああ、俺も好きだったんだ」そう言って、勇樹はまた元の場所に戻った。

勇樹は黙って海を見ていた。ザーザーと波の音が聞こえ、太陽の光が海に反射し、キラキラと輝いている。勇樹は光の中に奈々枝の顔が浮かんだ。坂下京子の顔ではない。あの頃の奈々枝の顔を思い出したのだ。

しばらく、勇樹は海をぼんやりと名眺めていた。しかし、頭の中は奈々枝の思い出が次から次へと浮かんで消えていった。

不思議と、悲しみは沸いてこなかった。それは、勇樹の心の中にある思い出の写真がだいぶ色あせていたのと、奈々枝が自分の手の届かない世界に住んでいたからだと思っただけだった。

勇樹は次の日、会社の上司に、営業に戻らして下さいと直訴した。「おい急にそんなこと言われたってな。まあ一応人事の方へは話しておくが、空きがあるか分からないぞ」

「是非、お願いします」

結果はすぐに来た、勇樹は営業へ異動が決まった。勇樹が前に仕えた上司が、「お前は、今は腐っているようだが、俺は期待してたんだ。やる気があるなら、俺の所に来い」と言ってくれたからだ。

勇樹が、営業所に行ってみんなにあいさつをしていると、元上司が入ってきた。

「向井、ようやくやる気になったか。まあ今日は初日だ、こっちに来いよ。おい、だれかコーヒーを頼む」

勇樹と元上司は応接室でコーヒーを飲みながら雑談をしていた。

「しかし、どうしたんだ、急に営業に戻りたいなんて言って」

「どうしたんですかね。自分にも分かりません。ただ、あの頃の気持ちは戻ったような気がしまして」

「俺に、こつてり絞られていた頃か？」

「いえ、もつと前です。もつと純粹な頃です」

「まあどうでもいいけど。お前が本気を出せば、俺は会社でもトップクラスの人間だと思っている。それは嘘じゃない。向井、これらが本当の勝負だぞ。一回、地獄を味わった人間の強さをみんなに見せてやれ」

「頑張ります」

勇樹は、張り切って仕事をした。面白いように商品も売れた。営業に異動して三ヶ月で、営業所トップの成績を上げるまでになった。

勇樹はフラフラとアパートの階段を上った。今日は、忘年会で、明日が休みだと言うこともあって、しこたま飲んでしまった。

「ふー」どかっとソファーに座ると、ネクタイを緩めた。テーブルの上をちらっと見ると、書きかけの年賀状が重ねてあるのが目に入った。

明日はこいつを完成させるか、勇樹は年賀状を手に取り、パラパラと眺めた。昔の友人の名前を見ているうちに、急に懐かしさがこみ上げてきた勇樹は、アルバムを取り出してあっちこちめくった。

そして、一枚の写真で目が止まった。

「奈々さん、もう、いないんだな」勇樹は奈々枝の色あせた顔を指でなぞった。そして、ぱたんとアルバムを閉じたとき携帯がなった。メールの着信のようだ。

そう言えば、最近、全然メール見てないな。どうせ、いたずらメールしか来てないんだけど。勇樹は携帯を開くとメールを見始めた。勇樹は片っ端からメールを削除していった。しかし、随分見てなかったんだな。かなり前のメールもある。「おや？」勇樹は、いたずらメールの中に、見たことの無い携帯からメールの着信があることに気が付いた。それは四カ月前のメールだった。そこにはこう書いてあった。

「お久しぶりです。勇樹、まだ私のこと覚えてる？私は勇樹のこと覚えてるよ。だって、今、私があるのは勇樹のお陰だもの。それから、ちゃんと仕事してる？勇樹のことだからきつと大丈夫だと思っけど。ところで、私は、また、手術をすることになりました。まもなく、私は手術室に向かいます。その前に、ちよつと病院を抜け出して勇樹にメールをしています。手術が成功すれば、年末には退院できる予定なので、お正月に実家に帰る予定でいます。その時、勇樹に会えたらいいなって思っています。なんか最近、あの頃が懐かしくなっちゃって。それに、勇樹の宿題の答えも聞いてなかったしね。でも、勇樹はもう忘れちゃったかな。あつ、もうこんな時間だ。それじゃ、手術が終わったらもう一度連絡します。奈々枝より」

勇樹は携帯を閉じると、顔を下に向けた。ポタポタとソファーに涙が落ちてきた。色あせたはずの写真は、今、鮮やかな色になって、勇樹の頭を次から次へと駆け巡った。その時の言葉もはっきりと心の中に聞こえてきた。あの時の思いも、心の動きも勇樹の胸にこみ上げてきた。

奈々さんは最後まで俺を呼んでたんだ。それなのに、俺は何も出ななかった。気付くこともなかった。勇樹は携帯をきつく握り締め

勇樹は、ぼやけて見える携帯のキーを何度も押し間違えながら文字を入力した。

「奈々さん、ごめんね、俺なにもしてやれなくて。ごめんね」勇樹は、決して届くことのないそのメールを返信した。

そして、勇樹はアルバムの奈々枝の写真を見ながら、いつしか眠ってしまった。

次の日の朝、メールの着信音で勇樹は目が覚めた。そこには「勇樹、大好きだったよ。ありがとう」と書いてあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229m/>

返信

2010年10月8日13時15分発行